# 肉親の叫び

## 朝総連系在日同胞旧正省墓団訪韓記録

# 肉親の叫び

朝総連系在日同胞旧正省墓団訪韓記録

## 朝総連系在日同胞の訪問を歓迎

北韓共産集団の支配下にある朝総連系在日同胞が、昨年の秋夕以来、数千人がわが国を訪問しました。しかし、不祥事もなく全員無事に日本へ帰ることができました。今年も引き続き朝総連系同胞の訪問を受け入れるつもりです。

　こうして彼らが日ごとに発展する祖国の温かい懐にいだかれ、墓参と父母兄弟との対面を通じて失われた同族愛を回復するよう配慮しています。

（一九七六年新年辞から）

**大韓民国大統領**

**朴　正　熙**

# 祖国への第一歩

下半身が不自由な張東秀さん（78・広島市在住）が長男の金東圭氏（51・釜山市）と孫たちに出迎えられ祖国への第一歩を踏んだ

前朝総連兵庫県傘下・女盟委員長の金点伊さんは兄金徳文氏と会う瞬間「もっと早く来られなかったのがくやしい」と叫んだ

訪問団がおとずれるたびに尋ね人ピケットは林立する。このおじいさんは「陸ジンヨン」という弟を探していた

姉妹の再会。31年ぶりに母国を訪問した崔聖煒さん（49）が姉さんと劇的な対面をした

60年代に入って急激に発展した大韓民国。その首都
ソウルの中心部には近代的な高層ビルが林立する

歡迎大会で国立舞踊団の唱
および「カンカンスオーレ」
農楽などを楽しんだ

48年。半世紀ぶりに母国を訪問した趙ジエスさんがアナウンサーに「もう再び離れない」と語った

北韓に祖母がいる崔貞美嬢の「少女の願い」の
絶叫に場内は涙であふれた

歓迎大会でＫＢＳ少女合唱団から花
束を贈られ同胞たちは抱き合った

訪問団員を乗せた高速バスは京釜高速道路を走り、蔚山、浦項地域の産業視察に旅立った

大阪市生野区に住む金祥彦さんは生まれてはじめて故郷の済州道を訪れ祖先の墓参りをした

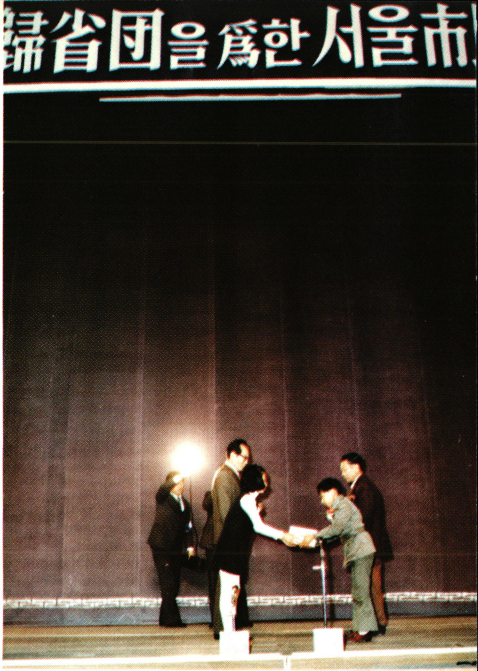
国立墓地を参拝し護国英霊に焚香する訪問団員

慶州の仏国寺を訪れた訪問団員

李さんはまた38度線境界の標石一帯も訪れた。

前滋賀朝銀副理事長の李亨植氏（59）が31年ぶりに訪韓。夫人の徐可妹さん（54）と長男の李文熙氏（33）を連れ北の南侵用トンネルを見た

ソウル市民歓迎大会で国語教科書をプレゼントされた安錫麟君




不自由な身体を背負われタラップを降りる徐乙順さん（72•広島市在住）

ソウル市民歓迎大会場の国立劇場の前で別れた血肉の名前を書いたピケットをもって肉親を探している

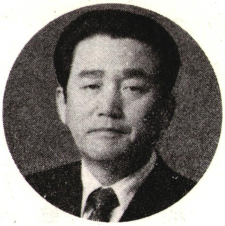
近代的な施設を備えた現代造船所を見学する訪問団員

起亜産業の自動車工場を見学する訪問団。日本製品と同じ技術水準の高さに全員驚嘆していた

□推薦の辞□

# 在日同胞旧正訪問団を送って

趙　一　済
（駐大阪大韓民国総領事館総領事）



昨年の秋夕、母国訪問団歓迎式で、韓国の老女流政治家朴順天女史は、つまる言葉で「皆さんとわれらは一つの血縁であり、この国は皆さんの祖国であります。韓国に来るのも自由であり、また帰って行くのも自由であります。そして、日本に帰って行って何をしようと、それは自由であります。しかし、皆さんが帰る時には、わが国の土をひと握りでも必らず持って帰って下さい」と語りました。

涙ぐみながら語った朴順天女史の叫びがはっきり言って、同じ血の流れた同族愛と人道主義そのものであったのです。

数多い在日同胞たちが、北傀金日成共産主義集団と在日朝総連の虚偽にみちた悪辣なそして卑劣な反民族的であり、反人道的な謀略宣伝にも拘わらず、勇気を出して旧正母国訪問団にも、日本全国で約三千人、大阪管内だけで約一千三百人が参加いたしました。

金浦空港で、全国の津津浦浦でそしてソウル市民の歓迎式場で、三〇年~四〇年ぶりの血縁の再会は、いたる所で泣き声でみちあふれたし、喜びの涙はどよめきをよび起こしたのであります。

そこに何の思想があるというのでしょうか。

また、何んらの条件がいるというのでしょうか。

訪問団同胞たちがもっとも憤激したのは、これ程までも熱烈に迎えてくれた本国政府と国民たちや親戚、そして驚くほどの変貌した祖国の目覚ましい発展ぶり、明るく明朗に、豊かに生きていく農民たちをみた時、在日朝総連の虚偽謀略宣伝にだまされてきたその事実であります。

しかし、虚偽は真実に勝てぬものということであります。

真実の前に朝総連の虚偽謀略宣伝の馬脚があらわれると、彼等は今度はとんでもない、ひどい虚偽謀略宣伝が、善良なる在日同胞達と日本社会に悪態をつくほど浸透しているのであります。

金日成共産集団は、これからも偽装平和論と金日成族閥政治、そして北傀の経済的破綻をかくそうと、すべての手段をもっての宣伝攻勢にでることが明らかであります。

そして同族愛と人道主義をうたう在日同胞母国訪問団事業を妨害するでありましょう。

しかし、日増しに繁栄する大韓民国の国力と北傀のそれに対する格差は時が経つにつれひろまっており、わが平和統一に対する三原則の真実性と現実性の前に、彼等の偽装平和論は屈服する日が間近のことと確信するのであります。

そして、自由や人権を論議の対象としない、金日成族閥弾圧政治の運命もそれほど長くはないことを確信するのであります。

終りに、この神聖なる母国訪問団事業は、これからも継続推進されねばならぬのは勿論、われらの温情に応じてくれた同胞達に、温い心で、すべての面でお互いに同胞愛を発揮し、相扶相助することを共に誓いましょう。

この「肉親の叫び」を発刊するにあたり尽力された東和新聞社とサンケイ印刷株式会社および関係各位に真心から感謝いたします。

# 真実を確認した訪問団

黄七福
（在日大韓民国居留民団大阪府地方本部団長）

当本部は、昨年六月から前後五回にわたり朝総連系在日同胞三〇〇〇名を母国に訪問させたことは周知の事実であり、この事業を推進するようになってから、朝総連の組織崩壊は、かくせない現実となってしまったのである。

朝総連は、いままで北韓が地上の天国だと信じこみ、北送に応じた在日同胞たちが、再び日本に一人も帰れなかった反面、三〇年、四〇年、五〇年ぶりに韓国を訪問した同胞等は一人の例外なく無事に帰ってきたばかりでなく、何等の制約も受けずに、自分たちの目で実際に見てきた韓国は、朝総連の宣伝とは違って予想以上の発展を成し遂げている事実を確認したのである。

それから、母国訪問を終えて帰った同胞たちは異口同音に韓国の飛躍的な発展ぶりを、ためらう気色もなく、友人、知人、周囲の人達に真実を語り、ほとんどが韓国籍を取得するため、民団に加入する数は増加の一途を、たどっており、朝総連への会費納入及び出版物の拒否も顕著なるものがある。

実際のところ朝総連に属している同胞達は九八％が南韓出身であるため、朝総連組織の幹部までが、多数母国訪問に参加し、これからもひそかに参加しようとする傾向は当然のことであり、生れ故郷をたずねることは、人間の情愛問題であるため、これを阻止することはできないであろう。

すでに五回にわたる母国訪問が実現した現時点では、朝総連の悪辣な妨害工作も水泡に帰し危惧心も完全に解消されてしまったばかりでなく、何の制限もなく自由自在に韓国のあらゆるところを見学し、本国民の熱烈なる歓迎

をうけ、しかも全員無事帰国となれば、かれらの悪宣伝も空振りになりきってしまったのである。
今や、わが民団は積極果敢に前進すべきときがきた。ベトナム落城以来、共産勢力をとらえる各国の世論は大きな変化をきたし、特に金日成の南侵野慾と策動が露呈され、一方では、朝総連内部の分裂、抗争等もからんで、あべこべに衰退はかくせなくなってきた。
当本部は昨年五月、大阪で総力安保決起大会を開いた時、四万名以上の同胞が参集したことは、前例のない快挙であるが、朝総連の集合には、千名も集まらないのが現況である。
したがって当本部は今後もこの事業を積極的に推進させて母国の発展相を自分の目で見てきて自ら選ぶべき祖国を確認してくれれば、温かく迎え入れ、愛国愛団心の昂揚に務めるつもりである。
これから母国訪問事業の結果、朝総連の組織が崩壊されていくのにつれ、かれらの妨害、陰謀工作も熾烈になる恐れがあるため、われわれは一致団結し、如何なる事態にも対応する体制を整え、断固として朝総連の発悪を粉砕しなければならない。

# 朝総連は民族的良心に帰れ

張　熙　日
（在日大韓民国居留民団
京都府本部団長）

日本から来られたおじいさん、おばあさん、二時間あれば来られたのに、三十年、四十年、

もかけていま漸やく来られたんですね。しかし、皆さんが来られる光景をＴＶで見て私のお父様は泣いていました。私のお父様は六・二五動乱当時、以北の土に祖父と祖母を残されたままひとりで自由大韓へ来られました。いまは、生きているのかどうか、消息も知らないんです。ですから、皆さんが来られるのを見て泣いておられたのです。

日本から来られたおじいさん、おばあさん！

北にいる私のおじいさん、おばあさんはどうして来られないのでしょうか？　この人たちを来られなくする人は、果して誰なのでしょうか。

去る二月五日、ソウル国立劇場で行われた在日同胞母国訪問歓迎式で、ソウル汝矣島国民学校五学年、崔貞美嬢の言葉です。

母国訪問団一同も泣き、私も泣きました。

〝私のおじいさん、おばあさんを来られなくしている人は誰ですか〟という幼い少女のその哀切な声は、いまだに私の耳に残っております。

昨年の秋夕母国訪問につづく、今般の旧正母国訪問団事業を通じて、我々は在日朝総連のその悪辣な妨害工作に、実に言うに言えない苦境を経験しなければなりませんでした。同じ血肉が互いに会い、同じ同族どうしで互いに自己の故郷を訪ずれて省墓したというのを、何故塞ごうというのか？。

血も、涙もないのが北傀金日成共産集団であり、その走狗の役目を行う在日朝総連というものを、我々は知らないわけではないが、今般の旧正母国訪問団事業を通じて、彼等の虚偽謀略宣伝が激甚となればなる程彼等の正体と本質をもう一度適切に認識されることとなったのです。そして同時に、彼等に対する憤怒をこらえきれません。これは単に私だけでなく、在日同胞各位が等しく感じておられることだと考えます。

我々は只今も彼等が一日も早く民族的良心に帰り、この塞ぐことのできない大きな波をこれ以上妨害しないよう、もう一度促求する次第です。

政治的、社会的安定と目ざましい経済発展を重ねている我が祖国大韓民国の実情を正確に見て帰ってこられた在

日同胞の皆様方は、朝総連の虚偽謀略宣伝を粉砕する証人たちでもあります。一行が直接見られ、感じられた所感を集録したこの冊子は、これまで我が祖国を、一時にしろ、誤って認識し理解された人たちに生きた教科書となることは言うまでもありません。自己も読み、隣りの人も互いに合心努力しましょう。そうして、朝総連が再び悪意に充ちた虚偽宣伝を行えないよう、この小冊子が大きく貢献することを確信します。

# 離散家族再会の途開く

李 熙 健

（信用組合・大阪興銀理事長）

民族分断三〇年の歴史の中で、もっとも喜こばしい出来事は何かと問われると私は五千人にのぼる在日同胞墓参団の涙の再会だと答えるだろう。

この再会は、単にわれわれ在日同胞の喜びのみだけでなく、祖国の南と北に別れて暮さねばならない一千万離散家族の再会に途を開き、祖国の平和統一実現への大きな礎石であるといえよう。

再会の到るところで、流した涙は、何を意味していただろうか。ソウル市民歓迎大会でのあの「少女の願い」は、我々に何を教えたのだろうか。

それは言うまでもなく、南北に離散している一千万同胞の、再会が可能であり、そのためにみなさんが力を合わせてもっと努力すべきであることを訴えたのである。

この度発刊される「肉親の叫び」には、在日同胞の真の要求が何であるかが綴られており、三〇年、四〇年ぶりの肉親との再会の瞬間に流した涙がしみこまれている。

不安と動揺で帰郷を決断できずに躊躇している同胞に、家族を北韓に送り、安否を気づかっている同胞、経済的な理由で時期を待っている同胞に、のみならずこの墓参団事業を不本意ながら反対、妨害してきた一部の朝総連幹部にまでもこの一冊が広く読まれることによって、帰郷を決断するのに、一役かう事を期待する。

一部の事実無根の宣伝が真実の前では用をなさないという事も分るはずである。

この「肉親の叫び」が発刊されるのを契機に在日同胞墓参団事業が、より拡大され、南北間で交流が実現されるまで全同胞が一致団結して協力していく態勢が、より強化される事を願う。

「となりの兄さん、姉さんは来ているのに私の家にはなぜ来ないの」と言って泣く同胞が一人も残らないその日迄、気をゆるめず、頑張るべきである。

一千万離散家族の悲しみの涙が、再会の喜びの涙と変わるとき、五千万民族が念願してやまない平和統一の実現が展望できると信ずる。

# 思想超越、祖国繁栄に

朴　漢　植（信用組合・大阪商銀 理事長）

「血は水より濃い」という古来からの言葉がありますが、朝総連系在日同胞の昨年十月

の秋夕墓参団、更に本年一月・二月の旧正墓参団の民族的・歴史的な行事に参加されました同胞の皆さんは、この言葉を身にしみて想い起されたことでありましょう。

それぞれの祖先の墓参り、親兄弟・親戚が待ちこがれていた故郷を訪問されまして如何だったでしょうか。

吾に在日同胞は、その殆んどがあのいまわしい韓日合併という屈辱の中で、日本の世界侵略という野望手段の為に、日本の徴用工として強制連行され、或いは生れ故郷を追われる如くして、日本に渡って以来数十年、その間、日本の敗戦により祖国の解放と独立を見ながら、南北分断という悲惨な現実に、北傀と朝総連の偽瞞政策と嘘偽宣伝にまどわされて、今日まで祖国の目を見はるばかりの発展を信ずることが出来なかった朝総連系同胞の皆さんに、吾が祖国と民族は心からあたたかい歓迎の手をさしのべたのでありました。

時あたかも光復三十年を迎え、私達が敬愛する朴正熙大統領閣下の偉大なる指導のもとに、国と民族を挙げてのセマウル運動・経済開発・産業立国など、新らしい祖国の建設の槌音が高鳴る祖国。

そして、つらい時も楽しい時も、悲しい時も嬉しい時も、片時として忘れることの出来なかった母国の山や川。

更に離散して以来数十年ぶりの親戚の再会。この歓喜の光景は、あなた方のみならず、私達在日同胞いな世界全人類の、あつい涙なくして見られぬ感激の瞬間でありました。

祖国は、皆さんを心から歓迎致しました。この血肉の情は、朝総連のあらゆる妨害をはねのけたのであります。

皆さん、真実の姿は美しいものであります。この感激を忘れず、これからの人生を自由に、明るく、正しく共に生きようではありませんか。

然し、残念ながら今尚目覚めぬ多くの朝総連系在日同胞がおります。

この人達に、真実を伝えて下さい。

そして「百聞は一見にしかず」の例えの通り、そうした人々にも次の機会に祖国訪問をされることを是非おすすめ下さい。

私は、今回の旧正墓参団に引卒者の一人として、皆様と共に同行した際、朴正熙大統領閣下に親しく接見を、許

されたのでありますが、その時、大統領閣下を始めとして、朝野・官民を問わず母国同胞の一人一人が、胸を広げ、心からあたたかく皆さんを迎えようとする姿を感じ涙を禁じ得ませんでした。

今回母国訪問をされた方の手記を中心とした、この本が出版されるに際し、私達は、この偉業に対し萬腔の敬意と讃意を贈ると同時に、これを契機として、真実に対し、勇気をもって理解し、いつの日か、祖国の平和統一という五千萬民族の共通の悲願実現を夢見て、お互いの立場や思想を超越して、祖国の繁栄と発展に進んで協力しようではありませんか。

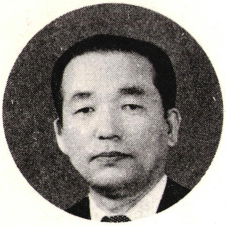
そこにこそ、皆さんの、私達の幸福があることを信じて。

□発刊に際して□

# 民族再結合の入口に

李 秀 峰

（東和新聞社 代表取締役社長）



在日朝総連系同胞たちの母国訪問団事業は、駐日諸機関、在日韓国民団及び金融機関等の盡力の結果、今や祖国が南北に分断されて三十一年、在日同胞社会も両分されて、長い間、思想的闘争、組織面での対立等でもめてきたのである。

それは終戦—冷戦—デタントにと時代的変遷を経てきた、国際政治がもたらした結果だ

ともいえよう。

しかし、わが国は、世界潮流に応じて祖国を平和的に統一し、民族の再結合の基盤を造成するため西紀一九七二年「七・四南北共同声明」を発表し、一千万離散家族の断腸の苦しみを解消させ、南北間の異質性を同質化させる、いわば容易な事業を通して南北が接近していこうと主導的に、南北赤十字会談、南北調節委員会を数回にわたり開いてきたが、それも「北」の一方的な中断措置で遂に停頓状態におちいっているのである。

昨年の秋夕から始まった在日朝総連系同胞たちの母国墓参団事業も結局、七・四共同声明がうたった人道主義的事業の精神に基づいて展開されているもので、今度の旧正墓参団事業にいたっては大々的に拡大され、全日本で三千余人も祖国を訪問、その間北韓共産集団の虚偽宣伝がどんなに悪辣であったかを実感したのである。

彼等は近代化した祖国の発展ぶりを直接見ながら、祖国の熱愛と肉親の情はどういうものであるかを自ずから体験してきたのである。

実に歴史的民族再結合の一大ロマンを展開したのだ。

この歴史的記録を永遠に残すための「肉親の叫び」は朴正熙大統領が年頭記者会見で語った朝総連系在日同胞の母国訪問事業関連部分を序文に、第一部ではソウル市民の熱烈な歓迎大会関係を、第二部では四十人にのぼる訪問団員の精魂こめた手記、第三部では言論人の随行文、美談、第四部では訪問事業に対する内外の反応、第五部では国民の声援、終りに附録、そして写真特集という形でまとめたのである。

われらは今、民族の再結合の入口に立っているのである。一人でも多くの人が、南北韓が当面している現実と、民族史の一断面をえがく真相の記録、「肉親の叫び」を愛読されるよう出版するにいたったのである。

# 目次


序文　五千万の念願 …… 29
—朴正熙大統領年頭記者会見から—
第一部　祖国は待っている …… 33
—ソウル市民歓迎大会—
祖国への往来は自由です　具滋春 …… 35
ようこそ自由大韓の懐へ　金玉吉 …… 37
待ちこがれた再会　崔貞美 …… 42
温かい同胞愛に感謝　権重錫 …… 45
第二部　祖国の熱愛 …… 49
—訪問団員の手記—
韓国！まさしく我が祖国　車鏞柱 …… 51
蘇みがえった血肉の情　朴千洙 …… 56
明るい表情の国民　盧吉夫 …… 62
オモニ！僕は自由なんだ　康奉玉 …… 64
真の民族教育を発見　権重錫 …… 67
三度も泣いたおばさん　李進浩 …… 69
論より証拠　何をか語らん　閔春基 …… 71
無言で通じた血縁　崔秀美 …… 78
だまされていた私達　鄭道植 …… 82
再帰国を老母に誓う　李亨植 …… 85
母国の大学に進学誓う　金鉉玉 …… 86
美風良俗を教えたい　金鳳熙 …… 89
命をかけた里帰り　姜喜昌 …… 92
水清く空気さわやかな祖国　金祥彦 …… 99
なくした財布が戻ってきた　韓国鉄 …… 100
若者にみなぎる覇気　姜自吉 …… 102
なつかしい祖国を訪ねて　張枰樞 …… 106
金浦空港で男泣き　崔春圭 …… 108
希望に満ちた未来を確認　康應範 …… 109
骨身にしみる同胞の熱愛　金振玉 …… 111
祖国に帰って働きたい　権　弘 …… 129
祖国に役立つ男になりたい　権正春 …… 131
漢江の奇蹟に誇り　文正博 …… 132
帰国後に朝総連と絶縁　座談会 …… 134

病弱の母、6人兄弟を連れて　歓迎会……137
信じ合う心が大事　高行洙……142
証明された思想の超越　金鍾雄……145
私が送った望郷の友人　金載賛……148
詩―血肉の情　禹博一……150

第三部　望郷の念……153
―ルポ・美談・随想―
祖国、肉親の原点　張哲男……154
幼い子供らの歓迎に胸詰まる　成美子……156
「涙の海」の再会　李義元……158
真の同族愛を発揮　金徳九……161
涙とともに到来した故郷の春　安寿吉……165

第四部　内外の反響……169
―有力紙社説、論調―
真実を見て、伝えて欲しい　朝鮮日報……170
旧正省墓在日同胞を歓迎　東亜日報……173
在日同胞の旧正省墓　中央日報……174
同胞帰省団に要望する　ソウル新聞……176
心と精神　ニューズウィーク誌……178
母国で正月を……181
―朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・関西テレビ―
平和統一の契機に　金山政英……184

第五部　もう離れまい……185
―国民の声―
皆んなを太極旗の下に　金弘壹……186
民族統一の基礎作業　尹天柱……187
私の江山よ　李孝祥……188
平和統一の可能性　白斗鎮……188
共産支配生活を清算する時　白楽濬……189
故郷は久遠のメッカ　朴忠勲……189
生き甲斐ある明日への出発　太完善……190

付　録……191
南北共同声明（全文）……192
南北調節委員会　―中断の経緯―……192
南北赤十字会談　―会談の経過―……199

# 序文

# 五千万の念願

朴正熙大統領 ―年頭記者会見から―

今、中断のままになっている南北対話を正常化する妙案があるか、と問われますと、そういう妙案はないといわざるを得ません。

南北対話については、これまでも機会ある度に述べたように、忍耐が必要です。忍耐と誠意をもって北韓が対話の広場に出てくるよう、あれこれの方法で促さなければならないし、また相手が応じてくるまで忍耐心をもって待ち続けなければなりません。我慢しながら待つことはいくらでもできます。ところが問題があります。それは、北韓共産主義者たちに南北問題解決を果たして平和的に解決する意思があるかどうか、ということですが、これこそ南北問題解決のカギであると考えます。

もし、かれらが基本的に平和に基づいた考え方をしているとすれば、対話が中断し、停滞を続けていても、それは大きな問題ではありません。しかし、もしそうではなく、かれらの腹の内が表向きの平和宣伝とは裏腹に、武力や暴力をもって対決したいということであれば、われわれが忍耐をもって当たるということは意味がなく、また、かりに会談を百回開いても時間の浪費に過ぎないということです。

かれらは機会ある度に平和、平和と叫んでいますが、実際の振舞いを見ますと、かれらのいうことは、到底信じることができません。

七・四南北共同声明が発表された直後に、かれらが南へのトンネルを掘りはじめたことをわれわれは知っています。かれらは、掘ったのは自分たちではないと、しらを切っていますが……

それどころか、南側からわれわれがトンネルを掘ってでっちあげていると、こちらに濡衣を着せようとたくらんでいます。一昨年の八月十五日に私を狙撃する目的で文世光を送り込んできたことは、すでに周知の事実ですが、文世光を取り調べた結果、七・四共同声明の発表された年の秋に狙撃を指示していたことがわかりました。

このテロについても、かれらは、自分たちの仕業ではなく、南側のでっちあげであると強弁しています。共産主義者たちはもともと平気でうそをつくのですから、かれらのいうことにいちいち関心を持つ必要はないかも知れません。全世界が知っている六・二五南侵でさえ否定し、南の北進であると、今なおいい張っている始末です。

しかも、南北対話の最中においてすら、かれらはなにを企てていたかといいますと、武装ゲリラを送り込んだり、スパイを派遣、わが社会の学園など各界に潜り込ませて地下組織を作りあげ、内部攪乱をはかりました。また、全世界をまたにかけて駆け回りながらわれわれを中傷誹謗、または悪宣伝を欲しいままにしました。こういう振舞いを見る時、かれらのいう平和を、われわれが果たして信じることができるでしょうか。

われわれの見るところでは、北韓共産主義者たちは、どこか狂っている……なにかとんでもない妄想にとりつかれていて、そこから脱け出すことができずにいる、こう考えないわけにはいきません。

しかし、かれらに対して率直に忠告したいことは、それは絶対にあってはならず、また到底実現できない妄想であることを悟らなければならない、ということです。

いわゆる「南朝鮮革命」とか赤化統一などといったたわごとは、金輪際やめて欲しい。私の見るところでは、そういうわからず屋の冒険が成功する機会はもうとっくに過ぎ去った、時すでに遅し、ということです。

いま残された道は一つしかありません。それは、われわれが好もうと好むまいと、南と北が互いに対話を通じてやさしいことから一つ一つ解決していきながら、この地に平和を定着させるために努力し合うことです。

このようにして、統一につながる条件を一つ一つ協力し合いながら築きあげていこう、ということです。これこ

そ統一を早める道であると、私は考えます。以上のようなことは、われわれが提唱している平和統一に関する三大原則とも同じ意味合いのものです。もし、この時期に南と北が再び戦争をするとすれば、勝ち敗けはさておいて、南北統一が少なくとも五十年は遠のくだろうと私は思います。

そこで、われわれはどんなことがあっても戦争だけは避けねばならない、そしてそのためには先にも述べましたように、当面のわれわれの最も大きな関心は、統一よりも平和でなければならない、――こういうことです。平和が定着してこそ、統一問題も一層速やかに解決し得る糸口を発見することができます。平和の定着なくしては統一も望めないし、戦争の危険は残るわけで、これはいけないことであると思います。

南北問題は、どのような方法でもよいから南と北が対座して話し合い、合意なり了解に達するのでなければ、なに一つ解決は望めません。これまでに国連で票の対決を数十回も行ないましたが、南北間の合意や了解の成立がなかったために、案件の可決、採択はほとんど意味をなさなかったのです。国連では、わが大韓民国を支持する西側案がいつも圧倒的な多数票を得て勝ちましたが、共産側の反対のために、問題は一つも解決できなかったわけです。

昨年の第三十回国連総会で、共産側案がはじめてやっとのことで採択されました。かれらは、有頂点になっているかも知れませんが、通過したところで何の意味もありません。われわれと合意し、了解が成立するのでなければ、たとえ百回採択されたとしても実質的な効果はなく、なんら拘束力もありません。

われわれは、南北対話を再開しようと何度も呼びかけてきました。その都度、北韓側ではいろいろとわれわれが受け入れることのできない条件を持ち出して来ました。北韓側の条件はわれわれが受諾できないばかりでなく、一つとして理屈に合っているものがありません。これはなにを意味するか、話合いは無用、ということにほかなりません。

ソウルで会談をやろうと申し入れると、ソウルはふん囲気が悪いからだめだ、といっているようですが、ソウルの空気が平壌の空気より悪いことは、まぎれもない事実でしょう。ソウルは平壌に比べて車が沢山走っているからです。しかし、空気が多少悪いからといって、南北対話がやれないはずはありません。北韓共産集団の支配下にある朝鮮総連系在日同胞が、昨年の秋夕以来、数千人がわが国を訪問しました。しかし、どういうこともなく全員無

事に日本に帰ることができました。

そして、毎日、数千人もの外国人観光客が韓国を訪れていますが、不祥事件は一つも起こっていません。ソウルのふん囲気が悪い、というわけがわかりません。

また、北韓共産集団は、われわれに法的、社会的環境を改善せよとか、民主愛国人を釈放せよとかいって、こういう要求がみたされない限り、南北対話に応じるわけにはいかない、こういい張っているようです。

ところが法的、社会的環境を改善せよということは、はっきり言いますと、大韓民国は反共体制をことごとくかなぐり捨てろ、ということではないでしょうか。反共法とか国家保安法をすっかり廃棄してしまって、共産主義者が大韓民国に乗り込んで来て大手をふって歩き回り、勝手に泳ぎ回るようにせよ、ということにほかなりません。北韓共産主義者たちがこういえば、われわれも返す言葉があります。

では、北韓側も全く同じようなことがやれるか、こうききたいわけです。かれらは「民主愛国人士」を釈放せよ、といっていますが、その「民主愛国人士」とは、一体、どういう人物を指しているのかはっきりしませんが、われわれにいわせれば、国家に反逆した国事犯であり、共産主義のスパイ、共産主義への協力者にほかなりません。こういう人物をどうして釈放することができるでしょうか。

では、われわれが北韓に対して、われわれが民主愛国人士と考えている人物、たとえばこれまで粛清された人びとや現に身柄を拘束されている人びとをことごとく釈放せよ、と要求したとしましょう。すると、共産主義者たちは果たして受け入れるでしょうか。このように、北韓はわれわれののめそうもない難題を持ち出して、要求が通らないから対話をボイコットするほかないとして、宙に浮いた対話の責任があたかもわが方にあるかのようになすりつけているわけですが、それはとんでもないということをはっきり言っておきたいと思います。

そのように理不尽な我執と妄想を捨てて、対話の広場に条件なしに出てくるよう、われわれは今一度勧告します。

この道だけが、民族を心から愛し、同胞を思い、ひいては平和統一を繰り上げて達成する方法であると、われわれは確信しています。また、この道だけが、南北五千万同胞の一様な念願であると私は信じています。

# 第一部

# 祖国は待っている

## ‖ソウル市民歓迎大会‖

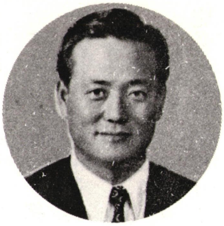
# 第一章　時間を計っている

――ヒトの時間感覚――

**大会辞**

# 祖国への往来は自由です

ソウル特別市長　具　滋　春



親愛なる在日同胞の皆さん。

皆さん達の母国訪問を喜んで歓迎し、首都ソウル市民の熱愛を、ソウル市長である私が代表して伝達するのであります。

たとえ、祖国の領土が分断されているとは言え、毎年春はやって来たし、花も咲き乱れたのであります。その度毎に祖国の母親は、古里の友達は皆さんを思い、慕ってきました。

諺に「北から来た胡馬は北風を向って立ち、南から飛んで来た鳥は南側にのびた樹の枝に巣をつくる」と言っています。

皆さんは、このなつかしい故郷をここに置き去り、今までどこで何をしていて、今になって帰って来たのですか？

親愛なる在日同胞の皆さん！

しかし、われわれはよくよく知っています。皆さんの異郷暮し三十年が、どれ程苦しく痛ましかったかをあまりにもよく知っています。それ故に、皆さんに対する怨みはありません。苦情に満ちた皆さんの身と霊魂に温かく、こじんまりした故郷の春を呼び寄せ、慰労し、かばってやりたい心情のみであります。

今日、この場で皆さんとこんなに相対面してみるに、ただ、なつかしく喜ばしいのみでございます。この嬉しさ

と喜ばしさはどこから来るものでしょうか？　それはおそらく、皆さんとわれわれが一つの血縁でつながれている一つの同胞であるという以外には、何をもっても説明することはできぬものであります。

そうであります。われわれは同じ民族であります。古里を同じゅうする同郷人であります。われわれがお互い会えぬ何らの理由もありません。

親愛なる在日同胞の皆さん。

大韓民国は自由の国であり、誰でも気軽に来て帰られる開放された国であります。

われらは、六・二三平和統一外交宣言以後、世界すべての国と、そして世界すべての地域の人類達と思想、理念を超越して平和善隣の関係を結ぼうとしています。その国がソ連であろうが、中共であろうが、われらを害しないとするならば、一緒に仲良く生きていく道を見つけるでありましょう。われらが、目の色が違い、皮膚の色が異なる他民族とも平和共存をしようとするのに、どうして一つの血縁でつながる皆さんとわれわれが会うことができぬ何らの理由があるのでしょうか。

私は今日、皆さんとわれわれがこのように対面したのは、思想とか、主義という政治の壁を、人道主義という同胞愛でもって乗りこえた偉大なる民族の勝利だと確信するのであります。

今日のこの席上は、主義や理念を越えて、民族の同質性を回復することができるのを証明する大雄弁場であります。そういう意味で今日は、また他の一つの歴史が始まる偉大なる出発の日でもあります。この新しい歴史は、祖国の統一を志向するわが民族の聡明さであり、宗教でもあります。

親愛なる在日同胞の皆さん。

われら皆が力を合わせ、この新しい歴史の道を開拓していきましょう。それがために、同胞達であるわれらの間の愛と友情はもっともっと深められねばならず、もっと固められねばなりません。

皆さん。

これからも度々おいで下さい。

皆さんが異郷暮しをするようになったのは、皆さんが故郷を捨てたわけでもなく、また古里が皆さんを追放したためでもありません。ただ、民族史の一ページにしるされた汚点が、皆さんに異郷暮しをさせているのみであります。皆さんが故郷に帰るのを妨害する者は誰もないのであります。

何卒、度々おいで下さって、母国のふところで異郷他国での孤独をときほぐし、なだめて下さい。

もう一度、七百万ソウル市民の温かい愛と歓迎の意を伝えながら、簡単なあいさつをするのであります。

**歓迎辞**

# ようこそ自由大韓の懐へ

梨花女子大学校総長　金　玉　吉

このたび母国を訪問された在日同胞の皆さん！

故郷を欲した歳月は果して何年だったのでしょうか？　昔流行した歌にこんなのがあったことを記憶されておられるだろうか？

異郷ぐらしは果して何年
指折り数えてみると
故郷を離れて十余年
青春のみ老いて

十年の歳月が流れてさえ青春が老いたというのに、三十年、四十年の歳月は、皆さんに青春だけでなく、その他

のあらゆる喜びと華麗さをもち去ったと信じます。他郷に生きるということが、果して容易なことでしょうか？山も、川も、風俗と習慣と言語が違う他国で、不馴れの人たちに侮辱をうけながら生きる間、皆さんの若さは営々として流れてしまったのです。皆さんが日本に向って出発された時のことを、一度振り返ってみましょう。

日本がアジアのみならず、世界を征服する野望にみちた大東亜戦争の時節であったでしょう。生活の基礎を準備するために、自ら進んで玄海灘を渡った人たちよりも、日本政府の強制にうちかてず、拉致された人たちがもっとも多かったと推測します。あるいは徴用で、あるいは学兵として、わが民族はあちらこちらと拉致されながら、国なき国民の悲しみが胸にしみた——そういう時節です。私も男兄弟一人を、そのようにして失ってしまった痛い傷をもっております。待てども待てども、その人は帰ってきませんでした。

解放になっても彼は帰ってきませんでした。今日も待ち、明日も待つでしょうが、彼は永遠に帰れないでしょう。ところで、皆さんはこのように自由大韓へ帰ってこられました。懐しい父母兄弟と親知たちに会いにこられました。いかに嬉しく、感激的なことでしょうか？

皆さんの親せきと親知たちが、この大韓民国のここ、そこで、皆さんに会うべく渇して待っていて、いま会えたのですから、その喜びと誇りはどれ程大きいでしょうか？　皆さんは、はっきりと見られたことでしょう。皆さんの祖国がいかに大きく育ち、多く発展しているかを！　皆さんは確実に感じられたことでしょう。祖国の懐がいかに温かいかを！

解放になって三十年、その中でも過ぎ去った十五年間に、わが大韓民国は、歴史に類例がない程目ざましい発展を収めました。不幸だった六・二五の傷をいまそっくり洗い、新しい時代、新しい世界に適応してよい暮しをしてみるため、最大の努力を傾けております。

蔚山工業団地の数多くの煙突は天を突くように、祖国近代化の力いっぱいの隊列は休むことなく前進を重ねています。迎日湾に位置する雄壮な熔鉱炉からは一日二十四時間、一年三百六十五日、一日も休みなく熱い炎がたちのぼっています。亀尾工業団地の最新式工場群は、公害なき産業として、工業韓国を輝かすべく身もだえし、そこ

で私たちの若人たちは、昼夜汗を流して働いています。

商売をする人たちは、品物を一つでもより良くつくり、より多く売って外貨を稼ぎ、私たち皆んなを暮し良くさせようとの決心で東奔西走しております。米国へ、日本へ、カナダへ、南米へ、ヨーロッパへ、中東へ、東南アへ、アフリカへ、わが国商品は、いかざるところなく、歓迎しない時がありません。

何年か前だけでも、韓国が地球上のどこについているのかさえわからなかった人たちが、いまやはじめて、コリアの存在を確実に認識し、わが国民の勤勉さと誠実さに感嘆せざるを得なくなっているので、このような祖国に持っているわれわれ全ての大きな誇りでなくて何でありましょうか？

今日、わが国の教育水準は、驚く程の速度で向上されております。カバンを持ち登校する学生たちの姿を見られたことがありますか？　いまは休学中の学校が多くて、この国の教育の実情を実感をもって観察される機会がないのかも知れませんが、各級学校が新春を迎えていっせいに門を開いてみれば、それこそ壮観であります。

韓国では、頭も良く熱心でもあるのに、お金がなくて学校に通えない場合は極めて珍しいことです。奨学制度のために各界各層の篤志家たちがおり、頭の良い堅実な若人たちに学びの道を開いており、わが社会に漸次貢献できる機会を用意してくれます。

いまでも、貧しい人たちがいることは事実であるが、その貧しさをのりこえて成功しようとの闘志にまた驚くのです。

私が身を処している梨花女子大学校には、八千名の女性が教育を受けております。私は時たまこういうことを考えてみます。

若し私たちに解放がなく、従って受け入れ、仕える祖国がなかったとしたなら、この多くの韓国の娘たちが果して大学教育を受けることができただろうか？

故郷に帰って来て何を見、何を感じられましたか？　一つの血を受け、一身を成した祖国の懐がこじんまりしていませんでしたか？　皆さんの故郷の小屋がいまでも前の通りでしたか？　でなければ、セマウル運動の波の中に

新しい姿へ変ったんでしょうか？　昔の詩人の歌のように、山は昔の山で、水は昔の水ではなかったでしょう。

老いた父母は、既にこの世を去り、その墓の上には白い雪が覆っているが、兄さん、姉さん、甥、兄弟は、いまでも生きていて、故郷の土を守り、熱心に生活しているでしょう？　皆さんたちは故郷の血肉たちを夜も昼も欲するもののように、渇望しました。私たちの祖国が苦難の歴史を踏み、力強く前進する現在、私たちも私たちの過去を忘れて、光明なる未来に向って明るく真実に前進しましょう。昨日が問題ではなく、今日が問題なのです。

過ぎた日にあれ程欲した心情もいま、家の中の家族たちと昔の親友に会い、真昼の陽光に雪がとけるように、やるせなさが消えることを経験されたでしょう。それと全く同じように、われわれの歴史にも、患いが多く、われわれ個人の生活にも困難が多かったのです。

しかし、過ぎたことだけを考えていて、現実に対処する機会と勇気を失えば、それよりももっと大きな不幸はないでしょう。

私たちは、今日分断された祖国に生きております。自ら願って、先祖が与えてくれた祖国の江山を二つに分ける国民がどこにありますか？　私たちは強大な国の政治的取引きの結果として、この悲劇に直面することになったのではないのですか？

私たちの運命は、私たち自らの力によって打開していくほかありません。他人が私たちを助けてくれることを望んではならないし、また望んだとしても私たちを助けてくれることもありません。

いま南と北は、お互いに話し、お互いに協助し、平和的に祖国の統一を実現しなければならないという大韓民国の基本方針には、決して動揺がないものと確信します。これからも日本の地で暮らさなければならない皆さんの子孫たちが、矜持と自尊心をもつようにしましょう。彼らが韓国人の父母を持ったという事実を、限りなく誇り高い事となるようにするため、この時代を生きるわれわれは、彼らに「光栄みちた祖国」を与えなければなりません。

私たちが正しくし、私たちが立派になれば、その光栄が、すべて私たちの後孫の光栄となるもので、万一そのようにできないとするならば、その不幸が、わが後孫たちの不幸となるものです。

田舎の味噌汁の味は前の通りでしたか？　親類の若奥様が漬けたキムチの味はそのままだったでしょうか？すべての難しい問題をしりぞけて来られた皆さんのその決心は立派であります。ほんとによくやりました。また来て、また来て下さい。

他の親知たちと一緒にいつでも来なさい。祖国は何時も皆さんがまた来られることを待ち焦がれています。かつて、丙子胡乱の時、忠臣金相憲がこのように吟詠しました。

さようなら　三角山よ
また会おう　漢江水よ
故国　山川を
去ろうとはするが
歳月が　ああ変遷して
再び会えようか

三十～四十年前、故国を離れる時の皆さんの心情と感懐がそうだったのでしょう。故郷を離れ、他国に行く旅人の悲しみをよく理解することができます。しかし、いま歳月は流れ、時代は変わりました。皆さんは、いつも願われる日、願われる時に故国・山川を訪ね、懐しい人々に会うことができます。ソウルの七百万市民だけでなく、大韓民国の三千五百万同胞が一つのような心で皆さんを歓迎するものです。

愛する家族たちの懐に帰られた皆さんの足どりごとに天の神の保護がともに施され、皆さんが行われるすべての事業に、天の神の祝福がさらに深まることを祈りながら、ソウル市民を代表して皆さんを歓迎する挨拶に代えるものです。

過去は、泣く涙で漢江に流してしまい、今日は祖国の懐で喜び、明日は栄光ある祖国のため一つとなりましょう。感謝します。

□少女の願い□

# 待ちこがれた再会

崔貞美（汝矣島国民学校5年）

里帰りしたおじいさん、おばあさん、私は汝矣島国民学校五年生の崔貞美と申します。

私のお父さんがおっしゃるのには、昔は、わが国の歌もうたえなかったし、誰が見ているかをおそれて、ウリマル（ハングル）も隠れて習ったといいますね。

しかし、今、私達は運動場がひびかんばかりに歌いたい歌はうたえるし、私の先生は何事でもみんな教えてくれます。

今、私にはおばあさんがいません、おじいさんがいません。

私の友達のほとんどが、おばあさんおじいさんと一緒に暮していますが、私には、おばあさん、おじいさんがいません。

実は居ないのではありません。おられても会うのができないのであります。

私のおじいさんとおばあさんは、三八度線のむこうの元山に住んでいるとのことです。

六・二五動乱の時、おじいさんやおばあさんにおし出されるようになってお父さんとおじさんが南の方に避難して来、すぐにも再会できる思いであったのだが、今になっては何の便りもなく、安否も全然知らぬようになったのだとおっしゃっています。

それで、お父さんは名節の日が近づくとご飯も食べずに、ぼんやりと窓際に立ち、北方の空をながめる習慣が身

につくようになったのだといいます。

いつの日だったか、お父さんは会社から帰ってきて、赤十字社の世話でおばあさんとおじいさんの安否を知り出すことができるかも知れぬと、おどりでも踊るように喜んでいました。

それが、それが日が去り月がたっての或る日、酒に酔って帰ってきたお父さんは、なぜか一人で泣いているのを私はみたのであります。

お父さんがなぜ泣いておられるのかは知りませんでしたが、お父さんが泣いておられると、私も涙がにじみでてほほを流れるのをおぼえました。

私のお父さんを泣かせたすべての人々がにくくてたまりません。ほんとうに、ほんとうに憎くてなりません。

昨年秋夕、日本に住んでいるおじいさん、おばあさん達が始めて韓国に来た時、兄弟が、また親類達が抱きあって泣いているのを私もテレビジョンでみました。

あるおじいさんは、飛行機から降りるやいなや、地面にほほをこすりながら泣いているのをみて、うちの家族はみんな泣いたのであります。

お父さんも泣き、お母さんもなきました。

側にいたおじさん、おばさんも顔をうつむけて目がしらをおさえていました。

私もあのように、おじいさんやおばあさんに会えることができたらと思うと涙がでて、どうしようもありませんでした。

私の友達である恵英のおじさんは日本に渡って住んでいますが、恵英が生まれるずっと前から便りがきれて、恵英はおじさんの顔すら知らぬとのことです。

しかし、恵英のおばあさんはこの頃、飛行機の音がなると床からはね起きる習慣が身についたといいます。

ひょっとしたら、日本に住むおじさんが帰ってくるのではないかとの期待からでしょう。

でも、恵英のおじさんは何の便りもないとのことです。

日本に住む親類達がみんな帰ってきて、お互い抱きあって喜んでいるのに、恵英のおばあさんはおじさんの帰りを待ちながら、ご飯も食べずに待つばかりだとのことです。

恵英のお父さんやお母さんが膝まずいて何日も訴えたが、ご飯は食べず涙だけを流しているとのことです。で、恵英のお父さんもお母さんも共に泣いているといいます。

この場にきて下さったおじいさん、おばあさん、恵英のおじさんはいつになったら帰って来るし、私のおばあさんとおじいさんはどの位待てばあえることができるでしょうか？

なぜ、誰がために会えることができぬのか答えて下さい。誰のせいか、何の理由で会えぬのか知りたいのです。教えて下さい。

お父さんがかわいそうでたまりません。

恵英のおばあさんがかわいそうです。

里帰りしたおばあさん、おじいさん、故郷の皆さんがすべてあなた達を喜んで迎えてくれるでしょう。

もっと早く来て、私達が育っていく姿をみたくもなかったのですか。

今、私達は元気よく歌をうたいながら、仲間同士で固まり、熱心によりよく生きていこうと働いているのに、なぜ、なぜ今になって帰ってきたのですか。

里帰りしたおばあさん、おじいさん、私はおばあさんのお宅に遊びに行き、おじいさんの手をとり動物園も見廻り、オモチャの汽車を乗る子供達が一番羨ましいのです。

それで、私のおじいさんとおばあさんにあいたくてたまりません。でもおじいさんやおばあさんは、私がこの位育ったことを全然知らないでおられるのでしょうね。

私のおじいさんとおばあさんには、いつ、このように会えることができるでしょうか。

陰暦の元旦の朝、お父さんはもう一度泣きました。ほんとうにお父さんがかわいそうでたまりません。

里帰りしたおばあさん、おじいさん、ぜひともたびたびおいで下さって、私が会えぬおばあさんやおじいさんの

役割をして下さいね。
私がうちのおじいさんやおばあさんに会える日までのお願いであります。
では、また会える日を待ちわびています。
さようなら。

答辞

# 温かい同胞愛に感謝

在日同胞旧正省墓団代表　権　重　錫
（前東京朝総連系学校教師）

尊敬するソウル市長へ！
親愛なるソウル市民の皆さん！
そして情愛深い母国同胞の皆さん！
今日、私たち墓参団一行は、この温かく、盛大な歓迎に、溢れんばかりの感激と感懐を抑えることができません。
祖国が日本から解放されておよそ三十余年。この永い歳月が流れる間、祖国に背いて生きてきた私たちを、このように盛大に歓迎してくださり、私たちはただ恐縮するほかありません。三十年、四十年ぶりに祖国に来ましたが、一本の木、一本の草にも祖国の息づかいが漂い、一粒の小石にも祖先の汗の滲んだ跡が

残っておりました。むなしく流れる風からも、同胞たちの温かい愛を感じることができました。

からすやかささぎも、日が暮ればわが家に帰るというのに、このように情愛深く、懐しい祖国を目の当たりにし、これまで何をどうして、他郷で暮らし、三十年をさまよってきたのかわかりません。考えてみても、限りない後悔と悔恨が骨身にしみるばかりです。故郷に帰って来ても、父母はすでに亡くなっておりました。

皆さん！ 私たちは不孝息子です。しかし、故郷の同胞たちは、このような私たち不孝息子をいやだといわずに、私たちが行く先々の沿道で、零下の寒さにもかかわらず手を振り、私たちを歓迎して下さいました。

母国同胞の皆さん！

私たちが見た祖国の姿は、ほんとうに驚くべきものでありました。雄大な総合製鉄所と超近代式精油工場、そして完全国産化の自動車工場などを見て、私たちは真実の祖国を今更のように悟りました。この響きわたる祖国の姿が、ほんとうに誇らしく思いました。そして喜びました。しかし、その反面、憤りを感じました。騙されてきた三十年に憤りました。お金がなく、今でも素足で通い、電気がなくて暗黒世界だという祖国がこのように発展したのを見て、私たちはもう死んでも悔いがないと思いました。

祖国におられる同胞の皆さん！ 私が祖国を訪問するということは、そんなにたやすいことではありませんでした。朝総連組織は、私たちの母国訪問を妨害するために手段と方法を選びませんでした。彼らは帰郷同胞の家の中に二十四時間座りつづけ、威脅と恐喝を行いました。北から来た万景峰号は、工作員をいっぱい乗せて来て、方々へ配置し、妨害工作を陣頭指揮しました。

妨害工作の手段も様々でした。母国訪問旅券を見たいと奪っては、返してくれないこともありました。私たちと一緒に来たあるハルモニは、朝総連幹部である婿から「万一母が韓国に行けば、あなたの娘と離婚します」という、あきれた脅迫まで受けました。さらには、母国に来ようというオモニが、朝総連である子供に髪を引っ張られてつかまり、むち打たれた方もいました。私たちが日本を発った最後の日、彼らは空港まで追いかけて来て、個々人の写真を撮りながら威脅雰囲気を造成したりもしました。しかし、どんなに朝総連の妨害工作が乱暴で、悪辣であっ

ても、血を取り戻そうとする私たちの熱望を決して消しさることはできませんでした。私たちは、すでに昨年に秋夕省墓団が母国訪問を終え、無事日本に帰って来たことをよく知っています。

私たちは、今度の祖国訪問の途で、いくつか明確な事実を発見しました。それは第一に、私たちがこれまで騙されて来たということです。第二には、これまで生きて来た過去は、すべてが虚しいということです。しかし、私たちは一つの無限に尊く貴重なものを得ました。それは、今度帰省の途で、私たちが失った民族魂を再び取り戻したということであります。私たちの胸には、祖国と民族に対する誇りが再び燃えはじめました。この誇らしい矜持と感激は、明らかに私たちの第二の誕生であります。

皆さん！　私たちは再び生まれたのです。私たちは第二の人生をはじめたのです。そのような意味で、私は次のように提議する次第です。

今日は、時あたかも立春となる日であります。

春の瑞気が始まる日です。

私たちすべてがめぐって来る春に再び戻って来て、自分の故郷に一本ずつの木を植え、私たちの第二の誕生の記念しましょう。その木に私たちの名札をつけて、毎年毎年故郷に帰って来て、育つ木の姿を見守ることにしましょう。これは母国同胞の血と汗を流した努力に対する、そして真心をこめた歓迎に対する最少限度の報答なのであります。

祖国におられる皆さん！　私たちの帰郷は、このように胸が溢れるばかりのことです。しかし、私たちは、今度の帰省でもう一つの悲しみを味わいました。先の幼い少女の哀絶な呼訴にもありましたように、故郷に帰り三十年、四十年ぶりに省墓する私たちを、むしろねたましい目で眺めている一千万離散家族のことであります。

先にも述べました「肉親の情」という映画で、ある俳優が、在日同胞は秋夕省墓に来たのに、自分は故郷が以北であるために省墓もできない不孝者と泣いているのを見ました。私たちは、海を越えた日本からも故郷を訪ねて来たのに、一つながりの祖国彊土で、行きたくても行けず、故郷の空だけを見上げておられるこの人たちの胸こそ、

どんなに痛いでしょうか！
私たちが故郷に来たのですから、この人たちも大韓赤十字社が提案しているように、故郷に行くことができなければならないと確信します。それが民族を愛する道であり、真の人道主義の道でなくて何でありましょうか？
そして、もう一つ申し上げたいことがあります。現在でも日本には、朝総連組織に縛られ故郷に来たくても来れない多くの同胞たちがいます。彼らにしても、故郷が恋しくないわけがありましょうか？
故郷に帰ってみると、祖国では在日同胞母国訪問支援運動がくりひろげられています。その温かい同胞愛に対し、ただ頭が下がり、感謝する次第です。今後も継続して、私たちを声援して下さり、激励して下さることを願います。
私たちは、日本に帰り、私たちが見た祖国の真実を彼らに夜を明かしてでも、また道行く人をつかまえてでも、すべてを伝達することを母国同胞たちの前に、固く固く約束します。そして在日同胞全体が、私たちのように、ほんとうの祖国を取り戻すようにします。
三千五百万母国同胞の皆さん！　そして在日同胞の皆さん！
私は、最後に、この栄光ある壇上を降りるに当たり、次のように主張します。
これから私たちは、絶対に騙されません。
これから私たちは、絶対に裂けられません。
そして祖国の平和と繁栄のため、私たちの持つ力と誠意を尽すことを固く誓約するものです。

# 第二部　祖国の熱愛

## ＝訪問団員の手記＝

# 韓国！まさしく我が祖国

車鏞柱
（八尾市大字竹渕二六七―二）
（前朝総連生野東支部財務部長）

ある日、私の病室に一人の見舞客があった。私は両手を差し出し、その友人を歓迎した。いつの間にか病魔と闘っている自分を忘れ、しばらく時を過ごした。時をおいてその友人はおもむろに言うのであった。

「おい、韓国を訪問する気はないか？」と。私は呆然とした。まさかその友人から聞くとも予想していなかった言葉だったからである。「えっ!! 何だって？」もう一度聞かざるを得なかった。私の唯一の友人であり、ゴルフ仲間の高仁鎬君を凝視しながら、返事をちゅうちょしていたのである。

そう言えば三年前も、今は亡き妻が「韓国へ行ってみたい。」ともらしていた言葉が脳裏をかすめるのであった。

退院後、韓国訪問のことについて他の友達に相談したが、けんもほろろに「おまえ、殺されに韓国へ行きたいのか？残される子供達はどうするのだ。」と。数日間悩んだあげく、遂に意を決し、韓国総領事館へ真意を確かめるため乗りこんだ。するとどうだろう。我々の前に現われた高光春領事は、言葉少なに韓国訪問の「決意」をほめてくれた後、

「韓国に行かれても、あなた方は何の束縛も受けることはないでしょう。

また、日本へ帰ってきても、あなた方は自由なのです。好きな様に振舞って下さって結構です。もちろん、我々の悪口を言って下さってもかまいません。何の条件も要りません。」と、明確に答えた。私は内心「ほんとうかな？」と疑いを持った。次いで、趙一済総領事は、何の気どりもない、そして我々僑胞だけにわかる暖かさで部屋へ案内

して下さった。まるで自分の家にでもいる様な気楽さを覚えた。

開口一番「着実に近代化への道を歩みつつあるありのままの母国、そして韓国が、今後何をめざしているかを見て来て下さい。」といわれ、我々の関心事に的確に答えて下さった。

それでも一沫の不安をどうしてもぬぐい取る事が出来ず、大阪興銀の李熙建理事長までわずらわせてしまい「あなたの事は一切、私が保証するから安心して祖国を訪問しなさい。」とまでも勇気づけてくれた。

早速、子供達を集め、私の韓国訪問の決意を告げた。子供達は当然私を半信半疑の表情でじっと見つめていた。そして一言、「俺は韓国へ行く。もし韓国で行方不明になっても、お前達の事は、親類の人にまかせてあるから。」と、半ば遺言めいたことを口走りながら、自分自身にも韓国訪問の決意を促したのである。

遂に、一九七六年一月二十四日、私を乗せた大韓航空機は、一路ソウルに向け飛び立った。近くて何と遠い国だったろう。自然と目がしらが熱くなり、「妻と一緒に行けたらどんなによかったろう」と思い、家庭騒動までまきおこしたいろんな事件を後悔しながら、祖国の土をこれから踏みしめるのだという快い興奮を押えつつ、機内の人となったのである。

一九四六年、解放された故国でしばらく生活した私は、祖国がどんな変貌を遂げたか、一刻も早くこの目で見たい気持ちで一杯であった。二十八年間、朝総連組織に積極的に献身し、自分の祖国統一のために、この道しかないと信じていた私。

今日の韓半島の政治・経済も、北側は完全に解放されたが、南側は日・米帝国に植民地化されていると教えこまれた事が、真実なのかどうか。

米帝カイライと北側の対立——極めて非現実的、独善的見地で、今まで見て来たのであるが——。最近になってこれらに関して多少の疑問を持ち始めたのも事実ではあるが、しかし、根本的に対立するのは、米帝と北側であるとの考えは、未だ捨て切れなかった。

今度の祖国訪問で、これらの事が真実であるかどうかを見てやろうと——。

もちろん、「たった一回の旅行で何がわかるか？」と反問する人もいるだろう。

しかし、これは外国人の観光ではない。私の母国なのだ。民族の血筋なのだ!!かいま見ただけでも、肌で知る事が出来るに違いない、と思った。

ふと自分自身を振り返ってみた。私こそは、解放後一貫して、南側の解放のための金日成の「極左冒険主義」が変造してしまった犯罪的所産に過ぎないのだ。そして最近における異常なまでのカリスマ性の高揚すら、祖国の統一というより、南側の解放（共産化）のための必要悪として是認して来た私だった。したがって、愛国か売国かがすべてに優先するのが自分の信条であった。それが間もなく解きほぐされたのだ。

金浦空港に降り、我々を迎えた税関では、ほとんどフリーパスに近い状態であった。バスでソウルに着いた。よく整備された道路に、自動車が頻繁に行き交う。ホテルに到着。部屋の割当にも大変だったろうと思う。

朝総連での統制ぶりを、よく知っている私にとって、世話人達が声をからして走り回っているのを見た時、むしろこれこそ自由の国だな、と微笑を浮べた。

自由！　韓国に於いて、すべてが全く自由というのは、どうしても不可能な事であると理解された。何故なら、現在おかれている状況に照らしてみる時、国の秩序を保つため、特に韓国動乱の経験により、これだけは絶対に守らなければならない国民的コンセンサス（合意）、それが『反共』であり、『防諜』である。北側体制に対する韓国民の拒絶反応を、私は至る所で痛感した。

「ボロをまとい、飢えている南半部の人民」という宣伝が如何に滑稽なものであるか、ソウルを見ただけで、はっきりと確認した。終生変ることがないであろうと思われた私の共産主義に対する指向性みたいなものが、頭の中で音をたてて、こなごなに砕けて崩れ落ちて行くのを、むしろさっぱりした気持ちで受け止める事が出来た。同行した友人達は、私が急に生き生きしてきたと言い出した。

起亜産業（自動車製作工場）では、更に実物教育の威力を、さまざま思い知らされた。まさに「百聞は一見にしかず」だ。民族資本によって、確実に自分の足で、スックと立っている。そこで働く人々は皆、民族的気概を持っ

てほこらかに働いていた。周囲に立ち並ぶ労働者の住宅も立派なものである。釜山までのすばらしい高速道路。人家は、藁ぶきの家はほとんど見る事が出来なかった。これが我が祖国なのだ。私は見るもの、聞くもの、食べるもの、そのすべて私の嗜好にピッタリであった。沿道には手を振ってくれる老人、子供、若者達、皆底抜けに明るい。なるほど、日本の水準には現段階では全体的に比較は出来ないが、製鉄、造船、石油化学等、しっかりした大きな足どりで前進しているのを目のあたりに見た。

韓国は、西側先進国のあらゆる技術を導入するには、北側に比べて非常に有利な立場に立っている。北側はそのイデオロギー故に、またアフリカやラテンアメリカ等に、口ばしを入れ、米国や西側先進国に、必要以上に逆らい、そして共産主義体制故に、国際的後進の道を、歩まざるを得ないのだろう。それに比べて、韓国は賢明にも最も優れた最新型設備で、基礎が固まりつつある韓国の近代化への道がここにある。

我々の念願は豊かな国づくりにある。事実我々の公式日程が終わり、私は自分の故郷である済州道の、またその中の離れ小島である牛島に行き、いろいろ見聞した。そこでは「朴大統領になってからすべてよくなって来た。」と島の人達は、口をそろえて言っているのを、幾度となく聞かされて来た。電気も水道も完備され、村の若い娘も、昔はすべて海女の仕事をしたので、膚も黒かったが、今では大阪にいる私の娘より白い膚の人が多い。

南側では李舜臣将軍があがめられ、北側では金日成への偶像崇拝が強要される。日本でも、数年前までは総連学校等で、我が国の歴史的に有名な将軍や偉人の肖像が、かかげられていたが、最近これらの肖像は、金日成の写真によって追い払われてしまった。南側では、人間が自由に自己の才能をのばしながら、自由な空気をいっぱい吸って生活し、北側では政治優先、思想一色化はまだしも、一人の人間の配慮によって全人民が奴隷の如く、生存する自由だけがある。

北側に於ける人民のありとあらゆる業績は、皆金日成個人に帰結された。歴史上こんな事例があっただろうか。彼等に祖国統一の主導権などない。北はソ連軍により解放されたが、それも歴史を歪曲して、金日成が解放したかの如く捏造している現状である。

今日、韓国がアメリカや日本によって植民地化される如何なる条件があるというのか？　韓国では経済交流等は、先進諸国並みに活発である。日本に米軍が滞在しているが、それを日本がアメリカの植民地であると考える日本人は、一部「イデオロギー」かぶれした観念的な人間以外にはあり得ないであろう。

私は南側の人間であり、韓国の我が兄弟、知り合いすべて私に接した同胞は、皆現体制の変革など望んでいないし、また共産主義など、とんでもないことだと考えているのだ。私が韓国で見たものは、朴正煕大統領の新年の辞にある如く、民族中興の熱気、経済成長の不可欠の条件である政治安定である。民生も着実に向上し、治安も非常によく行きとどいている。

この様な時、北側の政治目的のための、日常的スパイ工作等、策動による危機感、緊張、これが韓国の高度発展のブレーキになっているのだ。これをやめさせねばならない。

日本に於いても「朝総連の働き手」（その一人一人には私の如き人も多いと思うが）、その主観的願望の如何を問わず、我が韓国の発展を妨げ、結果として祖国にいる我が同胞を裏切っているのだ。

日本と韓国についても、現在国際情勢を、何等イデオロギーに毒されることなく、素直に見るなら、互いに補い合うには絶好の関係にある。抵抗を感じつつ、偶像崇拝という宗教の虜になるか、自由の戦士として、自己の祖国につくすか、道は二つに一つである。

私の人生観も変った。現在、朝鮮学校に通学している四人の子供達も、金剛学園・大阪韓国学校へ転校させることを李校長にも約束した。

五十歳を越えた私がこれから進む道は、唯一である。日本という国際社会で故郷や、韓国に不利益になる様な一切の事柄と闘うことである。

私は祖国を取り戻したのである。祖国は厳然として実在し続けていたのだが……。北側による欺瞞に満ちた宣伝や、自分自身の幼稚さのために、虚構を信じ続け実際を見る事が出来なかったに過ぎぬ。祖国は今や、たくましく成長しようとしている。その道を妨げる様な、ささいな言動も行為も許してはならない。肝に銘じて……。

# 蘇った血肉の情

朴千洙
（大阪市大正区南恩加島町二―八）
（54歳　土建業）

朝総連のゆがめられた宣伝に惑わされて、父母兄弟のいる故郷が南にありながらも永遠に帰れないものとばかりに諦めさせられ、肉親から引き裂かれていた朝総連傘下の同胞達は韓国政府の誠意ある努力に基づく去年の旧盆の墓参団を皮切りに永年の渇望と念願がかなえられた。

今年の旧正月には大阪だけで千三百名が参加し、日本全国で合計三千人にのぼる大がかりの母国訪問が実現されたのである。

解放後も引きつづき日本統治時代にもまさる朝総連の抑圧下で「祖国の赤化統一の日が里帰りの日だ」とだまされ続け、三十年間も待ちに待たされたあげく、今や朝総連に対して強い不信をいだくようになった。

金日成個人崇拝と世襲的族閥政治を主体思想だと宣伝し、世界の各地に於いて社会の問題児なみの醜態ぶりを見せている北韓共産集団に対して、民族的侮辱感と憎悪感さえ覚えるようになった。人道主義を口にしながら「北」へ送った人質をねたに、韓国への里帰りを妨害し、口さきでは平和をとなえつつも南侵トンネルを掘り、今も暴力革命の進軍ラッパを吹き鳴らしている彼等の狂乱ぶりにいや気がさしてきたのである。

偽りの人道主義と誠の人道主義を体験して、危うく失うところであった血肉の情を蘇らせ、祖先達が命がけで守って来た大事な祖国をとり戻す事が出来た喜びの中で、新しく生れかわった自分をみつけたのである。私達夫妻は、

今度の旧正母国訪問をすすめてくれた民団大正支部洪団長に、自分の目で確かめた祖国の発展ぶりと胸をつまらせた肉親との再会を万感あふれる思いの中で、
「ほんとうに素晴しいものでした。行ってよかったですよ。また行きたいんですが……」と、お礼の言葉も忘れてただこの言葉だけをくりかえすだけであった。
私は今年五十八才、両親と一緒に玄海灘を渡って来たのが昭和十二年（一九三七年）であった。十三年前に仕事の都合で九州から大阪へ移って住むようになった。もともと朝総連が好きではなかったが、あいにく新しく移ったアパートがちょうど朝総連事務所ととなりあわせで、その人達と顔をあわせているうちに親しくつきあうようになった。
洪団長とは今回の出逢いが初めてで、偶然故郷も同じ浦項である。私達夫妻は三男一女にめぐまれ、三人の息子はすでに結婚して別居している。末の一人娘だけが両親のもとで高校に在学している。九州にいた時よりははるかに暮しが楽になっている。
故郷には三人兄弟の中で七十を越す兄二人が姪達と一緒に暮らしている。また家内の実家も同じく浦項である。初めて洪団長が婦人会長を伴って母国訪問を世話しに来てくれた時は、あまり気がすすまず積極的な意志を持たなかった。あくる日、家内が市場で偶然に会った知りあいの星山さんから前回の墓参団に参加して無事に戻ったことや、祖国の発展ぶり、故郷の姪からの伝言を伝えきいた時、強い望郷の念にかられ、私と一緒に決心をまとめることが出来た。
二月三日、大阪からの第二陣に加わり、伊丹空港を飛び立った。
太極旗のマークもあざやかな翼を思いきり広げ、悠々と飛んで行くＫＡＬ機の機上で目をとじると、昔おさな友達と一緒にじゃれ遊んだ故郷や、もうすぐ逢えるはずの兄達の年老いた顔が交互に浮かび、今は亡き両親の笑顔がなつかしくなって目がしらの熱くなるのを感じた。ときたま、理由を知らないいらだちと一抹の不安が高空の広い空間をせまく感じさせる瞬間でもあった。頭を整理するひまもなく、眼下に広がる美しい祖国の山河をぼうぜんと

見おろしていると、いつのまにか飛行機は滑走路に向って着陸の態勢にはいっていた。
現代設備の完備した金浦国際空港——。ここが祖国の空の関門だと思うと、とまどいと喜びが湧き上がった。第一番に簡単な手続きをすませ外へ出た。ラッシュ時の大阪地下鉄の人ごみをしのぐ人出である。到着を待ちわびていた群衆からは迷子をよびもどそうと、のどもはりさけんばかりに我が子の名を呼ぶ母親の絶叫に似た叫び声が、人波のどよめきの中に異様なひびきを残して消え去って行く。太字で名前をしるしたプラカードを高々と揚げ、肉親をさがしている光景も沢山目にはいる。それこそ血肉再結合の場面である。
たち切られていた血脈をつなぎ、新しい血流を全身に環流させるための痛みと喜びが一度に融け合う。みつけあった肉親達は再合の喜びと感激がこみあがって、あたりかまわず大声で泣くばかりである。放浪息子を迎える場面としては余りにもしめっぽい。一大混雑の中で運よく兄嫂をさがしあて、いつのまにか抱きあって声をたてて泣いていた。ほほをこすりながら、あるいは、胸に顔を埋めて子供泣きに泣いている肉親達は童顔でおぼえていた肉親の三、四十年の年輪が深く刻まれた老顔をも正確にさがしあてた。
泣きじゃくっている人達の回りを無数の新聞記者達とカメラマン達がとりかこみ、当然なことが大きな出来事として、さかんに問答がかわされる血肉再結合の場面は、思想・理念・おどかしの如何なるものもはばむ事の出来ない光景であった。空港には、私が電話で帰国を知らせ、テレビ、ラジオで日時を知って、兄嫂と姪子夫妻がかけつけてくれた。
空港から最新式のリムジン、バスで広々とした道路を走ってホテルに向う。沿道を歩く人々はだれもが手を振って向かえてくれた。記者達は車内にまで乗り込み、サインを求めるファン達のように泉大津から参加した一人の高校生を取りかこんで感想を聞いていた。
私は昔のソウルの街並みをかすかにしかおぼえていないので、今のソウルと比較することは出来なかったが、今までの想像は完全にあてはまらなくなった。
昔おぼえていた漢江の鉄橋が目にはいった時、一つしかなかった漢江の橋が幾つも目につき、川の堤防だけがあ

った漢江の両岸に建ち並ぶ近代式の高層アパート群は、ほんとうに目をうたがわせるものがあった。今まで朝総連が二百万の乞食がうようよし、市民の顔色はうえて血色を欠いていると宣伝していたソウルにこのような立派な住宅団地があるということは、なにを説明してくれるのだろう。

車の行列が後をたたない漢江の橋を眺めながらしばらく走ると、バスは高層ビルの谷間にさしかかった。地下鉄の入口も見えた。大阪や東京の街を走っている錯覚を起こしたが、街並みがはるかに美しく、ゴミ一つ見あたらないきれいさっぱりとした街である。ふと気がつくと、店の看板がすべてハングルできれいに書かれていた。活気あふれる街を歩く人々の中に、民族衣裳をまとって道を急ぐ女性達の姿が沢山目についた。それがなんとなく今までの緊張を一気にほぐしてくれた。ソウルの明洞は大阪の心斎橋筋の日曜日の人出と同じ混雑ぶりだ。人口六百九十万のソウルは生きて活発に動いていた。

ホテルで眺めたソウルの夜景は六甲山頂での神戸におとらぬ、百万ドルの夜景のようなすばらしいものであった。同胞達のもてなしはまるで貴賓あつかい、その親切さは同族であればこそのもので、心からのものであり、あらゆる世話がくまなくゆきとどいていた。

ソウルで三泊する間に、街や食堂などあらゆるところで出会った市民達から受けた歓迎は朝総連にだまされていたとはいえ、本国の国民達がこれだけ国を発展させるために努力している時に、協力はおろか国の発展を妨害して来たおろか者には身にあまる思いがして、身のおき場を知らなかった。

二月五日の国立劇場でのソウル市民歓迎大会は、一生、初めて国の行事に参加した私達夫妻を泣かせた。

ソウル市長、梨花女子大学総長の歓迎の辞、そしておさない小学生の北に両親を残してきた父親の悲痛な思いと、祖父母をもつ友達の幸せを通して肉親をしのぶ悲愴なうったえは場内を涙でぬらし、なじんだメロディにのって流れる歌手達の歌声にも、民族固有の踊りと民謡にも、民族の渇望が込められ、やがてその悲しみは金日成に対する怒りに変わっていった。そして政府と民団の努力によって母国訪問が実現したことが大変ありがたく幸せに思われ、北に故郷を持つ本国の一千万離散家族の悲しみが痛いほどよくわかった。なぜ金日成は南北交流を一方的にこばむ

のだろうか。朝総連も在日同胞の母国訪問を妨害することは絶対に出来ない。

東京で朝鮮高級学校の教師を20年間以上つとめていたという権氏は答辞に立って「本国同胞の皆さん、ありがとうございます。もう二度と朝総連にはだまされません。」と参加者全員の気持ちを代弁してくれた。朝総連の最高幹部クラスの人達も多勢参加していたが、その人達の気持ちも一緒のようであった。

六日にソウルを立ち、バスで観光と産業施設の見学に向った。バスガイドの上手な日本語。いたる所に色々な現代的で大規模の工業団地が建ち、若い技術者達が熱心にはたらいている姿は誠にたのもしいの一言につきる。特に、蔚山現代造船所と浦項総合製鉄所等の設備は、世界にその規模をほこれるもので、韓国が重化学工業に力を入れ、一九八〇年代に国民所得千ドル以上をめざして確固たる経済的基盤を固めているのがよくわかった。そのほか自動車工場や煙草工場なども見学した。全国を一日生活圏にしてくれる立派な高速道路があって、見学にも非常に便利である。バスで走る沿道の農村も昔の藁ぶきの屋根はほとんど見あたらない。しかも日本にないのどかな農村風景である。

六・二五動乱で廃虚と化したと聞いた祖国がどんなにして、これだけ発展出来たのか不思議でならない。日本のマスコミは伝えてくれないが、今初めて、この国を育てて来た朴大統領の領導力と一致団結して建設に力をつくした本国国民達の努力に自然に頭が下がった。

故郷に戻って浦項の変りようは、三十年前に見てきたことがまだ頭に残っていた私達夫妻をびっくりさせた。人口二十八万の大都会に高層ビルも建っていた。とうてい想像もつかなかったほどである。昔の本町は今は田舎で、山の中腹にも舎宅のような煉瓦造りの現代住宅が所せましと立ち並んでいた。旧道路はなくなって高速道路が新設されていた。

実家にたちよった時の思い出は一生忘れられるものではない。兄達はもう年老いているけれども、私を抱きよせて涙を流し、胸がつまって何にも言えなかった。これを見ている姪達や親せき達の目からも大つぶの涙がほほをつたって流れおちた。改心して戻って来た放浪息子を迎える光景としてはあまりにもしめっぽいものである。姪は浦

項で電気器機の修繕販売業を営んでいた。規模は大きくなかったが、自分の腕前をほこり、自信に満ちた口ぶりで収入をほこっていた。兄達の暮しも楽しいもののように見えた。昔とは違って品物は豊富で、大分余裕があるように感じた。浦項の市場でびっくりしたのは物価の安いことである。

日本では考えられない値段で何でも買える。また、本国には日本にない色々な美風良俗もそのまま残っている。さすがに東方礼儀の国だけあって、親達は子供から大事にしてもらえる老少有序の習慣も変りなく行われ、ほんとうに何から何まで気に入るものばかりであった。顔も知らない姪達は、私達夫妻の面倒をみるために夢中であったのも大変うれしかった。

一日も欠かさずに公式スケジュールに参加したため、時間の余裕があまり持てなかったので、八日解散して九日は釜山から五十人余りの参加者達と一緒に大阪に戻った。

機上で、短かった母国訪問中の話に花が咲いた。ある人は、自分で負担した経費がその間のもてなしに比べ、だいぶ足りなかったような気がして、あまりにも本国の同胞達に世話になり過ぎたとも言った。また、本国では自費で母国訪問が出来ない同胞のために、国民が自発的にに募金運動を展開し、すでに十億ウォンにも上る金額が集まったというのに、これは我々が日本ですべきではないかとも言った。そして、今もなお朝総連にだまされている沢山の同胞達のために、みんなで何とかしなければならない。今度は子供も連れて来て故郷を見せてやりたい。そして、自分の国に対してほこりを持たせるのだ。

私は、浦項に両親と一緒に日本に来る前に所有していた土地が、相続で自分の名儀で残っていることを知ってほんとうに喜んだ。その田んぼの中で石油が出るというので、国のために大変嬉しい事だと思っている。

今度の訪問で得たものは数えきれないほど多い。この母国訪問団事業の意義は大きい。これこそ真の人道主義であり、民団が三十年来行った事業の中で最も立派な事業である。私は、家族全員そろって民団に入団し、協力していきたいと言った。今度の訪問で、北はその残酷な真相を見られるのがいやで、南北会談を一方的に中止したとの確信が持たれた。誰をさておいて総連の韓徳洙も南が故郷であろうに、彼自身だって行きたいはずである。望郷の

念は人間誰にもあるものだ。

話は尽きなかった。明日はさっそく書類を整え、国民登録を済ませるつもりである。そして、いつでも故郷に帰りたい。

先進国を目ざし、今滑走路を飛び立った航空機の如く、発展の高度を増してグングンと加速度的に伸びゆく我が祖国が、旅程一時間足らずの距離にあるのである。祖国を取り戻し、大変心丈夫の日頃である。

## 明るい表情の国民

盧吉夫
（京都府城陽市大字寺田小字大谷一七五）
（前朝総連京都商工会副会長）

昨年の九月の秋夕省墓団に私の友人が参加しようとしたが、朝総連の妨害を受けて祖国へ行けなかった。その時偶然に東京の韓国大使館の人と会って仲良くなり、その人から「あなたはなぜ、自分の国に行かないのですか」と聞かれたが、私は「恐しいんです」と答えると、その人は「自分の祖国がどうして恐しいんですか？一度、東京に遊びに来ませんか、ゆっくりお話をしましょう」と、その日約束をして別れた。

今年の一月二十四日に上京し、大使館の人と会っていろいろ話をしまして、今回の帰省団に参加することを決心した次第です。

私の直接の訪韓動機は、このままでは盧家の先祖に申し分けなく、自分の代で祖先との血縁が切れてしまうため子供たちに家系を伝えてやりたかった。

一月二十七日の早朝五時に上京、その日の午後一時三十分発の大韓航空機で祖国へ生れて初めて飛び発った。

昼を選んだのは、祖国の山河を見たかったからで、なぜ山河が見たかったかはそれなりの理由があった。

朝総連から「韓国は食糧が不足していて、電気もなく失業者が街に氾濫している」と聞いていた私は、祖国の山河を見ることでそれがウソか本当か分る。ところが、寒かったが河に水があったのです。河に水があるのは当り前のことだが、冬の河に水があるのは水を貯めていることでつまり自給自足の態勢が整っているということである。それが飛行機の中から見て分った。

金浦空港までは恐怖心と望郷心とが交錯し、内心複雑な心境だった。そんな不安が消えたのは、金浦空港で係の人が出迎えに来てくれ「よく来てくれました」と握手したとき、不安はどこかえ吹飛んでしまった。それからというものは楽しいことばかりだった。

ソウルでは個人行動を取り、主に大衆食堂や路地裏まで一人で歩きながら市民の日常生活を把握しようとよくよく観察した。到着した日に夕食を食べに行ったら、食堂は満席で座れるところがなく、日本では想像もできない。各テーブルは市民たちがなごやかな雰囲気で暗さが全然ない。ソウルの人たちのこの明るい表情はいったいどこに起因しているのか。

デパートに行ったみたら国産品が多くあるのには驚いた。これは中小企業が成り立っている証拠である。ということは仕事があるということだ。そして金浦空港からソウル市街までの道路は実に素晴しい。北韓の道路は雨が降ったら水がたまってしまうがソウルの道路は平たんで素晴しい。ここまで国家建設が出来あがっているのだから、国民の表情が明るいのは当然だと思う。

翌日、仁川に行って見た。建て売り住宅、マンションなどが建ち並んでいる。それも到る時で建ち並んでおり、五〇坪の敷地に建て坪四〇坪の家がほとんど。それが一千万ウォンぐらいで一般のサラリーマンが入るという。それだけサラリーマンに収入があるということだ。

日本で聞いていた韓国は、軍事、政治とアメリカナイズされた民政とばかり思っていたが、そうでなく住宅政策の細かい点にも力を入れていることが分った。「日本で聞いている朴大統領は軍人出身だということだが、これでは

朴大統領は優れた政治家であり、経済学者ではないか」と同行の人に質問した。

工業団地や工場の広さ、整備に奥深い土台など、祖国が経済建設に努力しているのに同じ民族として申し分けないような気がしてならなかった。

自分の目で祖国の発展する姿をみたことに喜びを感じ、今後、経済人として祖国に対し国家建設の一員として参画していきたいと思っている次第です。日本にいる同胞(朝総連)に対し温かい同胞愛で省墓団を迎えてくれたからこそ、こういう国造りができたと思う。

当初の恐怖心が大きかったので感激もまた大きかった。そして自信を深めたのは、教育水準が高いことだ。また、祖国の人は利益関係抜きで温かい情がある。それになによりも勤勉ということです。日本人よりも勤勉だ。

政府の建物の中でも胸を大きく張って歩いた。日本の官庁では小さくなっている私だが、祖国では堂々と歩いたぐらいだ。なによりも悟ったことは、金と時間を大切にしなければならないと思った。

最後に、在日同胞二、三世のエネルギーを祖国の建設に傾注する必要がある。そして祖国を訪れ、真実の姿を自分の目で確めることがなによりも大事ではなかろうか。

## オモニ！僕は自由なんだ

康奉玉（大阪市生野区中川居住）（商業）

長い間、朝総連の宣伝と日本の偏向的マスコミによってのみ韓国を認識していた私は、韓国を「暗くて陰気な国、

アメリカに独占された植民地的な国」とばかり連想していた。
ある日、友人のK君から、韓国行きを勧められた時、
「バカヤロー、俺を韓国なんかに連れ込んでどうする気だ。冗談じゃないよ。」と冷笑一蹴したのだった。
僕は朝総連の幹部をした経験もなければまた熱誠分子でもないが、親の時代から金融機関の取引は朝銀一本であったし、叔父は北朝に帰っている。親戚の中には赤い思想に熱心な連中らもあって、何となく朝総連というワク組みの中で生きて来たのが実情である。
だから、これまでに何回か、省墓団の話は聞いて来たし、ビラ等も見て来たが、「民団の言う事なんか信用できるか」と内心思って来た。
「君の子供と僕の子供の前で、絶対大丈夫と誓うよ。」と、何回も誘うK君の言葉につられる格好で、省墓訪韓を決意するようになったが、「ほんとうに大丈夫だろうか。」という心配で眠られぬ晩が続いた。万が一、取調べを受ける時に備えて、弁解の事もいろいろと考えてみた。
僕は自分の不安を補うために、身内の何人かを一緒に誘うことにした。親が北に帰っている従弟、朝総連の影響下にある甥、朝青で暴れ回っていた甥の友人のH君と小さなグループが出来た事は、少々心がおけた。でも出発の前日、僕はK君にもう一度念を押したのだった。ほんとうに大丈夫だろうか？　K君は黙ったまま笑っていた。
飛行機に乗ってからは、もうどうにでもなれ、とマナイタの上の鯉のような心境であった。快天下、機窓から見下ろすソウルの景観は素晴しかった。高層ビルの群立、車のラッシュ。これがほんとうにソウルだろうか？　信じられなかった。何となく目頭の熱くなるのを覚えた。
空港は大変な人出であった。しかし僕は、これを官製動員による歓迎であると思っていた。省墓帰省とはいえ、本質は朝総連の連中らではないのか。たとえ、だまされてやったにしても、三十年余を金日成に忠誠を誓い、母郷と肉親を裏切り背いて来た僕らである。ソウル市民がいくら善良であるといっても、こんなに盛大に歓迎しなけれ

ばならない理由は全くないのである。事実僕達も日本にいて、韓国から日本に来る如何なる個人や団体に対しても冷たい視線を送っていたではないか。

歓迎！　別にありがたくなかった。ただ、つかまりさえしなければよいとだけ思っていた。それがどうだろうか。至る処歓迎の波ではないか。老人から子供に至るまで、皆が暖かい眼差しで力強く手を振ってくれている。真剣に迎えてくれているのだ。嬉しくなっていった。

景福宮、李舜臣将軍の墓前では、歴史の流れと、逞しくて勇敢な民族の血の流れを感じた。現代造船所と浦項製鉄所では、その規模の大きさに胆の抜かれる思いであった。

ソウル、慶州、釜山、済州のどの街も奇麗に整頓されていたし、吸殻一本落ちてないのも大きな驚きであった。釜山に着くまで腕の振りっぱなしで腕がものすごくだるかったが、心楽しいだるさだった。僕は四十三歳、生れて初めて味わう感激であり、一生まだこんな印象は味わえないだろう。僕のために一緒に来た甥達は、連日己れを忘れてはしゃいでいる。

釜山の駅前広場。一足先に来て僕を待っているK君に僕は涙ながらに手を差し出した。

「ありがとう」と一言。あとは言葉にならない。喋る必要がなかった。一緒に来た数千人の胸の中もみんな一緒の筈である。

物価の安さ、食事のおいしさ、奇麗で豊富な衣裳類！。甥の言葉を拝借しよう。日本で背広を作るのはバカだ。日本で背広一着代金十二～三万円、それだけで釜山に来て一週間遊んで背広を作って帰ってもオツリがあると。百聞は一見にしかず。真実より強いものはない。僕は生れ変った。

母の墓前。何も言う事はない。K君に一言。

「K君！　また一緒に来てくれるね！」

「お母さん！　もう僕は自由なんだ。これからは母ちゃんの傍に、しょっ中来るよ。」

今、僕は民団の団員となった。

# 真の民族教育を発見

権重錫
（東京都福生市居住　55歳
元東京朝鮮中高級学校教員）

私は朝総連系民族学校の東京朝鮮中・高級学校でながい間、教鞭をとっていた。朝総連中央教育部から民族学校用教材のテキスト（例えば児童向けの「ヘバラギ＝ひまわり」などを作れといった指示を受けて学友書房（朝総連傘下事業体の一つ）で働いたこともある。あれやこれやで朝総連系教育機関には二十年以上もいたわけだ。

したがって帰郷するまでは相当悩んだ。二十年間も朝総連教育事業に従事し、子供たちに「韓国は生き地獄だ」「貧乏だ」というように教えてきたんだから当然ではないか。個人神格化、唯一思想など、いびつな朝総連の政治・思想教育に反発して組織を離れても、過去がそうだから、なかなかふん切りがつかない。しかし、いつまでもこうしては永遠に故郷へ帰れなくなる。からまわりしていてはだめだ、と思い切って帰郷を決心したのだ。

ところがどうだろう。三十一年ぶりの韓国は私を驚かして余りあった。昔の面影は全くない。当然とはいえ、本当にビックリさせられた。ソウルをはじめとする都市のビルの林立、蔚山の現代造船所や浦項の総合製鉄所に代表される韓国重工業のめざましい発展、そしてそこに働く人々、とくに若人たちのエネルギー、躍動感といったものが肌で感じられた。この韓国を朝総連はいまでも「生き地獄だ」といっているわけだが、それを思うとなんとも奇妙

に思われた。現実はどんどん変化し発展しているのに、飛行機でわずか二時間で行ける日本に住む一部の同胞たちには、それがわからないのだ。

ことに私は、韓国の発展をささえている韓国の若人に深い感銘を受けた。どこへ行っても青年たちはきびきびしているのだ。韓国の青年たちは自分たちがこの国をささえているんだ、という使命感を持って働いている。この国が発展することは、すなわち自分たちがよくなることだ、という確信をもっているのだ。しかも礼儀正しい。私は、かつての職業からして在日二世青年たちと比較してみた。

一つは、韓国教育のよさにあるように思えた。不幸にして教育の現場が冬休み中だったので、学校を見ることはできなかったが、教育者養成研究機関の中央教育研究院などを見せてもらった。そこでは、国際水準の科学技術の修得とともに、一言でいって祖国愛、愛国主義教育をいかに行うべきかを研究している。祖国の発展と繁栄のために献身しなければならないという教育に合わせて、民族の良さや伝統をどう伝えていくべきかを重点的な課題にしていた。

私たちが朝総連に求めてやまなかった民族教育の模範例が韓国にあったのである。短時日内の見聞で即断するわけにはゆかないが、この点だけは実感としていうことができる。

率直にいって、朝総連の民族教育は言葉だけのものとなっている。「主体思想」教育の名のもとに金日成「北」主席の偶像化、神格化、専制独裁を容認し、擁護するためのものとなっている。にもかかわらず、韓国の教育や文化などがアメリカナイズされていると非難しているが、私の見た限りではとんでもない誹謗・中傷だ。

韓国は「北」・朝総連とは異なり、本当の意味で民族文化遺産を大事にしていた。歴史博物館や李舜臣将軍をまつってある顕忠祠などを見てまわったが、管理がゆき届いている。完璧といってよいだろう。こうした実物を在日同胞の子弟に見せたら、どんな立派な民族教育になるだろうかと、私は思った。

そればかりではない。日本で目に見えない三八度線にさえぎられて肉親や親戚たちと会えないという不正常な状態をなくし、自分の祖国、故郷に自由に帰れることができ肉親たちといつでも会えるようにすることが、どれほど

在日二世青年たちの民族教育に役立つであろうかと、三十一年ぶりの祖国で私は実感した。祖国や故郷へ帰ろうとすれば、いつでも帰れるのに、それをしないでなんの民族教育ができるのか、極端にいうと、朝総連は民族教育の担い手としての資格を失っているといえるのではないか。

もちろん私は、朝総連で民族教育が全くなかった、というつもりはない。そういえば多分間違いであろう。民族学校の草創期は、それこそ文字通り、在日同胞は汗と血を流してやったものだ。

「知恵のある者は知恵を出し、金のある者は金を出し、力のある者は力を出して」民族学校を創設し、六十万在日同胞は一丸となって、それを守ってきた。ところが朝総連が「北」の指導を受け入れるようになって、民族教育は変質しはじめる。個人神格化教育が強要されはじめ、「北」労働党第四回党大会以後のそれはもう目に余るとしかいいようがなくなった。

こうして在日同胞社会の民族教育は「北」の政策の道具と化した。失望した私たちがこの度、韓国に民族教育の模範というべきものを発見したのは大きな収穫だ。

# 三度も泣いたおばさん

## —バスガイド宅で一泊—

李 進浩

（兵庫県芦屋市宮塚町八六 父親が朝鮮籍）

一九七六年一月二十四日から二月六日までの韓国滞在は、私の人生観を根こそぎくつ返した二週間であった。

梧上洞――。それは小生のなつかしい古里の名である。古里の山に向い、古里の河を背にした時は生涯感じられなかった感無量であった。実に二十四年ぶりである。早く言えば初めてなのだ。しかし母の墓があり、父が生れて育った梧上洞はとても初めての訪問とは思えなかった。更に夜には多くの親類の方達が集まって大歓迎をしてくれた。しかもいずれの人も初対面である。未熟な小生にはハングルがわからず非常に残念だった。しかし、今度こそ祖国の言葉を学ぼうと思った。親切にして下さった古里の人々に真心から、

「カンサハンニダ」と言いたい。

二週間で一番苦痛だったのが食事の時だった。お米と外貨節約のため、国では粉食の日がある。日常白米だけを食べていた小生にはきつかったけれども、国造りに熱心な、このような制度には感心せざるを得なかった。週二回の粉食は身にもよいことを聞かされ、悟りもしたのである。キムチとビビンパはおいしかったが、その他はどうしても小生の口には辛かった。しかし一人一人の国民の小さな、そして尽くせりの協力にはほんとうに感心した。

歌――。これは旅の思い出をより一層深めるものである。行く先々で歌ってくれる韓国の代表的民謡「アリラン」そして「トラジ」。中でも一番好きになったのが、昼食の時美人歌手が歌ってくれた「連絡船の歌」である。ハングルのわからぬ小生も哀愁を感ぜずにはおられなかった。カセットテープを買い、その歌を今も何度も何度も聞いて韓国を思い出している。

コーヒー、市内バス代、それに公衆電話料等は安いと思ったが、バナナ、ミカン等の果物、ガソリンの値段が高いのにはビックリ。経済、あるいは政治状態の違いを物価の面でも強く感じた。バナナは輸入品だし、ガソリンも貴重な外資で買入れる物だから……。

二週間の滞在のうち、十日間をソウルで過ごした。世宗ホテルで三泊。兄弟仁義を結んだ（ちょっとオーバーかな）親切なバスガイドさん宅で一泊。そしておばさんの家で五泊である。父の姉で、兄弟の中でも父と最も仲が良かったというおばさんは、小生のために三度涙を流してくれた。美しい涙に感激した。

五日間の滞在中、何人もの親族の人が会いに来てくれた。知らなかった人達も沢山いて、親類の多いのに驚き、

あまりの親切に感謝し続けた。血のつながりはありがたく、初対面でもすぐに親しみを感じた。

団体バスでソウルから釜山への途中、人々が通路で歓迎の手を振ってくれた。天皇にでもなった気分で身にあまることだった。特に天安の街での総住民と思える程の人々の出迎えは忘れる事が出来ない。「カンサハンニダ。」

楽しみにしていた二月五日のソウル市民歓迎大会は、期待通り素晴しかった。特に若い女性による民族舞踊は、美しいという言葉の意味を初めて知った思いである。会場を涙の雨とした少女の演説は、残念ながら小生にはチンプンカンプン。ハングル学習をせねばならぬと更に強く感じた。

祖国の平和統一――。正直に言って、今の段階ではむずかしいと思った。武力による統一が起こっては、また戦争があっては、折角の建設も無になる。血肉を分けた同民族が武器を持って戦うことは絶対にさけたい。南北共に戦争の緊張から解放され、その力と予算を国の発展、また国民の幸福に使える日が来るのを願ってやまない。

今度の母国訪問が、南北理解につながる事と期待し、願っていましたが、帰宅してみると、必ずしもそうではないようで残念でならぬ。願う平和統一！

祖国を訪ねることが出来たという事はほんとうに有意義だった。母国訪問の機会を与えて下さった民団関係者の方々に心から感謝し、ペンを置くのである。「カンサハンニダ」。

## 論より証拠　何をか語らん

閔春基

（尼崎市東七松町一丁目十二―十八・55歳
在学中に朝総連組織に参加主動役割）

「存在」が「意識」を決定する。この哲学概念は、いとも簡単に理解され、納得がいく用語である。

しかし、現実的に社会体制の本質的認識は、さほど簡単に形成されるものではない。幼少の頃から四十有余年の歳月を他民族社会で送った者にとっては、なお更の難事である。しかも、たった二週間足らずの旅人としての祖国訪問ではなお更ドグマ的である。

しかし、短い旅とはいえ、私の生涯を通じて、これ程印象に深い旅はなかったことと、社会科学を学んだ者の義務として、私が眼で見た印象や聞いた人々の意見や情報等を、感情的にだけ胸に納めることは出来なかったことで、見たまま聞いたままの実情を私なりに論理的に整理して、その中から法則性を導き出して、自分自身の認識を深めるために、この文を書いてみました。かかる意味に於いて、このドグマをご一読願うのである。

## (一) 冬来れば、春遠からじ

我が祖国に於いては、一九七二年に憲法が改正され、十月維新憲法が施行された。

このような改定の目的は、分断された祖国を、平和的に統一を推し進めるために必要な「国力」を培養することにあった。

そのために、「我が祖国統一」推進の段階的バロメータは、即ち「国力」の経済的発展段階と不可分な関係にあるといわねばならない。

我等は、平和的な祖国統一の実現をこい願う者にとっては、傍観的は許されない。

したがって、祖国平和統一達成のために、各自が、力量に応じた祖国の「国力」の培養に積極的に参加する立場で、社会の物質的基礎の諸条件を考察したいと思う。

## (二) 「漢江の奇蹟」の原動力

世にいう「漢江の奇蹟」について、日本のある評論家は、次のように述べている。

「私がはじめて韓国を訪問したのは、一九六四年のことであった。その年に韓国の一人当り国民所得は僅かに年八〇ドルであった。今日では、年間五〇〇ドルを超えている。僅か十一年間のことだ。生活水準が六倍以上になったのである。」

また或る人は、経済的発展を次のように、のべている。「最も著しい成果は、二回に亘る経済開発五ヶ年計画（一九六二年～七一年）を成功的に達成したことであった。その間の年間成長率は平均八・六％であり、輸出は一九六二年の五、〇〇〇万ドルから、一九七三年には三二億五千七万ドルに飛躍した」と、のべている。

かかる奇蹟が、以後にも持続するものとすれば、祖国が目標とする、国民所得一人当り一五〇〇ドルに達するのも、もう遠い先ではなかろう。

もしこの目標が、祖国平和統一の国力の物質的基礎条件とするならば、我々は、この目標に向って、渾身の努力を発揮せねばならない。

かかる、不可能と思われる諸条件を、現実的諸条件に転化せしめる原動力として、私は、イリンが指摘した次の言葉を思いだす。

「すばらしいものがこの地上にいる。
それは苦もなく機関車をもち上げる手を持っている。
一日何千キロメートル走ることが出来る足をもっている。
雲の上をどんな鳥よりも高くとぶことが出来る翼を持っている。
水の中をどんな魚よりも上手に泳ぐことが出来る鰭を持っている。
見えないものを見る眼を持ち、他の大陸で話すことも聞く耳も持っている。
それは、山々を切りひらき、全速力で落ち来る滝をとめる程、力が強い。
それは、思ふままに、大地の様子を変え、森林を植えつけ、海と海を結びつけ、砂漠をも灌漑する。
このすばらしいものは、一体何であろうか？　人間である。

どうして、人間はこのようにすばらしいものとなり、

この地上の支配者となったのであろうか？。」

## (三) 農村の新しい姿

かつて、禿げ山を恥いた我が祖国の山々も、今や山形を改めるまでに樹木がおい繁げ、豚小屋かと罵られた、韓国の農家の典形的な草家の村の姿も、今は、瓦葺の家並に変り、かつては、日本の旧古米をも食わねばならなかった、我が農村経済も農作物の品種改良、化学肥料の国産改善、水利灌漑の改良、農作付面積の開発業によって、かつては、十叺しか採れなかった米も、今では同面積で二十七叺をも採れたとの実話を耳にした時、もう一度、真偽を問い正す程の驚きであった。

そのお蔭で、我が祖国の農村は、昔の絶糧農家の存在を知らず、夜は電燈が輝き、頭に水甕を載せた村娘の姿等、昔の農村の風景は探しにも見出すことが出来なかったのである。

農村の家には、上水道が設置され、テレビのアンテナのい並ぶ中で、電話あり笑い声あり、四十有余年前の日本帝政時代にひれ伏した農民の姿は、今は何処にもその影を求めることが出来なかった。

村の街道には、何処も自動車が走り廻る程に広くなり、田や畑も耕運機が走り廻る農道に整備され、早朝には清掃され、農産物は勿論のこと、産業の動脈道路としての高速道路は四通発達して、経済流通の生活道路としての役割を全うし、昔の農村の生活はその痕跡をものこさない状態である。

かかる諸条件下の農民の生活意識は、末将に希望を求めて、次の世代の擔手としての子弟の教育に情熱を注ぐ等、そのために、各面毎に高等学校迄が設置され、セマウル運動に依る成人教育は勿論のこと、農業協同組合の発達に伴って、セマウル工場の新設等、農村の工業化が推進されれば、やがては、現農村は完全にその姿を一変し、近代的農工業の併存的新社会が実現されるのもさ程遠くはないと思うのである。

## (四) 重化学工業の成立と発展動向

貧しさから解放されるために、農業国から工業国への転換発展の夢は、我が民族の存亡の基礎条件として積年の

願望であったが、産業革命を経ない我が祖国は、勿論原始畜積の資本もなく、近代的な質の高い労働力もなく、只、先進工業国を羨望するだけで、自他共に、後進国、もしくは、発展途上国の規範用語には、恒常、民族的自尊心と劣等感の交錯感情と、自己嫌悪と抵抗を感ずるのみであった。

だが、この用語も遠からずして、過去のものとなるであろうことを目撃した。

近代先進工業社会の成立の物質的基礎は、鉄鋼であると同時に、石油化学産業の成立が根本的要件であることは、周知の通りである。

その鉄鋼業が、超近代的な装置産業として、我が故郷の迎日湾に沿い、浦項鉄鋼基地に於いて、実際にその姿を目撃した瞬間は、我が祖国よ永遠なれ、我が民族に勝利ありと呼ばざるを得ない心情だった。

これは、単なる物質的構築物・装置産業の雄姿に感嘆したのみではない。

この超近代的装置産業を我が同胞の若者達が、自からの手で運営し、管理し、生産している姿である。

また、ここから生産される鉄鋼材は、工業原材料として、世界の市場に姿を見せるのみならず、近代産業の最たる自動車産業（現代・起亜等）造船業（現代造船等）・機械産業等々・我が先祖達が夢みて果し得なかった重工業の製品は、国内需要は勿論のこと、海外先進工業国の市場にも進出する姿は、如何にして感動せずに居られようか。

そして、もう一つの近代工業国の成立側面産業・近代魔術産業ともいうべき石油化学産業は、我が故郷・慶尚北道浦項の野に林立する油田試掘楼には、我が同胞の労働者が、原始的労働工程を駆使して、自から工夫をこらし、自から考えて、現実的に一千六〇〇メートルの地底から神の恵の我が民族の宝である石油を酌取っているではないか？　俗に言う、論より証拠、これ以上何をか語らん。

ああ、我が祖国に栄光あれ！と、絶叫したい心情にかられる。

只、単に原油が発掘されただけではない、出る石油は無論のこと、遠く中東諸国から輸入される原油は、お隣の蔚山石油化学工業基地に於いて、現実的に農民には化学肥料を、工場にはプラスチックの工業の原材料・医療には医薬・繊維化学には基礎原材料を、しかも我が祖国が解放された以後に生れ育った若者達が、自からの智恵と力と

汗で、我が先祖達が夢想他になし得なかった夢を、現実的に運営し、管理し、生産して、商品として先進工業諸国の市場で角遂している。

## (五) 未来は我等のもの

農業社会の近代化が推進され、農村経済の地盤が確立され、その上に、近代先進工業国としての基礎地盤産業、その重工業の基礎が確立されて、相い共に、近代社会の成立の物質的諸条件が具備された我が祖国は、好むと好まざるとに拘らず、発展途上から先進工業国へと脱皮していくことは必然の道程である。

換言すれば、韓国社会は、近代社会の物質的基礎の諸条件が、質量ともに完備されつつ前進しつづけているということである。

かかる、物質的諸条件が具備されれば、必然的に政治的にも後進的過渡期体制から、先進的体制に発展して、かつては、夢見ても果し得なかった理想的な我が祖国の政治体制が、この物質的な基礎の上に、花を咲す時期が到来することを信じて止ない。

既に、ある日本の評論家は、次のように述べている。「今日、韓国は開発途上国のなかで、目覚ましい経済発展と国民生活水準の急速な向上によって、世界に手本となる業績を上げている。朴大統領が一九六一年に軍事革命を起した時に韓国は李承晩政権の十二年間にわたる失政と韓国動乱によってもたらした破壊が重なって、経済的に事実上、破産していた。そのような窮地から韓国を救い出し、今日の繁栄を実現した。朴大統領の功績はまことに大きいといわねばならない。」と、

そして、朴大統領自からも、「要は、われわれの革命が民主主義の価値を抹殺し否認しようというのではなく、遠からず真の民主々義を確立していくものである。革命第三段階に入ったと見られる時期においては、できるだけ将来のために民主々義的な要素を国民に扶植し発展させていかなくてはならないと考える」と、述べておられる通りである。

## ㈥　主体的に対処しよう

農業国の貧しさから解放されるために、工業立国の経済開発に取り組むにあたって、その基本条件として、E・O・ライシャワー教授は、「日本近代の新しい見方」の中で、「決して、工業化に至る奇蹟的な近道だというものがあったわけではありません」、「はじめは政府が、社会秩序や金融・財政面で、まず確固たる基礎づくりを行ない、その後に経済の繁栄が可能となったわけです」と。

我が国も、かかる社会の基礎条件を確立するために、一九七二年の「十月維新体制」を朴大統領が自から次のようにのべている。「とくに、革命が不可避なものであったわが国にとって、真の民主主義を再建確立するための過渡期的な段階の民主々義は、どのようなものでなくてはならないかという点を考えなくてはならない……」と。換言すれば、アイデアのほうが先でインダストリゼーション（工業化）のほうが遅れている。

即ち、工業化は地についていないのに、頭の方が先に行っている場合の調整といえよう。

日本の場合も、一八七〇年代に、当時のアメリカの大統領グランドが、「民主々義化をあせりすぎてはいけない。それは非常にむずかしいことなのだから」という忠告をしている。一国を二年間のうちに工業化しようとか、一年で民主化しようというのは絶対に不可能なことです。

このように、韓国では自らの力で民族の活路を開拓するために、「十月維新」を断行し、国家体制の整備と強化によって、政治的な安全をかつてなく堅固にかため、国力の発展に画期的な転機をもたらした。

その後は、かつて日本が近代化を推進したように、「一方では、経済発展における民間の積極的な役割を、大幅に許していたこと、このことによって、日本の工業化の大半は、実に、この民間の積極的な役割によって可能になった」と、ライシャワー教授の指摘のように、我々も居住地や、国の内外を問わずに、「血は水より濃い」との巨視的立場で我が民族は政治的斗争イデオロギーを克服し、大同団結して、激変する内外情勢に能動的に対処し、分断国家の平和的統一を、一日も早く実現されるよう努力すべきである。

先進的な社会で、ガラクタ道具の洪水が人の心を荒廃させている時、世界人口の三分の二は、まだ貧困と飢えの脅威から解放されていない。「パンのみにて生くるにあらず」よりもまず、「パンなくして生くるあたわず」なのである。

世界銀行の発表によると、一九五八年以後の八年間に、一人当り国民所得七百五十ドル以上の二十七ヶ国（世界人口の二五％、世界の富の七五％を占める）では重大な内乱は発生していないのに、一人当り国民所得百ドル以下の貧しい三十二ヶ国では、一国二回の割合いで大きな暴動が発生した。『市民政府論』より。

このように、どの社会にとっても、大きな危機はいうまでもなく貧しさが根本的原因である。この貧しさを一日も早く克服することのみが、民族・国家・政治・社会も末将に対して明るい希望と自信を持つ根本的な基礎条件となる。

このように、現段階に於ける我々の祖国に対する義務は、ただ単なるイデオロギーの論理的抗争ではなく、農業国の貧しさから解放されるための民間人としての豊かな社会を築くために全身全力を発展向上の方向へと努力することである。エコノミック・アニマルと言われても、いざ仕方のないことではないか。

## 無言で通じた血縁

崔秀美（大阪府泉大津市若宮町二の三 16歳・無職）

出発の一月二十四日は、とっても寒い日であった。この日の午前、大韓航空（ＫＡＬ）機で一路「祖国」へと向

った。寒さはとっても厳しかったが、天候には恵まれた日程であった。不安と期待を胸に秘めながらの今回の母国訪問旅行参加であり、また生れて初めて海外に出るのであるから、何となく言いようのない気持ちであった。

およそ一時間ほど経過したころ「祖国」の上空にさしかかった。地上に広がる田畑、何となくのどかなムードが感じられ、おだやかな光がまぶしかった。

金浦空港に飛行機が到着、手続きの窓口で私とオバが順番を待っていると、そこは外国人用の窓口だったので、知らないうちに根強く心の中に宿っている〝半ば日本人〟の自分というものに対して、改めて認識せざるを得なかった。

従来、私は非常にあわてんぼうで、よく友人から、黙っていると賢く見える、といささか皮肉めいた事を聞く位に楽天家、おっちょこちょいなので、この先こういった失敗をなるべく起こさないようにしようと決めた。

そして、二十四日の夕方に金浦空港のロビーに出た時の歓迎ぶりは、ほんとうに驚きの一言につきる。人々の温かい拍手が一番うれしかったし、また親近感を一層増した。その時にいただいた色あざやかで力強い感じの花束は、韓国、祖国の第一印象である。

翌日から三日間、各地を見学、例えば製鉄所、造船所等の産業施設、そして名所旧跡、民族資料館、仏国寺等を見学するため、バスで全国をまわることになった。私は今回の旅行に参加するに当り、なるだけ多くの所を見たいし、多くの人と話し合いたいと思っていた。しかし、仕事の都合上、日程が参加した中で一番短かったと思う。それに母国語すら聞くこともままならず、もちろん恥ずかしい事に喋れない。

私達二世の世代になると多くの同胞が日本の学校へ通っているし、学校の勉強で精一杯。また、日本では高校、大学への受験難で、私も類にもれず学業だけで精一杯の学生生活であった。しかし、祖国に対して興味がない訳ではなく、歴史や地理、世界史等の社会科の援業で、祖国の事を習う時は勉強するという感じでなく、自然に頭の中に入ってきたのだから不思議だった。

そして今回の旅行では、私達の「祖国」がこんなに大きく発展しているとは、ほんとうのところ思いもよらなか

った。十年一昔ということを私は実際見た訳ではないけれども、一九五〇年代に起こった不幸な戦いから、廃虚の街へと化した土地を、ここまで復興させるということは、なみたいていの事ではないと思う。

そして、街の中は建物も道路もよく整備されていた。私はどうしても日本と比較してしまうが、日本も戦後、飛躍的に発展した経済国家だという。日本と祖国との諸々の条件が違うが……。しかし、自分の祖国はいつまでも平和で美しい国であって欲しいもの。

「祖国」の人と接して、一言に人間性というのはむずかしい。滞在日数の少なかった私にとっては接する人も少なかったのである。しかし、ガイドさん、または見学工場の人々、ホテルのウェイトレス、ウェイターやサービスエリアの店員さん、食堂の人等、ほんとうに親切な人々が多かった。目に見える配慮より、温かく無言の中から感じるものの方が大きかった。そして人間が大らかであるように見えた。

金浦空港から降りていただいた花束と同じように、発展させるという力強い団結が感じられ、各人規律がある。よく整備された道路、建物等、規律正しい発展へと突進していると思う。また、山に木を植える運動等も根気よく行われている。そのこと一つとってみても、全体が一致団結しなければできないものだと思います。

一番羨しいことは、自由に人を愛し、愛せる事である。私達在日同胞の適齢期の人達は、人数からとっても日本人が多く、そして学校も職場も周りは日本人ばかり。私の知り合いの人も多くの人が日本の男性と結婚している。もちろん、国籍など問題ではないと言えばそれまでですが、結婚に踏み切るには、やはり両者とも悩んだと思う。せまい範囲の同国人よりも、広い範囲の日本人の方が、やはり理想に近い人が多いのは当然だと思うのである。そして、私達同胞は、姿、形等が日本人と同じだということが、かえって不幸な事だからである。もと祖先は日本人も北方騎馬民族なのだから、似ているのは当然であるが……。

三、四世の代は考え方から全てのものが日本化されるのは当然ですし、日本人になりすますことも可能なのだから私達は決して日本人と結婚する事が不幸になるとは考えていないが、いくら日本人化されていても、血は争えない事が現実であると十分承知している。

しかし今現在、自分がその立場の年齢になると単に批判する気持ちにもなれず、また私自身これからどうなるのか自信がない次第である。その点からみれば自由に、そして遠慮、気がねなしに人が好きになれるのは、ほんとうに素晴しい事だと思う。そして祖国の男性のりりしさ、男らしさは、何か日本人にも、そして在日同胞にもない印象を受け、非常に好感が持てたのである。逆に考えてみると、私も祖国の女性の女らしさを見習わなければ……と思い反省する次第である。

製鉄所、造船所を見学した時、まずスケールの大きさに圧倒され、人々が意気軒昂と働いていた。私達訪問団は見学のため高い所から見せていただいたが、私は少し高所恐怖症なので足がガクガクした。それでも、まっかに流れる鉄が、もの凄いスピードで製錬化されていく。行く先々でガイドさんや工場の人々の説明に耳を傾けたりしたものである。そして確か製鉄所の近くで石油が発見され、今現在ボーリング（試錐）中で、質や埋蔵量を調査中とのこと。その場所をバスで通過する時、良質の石油が多く出ますように、と心から願った。

次に民族資料館と仏国寺――私にとって一番良かった場所である。各産業のスケールの大きさに驚いていた私は、やはり資料館と仏国寺についても、広々としたムードであった。展示されているものは多く、欲を言えばもっとゆっくりと見たかった。それでも鉄器、陶器、書物、刀剣等、昔の物とは思えない位にデザインが良かった。色合いも多少はげていたが、それが年月を経てきた重みを感じさせ、一層素晴しかった。

仏国寺では、長い坂道を他の人達と話しながら、春になると満開になるという木蓮を両端に、本堂へと向った。確か二つか三つのお堂の中に極楽殿という所で私も御拝銭を投げ、願いをかけた思い出。そして帰り道で、ガイドさんに「祖国」の空気を缶詰にして持って帰りたいというと、驚いて笑っていたことなど、楽しい思い出の一コマです。そして、各バスにはカメラマンが同乗していて、私達は焼き上がった写真を見せていただくと、なんとほとんど私達が写っているには驚いたし、また写真も大変奇麗に写っていた。母に写真を見せながら、私はやはり土台が良いからねと冗談を言ったが、カメラマンの腕と、そして何よりも空気の澄んでいる事も一因していると思った。

行く前の不安は、訪問旅行中、沿道の人々が手を振って歓迎して下さった事や、また温かい拍手と共に消え去った。

今回の母国訪問団に参加し、初めて私自身民族意識というか、自分にも書類の上だけではない、ほんとうの「祖国」があるのだと感じた。今までは、自分は日本人でもなく、また韓国人という自覚が持てなくて、無国籍的な自分であったようである。もちろん、私の両親、つまり二世までは、ある程度民族意識があるでしょうが、私達三世、まして四世へと後世代になると、潜在的意識の中にも、民族意識が芽生えて来ないと思う。

今回の訪問のように、自分の「祖国」を見るという行動、すなわち文化、史跡、産業、市街を見る、食物を味わう、そしていろいろな知識を吸収し、おいしい空気をいっぱい吸うことが最も大事であり、私も参加するという行動を起こして大変よかったと思うと共に、これからの自分の人生に大きくプラスさせ、ぜひとも役に立つようにと自分自身に言い聞かせたい次第である。

## だまされていた私達

鄭　道植

（大阪市西成区鶴見橋一—二
59歳　運転手）

皆さん。私達はすっかりだまされていたのです。今の今迄、朝総連の人達が宣伝している言葉を、すっかり信じこんでいたのです。妻はもちろん共産主義思想に関心はなかったのですが、私自身や、弟は文字どおり朝総連の共産主義思想のバリバリでした。

しかし、最近になってこれに疑問をもつ様になりました。その時民団支部の人が、朝鮮籍の人も簡単に韓国へ訪問出来ると聞き、私は早速、私自身や弟を今の機会に、韓国のありのままを見聞し、真実を私達のこの目で見てやろうと思いました。

しかし、大変なことでした。もう朝連の人々がやって来て、「韓国へ行ったら、もう日本へ帰れないぞ。どこかへ、やられてしまうぞ」とすごんで来ました。内心不安でしたがこんな時、虚偽の宣伝に迷わされない様に、勇気を出して、時には涙をうかべながら、弟を説得した結果、しぶしぶ(納得したのか)、重い腰を上げ、旅券の手続きや入国管理局へ出向いてくれました。

とにかく自分の目でたしかめたいのです。この手で母国の土にさわってみたいのです。こうなったら思想なんか、どうでもよいのです。民族の血が騒いできたのでしょう。望郷の一念が私を勇気づけてくれたのです。

大阪空港を離陸して、アッという間に金浦空港へ到着しました。まるで私が、一族郎党の引率者のようでした。空港では、たくさんの人々の歓迎を受け、皆の目には涙が流れていました。これが母国なのです。無意識に、妻の手をにぎりしめ、バスに乗りました。すると突然、バスの後方に、妻の知人で名古屋での朝連のバリバリが手を上げるではありませんか、本当にびっくりしました。私達が韓国訪問の声をかけた時、がんとして受付けなかった人達も同行していたのです。弟は、少し勇気が出て来たのか、顔が全くこわばっていたのに、だんだんとほぐれて、妻と何かしゃべっているのです。

二十台のバスがパトカーに先導されて、すばらしい高速道路をまっしぐらに走っている。造船所も見学しました。蔚山工業地帯も、そして自動車工場も………。案内者の親しみのある言葉で説明していただき、我れを忘れて国産自動車にさわってみました。まるで我が子供が生れた様に。日本に負けない程、かっこいいスタイルでした。

セマウル運動のおかげでしょうね。農村も変わりました。わらぶきの屋根もありません。全く別天地へやって来た様です。途中、朴正熙大統領の故郷の近くを通りました。私達の故郷と同じです。すると、弟は、目をらんらんとさせているのです。そして妻は弟にいっているのです。自慢をしているのです。私達と大統領と同じ故郷である

ことを。自然と私もうれしくなりました。すばらしい国づくりをやってのけた大統領、その大統領と同じ故郷なのです。なんだか、うきうきしてきました。

遂に故郷にやって来ました。可愛い子供達が迎えてくれます。村中の人々も笑顔で私達の肩や手を握ってくれます。本当に有難いと思いませんか。朝総連の私達を敵とも思わないで……。しかし私達は、自分の親達に、こっぴどくしかられました。まるで子供時代のようなかっこうで。「お前は、何故もっと早くわしをたずねてくれなかったのか、他の人達は数年前から墓参りをしているのに、お前はバカだよ」。私達は泣いてあやまりました。

そして本当に後悔しました。朝総連のデマを信じてしまったばかりに、親までにも不孝にしたのです。このままでは死んでも死にきれません。今度は自分の手でパスポートを申請し、少くなくとも一年に一度は故郷へ、そして親達に元気な顔を見せなければなりません。当然の義務として。

食堂に立ち寄り食事をしようとしました。店の主人は、「本日はごはんがありません。政府の政策として週に二度は、めん類を出す事になっております。今日はその日なのです」。私はびっくりするより、むしろ感心したのです。少しでも米を大切して、国に協力する事の大切さ、そしてたまにはめん類を食べる事によって、胃の負担を軽くするのは、健康上にも良いのです。妻も一家の主婦なのですね。やがて私達の方を見て、満足そうに笑っていました。

約束された日程も終わり日本に無事に到着しました。予想以外、本当に無事に。初めのビクビクした気持もどこかへ、ふっとんでいたのです。私の妻と相談して、少しの金額ですが、「朝銀」に預金してあった金を、早やばやと「韓国」系の銀行へ移しました。今迄、朝総連に寄付していたお金を、今度は自分の故郷に少しでも土地を買い、ここで老後を、また骨をうずめたいと思っています。皆さん、私達の家族はもうだまされません。

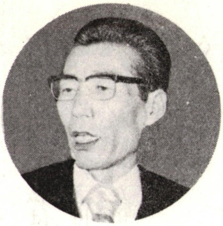
そして朝総連の人々にいいたい。貴方がたは、どうして、だれにたのまれて、ウソをいっているのか。もういいかげんにしてくれ！

私達も可愛いい子供や、そして孫達のためにも、だまされない様に、間違った教育をうけさせない為にも、私達は頑張りぬかなければならぬのです。

# 再帰国を老母に誓う

李亨植

（滋賀県近江八幡市長光寺748の12
前滋賀朝銀副理事長）



釜山の水営飛行場に降りたったのは、去る一月二十七日の午後であった。まさに三十一年ぶりである。反韓国、反祖国の大罪をおかして今更何の面で里の土が踏めよう、と一時はためらったものの、血縁の愛はイデオロギーや体制を超え、どうしようもない不可抗力的な強引力で私を祖国へと呼んだのである。

顧みれば、私は三十一年前一人で日本に渡り、鉄工所の見習工を皮切りにデパート、商店等の店員を転々しながら苦労を始めた。

しかし鉄鋼業を営む友人の助けもあって、鉄鋼販売業を開始、儲かり始まる頃から朝総連の誘惑がはげしくなり、ずるずると引き込まれていったのである。

私は彼等の強要により毎年収入の半分に近い五千万円以上を献金の形でだしたのであり、朝総連は六九年、金日成功労勲章を始めとする十四個の勲章を胸につけてくれたのであり、地位もますます高まっていったのである。

しかし、私の少年時代に夢をふくらませてくれた故郷ぱ慶北迎日郡清河面清溪里におられるお母さん李道山（八十一）と家内徐可妹（五十四）長男と妹らとの血のつながりは何がなんでも切ることはできなく、年がら年中夢にも忘れることはできなかったのである。

そうこうしているうち、昨年から在日民団が推進してきた朝総連系在日同胞母国訪問事業で韓国の発展相が知ら

れはじめてから、朝総連の宣伝がまっかなウソであることを見破り、訪問団員として参加することを決意したのである。

去る一月二十日頃、民団に訪問団員としての登録をすませてから一週間は、朝総連の脅迫と妨害工作を避けて、知り合いの家で泊まらせてもらったりして、やっと帰省団にくわわることができたのである。

わらぶき屋根ばかりを考えながら里帰りした私の目にうつった故郷は、目を見張らんばかりに変っていた。曲がりくねっていた田んぼの畦、洪水の時には流水にながれ去っていた飛び石の橋、崩れかかっていたわらぶきの家も今は見い出すことができなかった。

セマウル運動で自立・自助・協同精神が培養され、それ自体が精神革命で、もう村中うろうろしている者はなく皆がほがらかに、そして勤勉に働いていた。

実を言えば、私は古里を訪ねるまでお母さんはもう亡くなり、せいぜい弟妹らだけが生き残っていると思ったが、何と八十一才の老母は私の手を力いっぱい握りしめながら、「私が死ぬまで幾度でも来てくれ」と誠心こめて頼むのだった。私はただ母のしわだらけの手を握ぎり返すことで、母の願いに答えたのである。

# 母国の大学に進学誓う

金 鈴 玉（大阪韓国中学校2年 前朝鮮中級学校生）

二月二日、学校から帰宅すると、父が「アボジと韓国へ行こう。うちらの本当の祖国に行って見よう」といい

ました。僕はまったく予想をしなかったことなので、本当におどろきました。しかし心をわくわくさせながら、韓国へ行くための手続きを終えました。現在、母は韓国へ行っていますが、留守中は姉が妹たちの面倒をみますので、家の事は大丈夫です。いよいよ明日を待つだけだと思うと、夜もねむれなくなりました。

二月三日、僕達は飛行場に行きました。飛行場には、母国訪問団の方達が沢山おられました。民団の人達も僕達の母国訪問を喜んでくれて、李英勲校長先生からも「母国の学生と、学校をよく見学してくる様に」と言われました。僕は少し緊張しながら飛行機に乗りこみました。

一時間五十分後、飛行機は金浦飛行場に到着しました。たくさんの記者達が、僕と父の所に来ていろいろと聞かれましたが、僕はうまく答える事が出来ません。そして歓迎者のみなさんから、きれいな花束をもらって大変光栄に思いました。バスに乗り、いよいよソウル市内の見学です。僕は本当におどろきました。

それは、朝総連の学校に通っていた時、韓国は恐ろしい国で、行った人は日本へ帰って来れない。ソウル市内はゴミだらけの都市でよごれている。と学んだが、現実のソウルは全然違い、僕は全くだまされていたと気がつきました。高速道路は日本よりすばらしく、国産車も多く走っておりました。

二月四日、今日は、ソウル市内の見物です。大きなアパートや家も建っていました。案内の人も親切に説明してくれました。ソウル駅は昔、東京駅を建てた人が建てた駅であると説明してくれました。又南大門も古色燦爛として建っていました。周りはきれいな花がいっぱい咲いていて古代と近代の調和をとっていました。食事を終えて、市内を両分して流れている漢江をぐるっと廻りホテルに帰りました。

二月五日、ソウルを出発。起亜産業の自動車工場を訪問して車を作る作業をしっかり見てきました。帰りには、おみやげもたくさんもらいました。それから慶州へ出発しました。

二月六日、僕達は他の人達と共に、テレビにも出演しました。いろいろなインタビューを受け、その時僕は、母国の大学へ進学することを決心し、父にもしっかり勉強することを誓いました。

造船所を見学。未完成の船やすでに完成された船がたくさんありました。それから、浦項製鉄所にも行きました。

工場内は全て自動化されていて、ものすごく発展している様子をじっくりと見学しました。造船所へ行く途中、石油のでる所を見ました。僕はあまりにも発展しているので今まで僕が全然知らなかった祖国を見て、はじめて自分をはずかしく思いました。でも、とてもよい勉強になりました。

二月七日、今日で団体行動が終り、朝食を終えてバスで故郷へと向かいました。父の兄さん即ち僕には始めての叔父さんは大変僕を歓迎してくれました。父は、昨年の十一月に一度母国を訪問したのです。今回は僕が訪問するという事で故郷のみなさんはたいへん喜んでくれました。父と父の兄達、そして親せきの人達が集まって夜遅くまで歌を唄い、踊りながら昔話しに花を咲かせていました。

二月八日、朝食を終えて祖先の墓参りをしました。次の日、村にある中学校を訪問しました。ちょうど卒業式の予行演習をしていたので、学生に会う事はできなかったけど、校長先生や他の先生に会って話をしました。そしておみやげと国語(グゴ)の教科書をもらって学校を出ました。

それから、父のおい即ち僕のいとこが通っている国民学校にも行き、国民学校の教科書をもらいました。

二月十四日、五日間滞在後、今日は馬山市内を見学し、タクシーに乗っておばさんの家に行きました。家では、初めて見る弟達が僕を見て兄さんと呼んでくれました。僕は涙が出る程うれしかったのです。

二月十七日、おばさんの所へも行きました。しかし、あいにく結婚式にでかけて留守でした。が、親せきの人達と楽しく過しました。父は夜遅くまで踊っていました。

二月十九日、いよいよ明日は日本へ帰ります。準備を終えてたくさんの人達に、感謝のお礼を述べました。

二月二十日、日本へ到着。習日、校長先生そして担任の先生にもあいさつをしました。十八日間あまりの生れて始めての母国訪問を終わり、日本へ帰ってみると、朝総連の学校に通っていた時の友人が、無事に帰って来た僕を見ておどろいた様です。

最初、韓国へ行く時はさかんに僕を行かせない様に、又は、いやがらせをしましたが、日本へ帰って来た現在は、友人達の前に生まれ変わった姿で堂々と胸をはって歩き、そして今現在大阪韓国中学校に在学している僕は、今度

の母国訪問の良い経験を生かし、クラブ活動にも汗を流がし、勉強にも精を出して、こんどこそ朝総連のいかなるデマやウソにも、おどろかされないしっかりした自分になりたいとかたく誓いました。

註＝金鉉玉君は朝総連系の南大阪朝鮮中級学校から七五年十二月十八日付で大阪韓国中学校（金剛学園）に編入学した生徒であるが、父親の金宝培さんが是非とも一人息子である鉉玉君に自分と同じ感激と祖国愛を味わせたいからという理由で、母国旅行の許可を申し出たので七六年一月の末に学校当局はこれを認め、「旧正月省墓団」の一員として母国訪問旅行の機会を持つことになったのである。

## 美風良俗を教えたい

金鳳熙
（大阪府高槻市別所本町十三の一〇
55歳・前朝総連婦人会員）

朝鮮籍をもつ朝総連系の同胞も母国訪問ができるとの勧めに応じて、去年五月、始めて金浦空港に降りたったのに続き、今度の訪問は二度目である。

36年間、日本で住みなれたとは云え、それは厳しい姑と一諸に借屋暮らしの生活をしていたような物であった。

36年目の母国訪問は本当に自分の実家へ里帰りをしたような気持であった。肩に背負っていた重たい荷物を地面に

下ろしたときのような、けわしい山道を登り、山の頂上から、眼下に拡がる風景を見降ろすようなときの安らぎの気持ちであった。

夫は朝総連の高槻支部の幹部役職にいたとしても、又、私が婦人会に名を連ねていたとしても、政治家でもなく、思想家でもない私たちが、何故、飛行距離一時間近くの故国への往来が、できなかったのか悔まれてならない。

最初の訪問のとき、韓国内に親戚や肉親がおらない夫の暖かい理解がなかったならば訪問できなかったと思う。夫から「親と兄弟に会いに行くならば、たとえ、朝鮮籍のままで良いといわれても、韓国籍に訂正して、行って来なさい」と、勇気づけられ、嫁いだ長女を連れて行くことにしたのである。

韓国籍に切り換えに市役所の窓口の係に行った時も、係の人から「ご主人の了解を受けましたか」とたずねられ「その通りです」と答えても、しばらくは不審な様子をされたこともあった。恐らく、夫は朝総連に所属していることを、市役所でも知っていたからであろう。私は今も、特別母国訪問事業を行なう民団の方々や、本国政府の過去を問わない温かい歓迎に対して、心から感謝しています。と同時に、人道的な立場で寛大な理解と、励ましをしてくれた私の夫にも感謝している次第です。

私の長女は二世ですから母国を知りません。日本で学校の先生を通じて、また朝総連の宣伝を聞き、韓国を知っているような状態でした。長女が思っていた母国は、国土のせまい、文化の低い貧しい国であったのです。所が自分の肌と自分の目で、また自身の足で母国の大地を踏みました。何と大きな国だろう！何と活気に満ちた人々だろう〟長女は最初に発した感嘆の言葉であった。わが国の由緒ある文化と伝統ある美風良俗を知れば知るほど母国の本当の姿に驚くばかりでした。

私が幼いときから、今の家に嫁ぐまで育った昔の田舎の姿はすっかり変り、日本で聞いた事とは雲泥の差があった。実家の親戚達は各自、立派な職責と職場に働いているのを見て、大変、心丈夫に感じました。若い者は老人をいたわり、子は親に孝行をし、親は子の教育と育成にはげみ、家族の人と親類の間には仲良くして、心を配り、先祖の墓と位牌を大切にして、近隣の地域社会の開発と発展に自ら進んで協力している母国の現実と日本の国と、

日本にきている私たちの二世、三世の利己的、個人主義的生活態度に比べて、私は全く、心深かく、感服しました。私は固く、心にきめました。若しも、私が朝総連に所属していて36年ぶりに帰国したことによって、母国における私の肉親や親戚たちに迷惑がかからないならば、そして日本に帰ることができたなら、つぎはきっと、息子を連れて再び訪問しようと心に決めたのである。

第二次特別母国訪問団に私は次男の幸男（大阪朝鮮高級学校卆業）を連れてさる一月二十四日、大阪国際空港を飛び発ちました。日本という自由主義国、ある一面ではだらくしきっている国柄の中で、徹底的に金日成個人偶像崇拝の教育と共産主義政治教育を受けたこの次男坊に祖国ではどのように個人々を大切にし、各自の自由な意志によって、能力に応じて将来の進歩なり生活づくりなり各自の家庭や親類やお隣りとの間に義理や情誼をどれほど大切にしているところを学ばせたかったのである。息子も長女と同様に戦前戦後の母国と昨今の祖国の発展ぶりの比較はできません。大阪朝鮮高級学校で、悪宣伝されたイメージは余りにも違っていたので非常に驚いています。礼儀正しく、熱心に勉強している学生らが、きびきびしていて、この国を自分たちが「良くするのだ」古い伝統のある文化を受けつぎ、発展させるのだと自負している若者の姿、国民全体が明日の栄えある母国の建設を目ざして都市や農村をとわず、勤勉に働いているのを見て、私の次男は、生まれ変った気持で、祖国、大韓民国のためになることなら、これからは、何んでもしなければならないと親せきの方々に話していたのである。

とくに、私は二度の訪問によって母国に於ける教育熱の高いのに驚いた。韓国の人口は約三千五百万人いる中に、学生数は九百万人いると聞いている。国民総数の$\frac{1}{4}$が学校に通っているのである。ということになるから、これは、恐らく世界中にもまれな実例ではないかと思う。

また、教育の内容も、北韓のように金日成唯一独裁思想の教育ではなく、あくまでも個人の幸福を大切にし、韓民族の固有文化を守り、美風良俗を伸ばし、そして人と人とのつながりを大事にしながら、国家経済の建設発展をはかる教育をしているとの事であった。

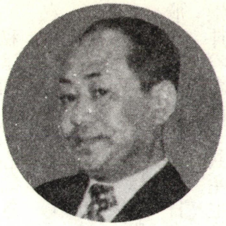
国防教育においても、二度と共産軍の侵略を受けないように自衛能力を高めることが、北の侵略を防ぎ、平和維

持の道であると教えているのです。
私は次男を連れて行き、本当に良かったと確信しています。誰がどんなに悪い嘘の宣伝謀略をしてもそれに負けずに、この次の機会が与えられたなら、長男や三男も勿論のこと、何とか私の夫も、たとえ、夫の親族が国内に居られなくとも、必らず同伴して、祖先のお墓参りをしたいと切に念願しております。
終わりに、重ねて、私たちに人間としての道理を行なえるように道をひらいてくれた各界、各層の方々に心からお礼の言葉を申し上げる次第です。

# 命をかけた里帰り

姜　喜　昌
（東京都荒川区居住　50歳
元東京朝鮮第一初中級学校教員）

私が三十年近くも懐かしい故郷を訪れようとしなかったのは、様々な要因があってのことだ。なかでも、八・一五解放から朝総連組織を離れるまで一貫して左翼運動に従事してきたことが最大の原因になっていた。
「解放」直後、十代の私はその頃の一種の〝流行〟とでもいいましょうか、熱病に浮かされたように「南労党」（南朝鮮労働党）に加入し、反政府闘争を積極的に展開した。その後大阪に来てからは、「民青」（在日朝鮮民主青年同盟）に加盟し、中央常任委員まで歴任するようになった。「民戦」内の「民対派」対「民族派」の対立から朝総連が結成されて以後、しばらくは活動



休止状態になったが、五〇年代の後半に東京朝鮮第一初級中学校（荒川区にある）の教員に任命され、教鞭をとるようになった。

長い間にこのような浮き沈みはあったが、私は朝総連系列で民族運動を続けてきたわけである。懐かしい故郷であるからといって、朝総連組織から離反したといって、韓国に行けるはずはない、と固く信じていたとしても当然のことではないか。

思えば、私は父親の死に水も取っていない。現在、七十四歳になる老母とも別れたきりだ。生後わずか三ヵ月の乳飲み子を老母のもとに置いたまま、父親らしいことは何もしていない。婚期も近づいてくる。父親らしく花嫁ぐらい捜してやらなければなるまい。このように思いつつ、日々を悶々と過ごしていたわけだ。

ところが、もしや行けるのではないかという機会が訪れた。民団側によって提起された「朝鮮籍」のまま訪韓は可能という呼びかけによってである。この訪韓事業によって朝総連組織で働いていた幹部活動家が韓国を訪れるようになった。私の周囲でも行く人が多くなる。私が、死んでも行けないと思っていた故郷に〝もしかして〟行けるのではないかと淡い期待を抱くようになった。そして期待は現実にとって変わった。ついに私は韓国を訪れたのであった。

しかし、これは私個人の人間的感情から見た訪韓の決意である。このような人間的感情に油を注いだのは朝総連の現状である。逆説的な言い方をするならば、朝総連の非人間的体質に嫌気がさし、我々が信じていたものとは異なり、朝総連に在日同胞の将来を託すことができなくなったことで、私の訪韓が実現した、と言うこともできるのだ。

その一つは、六〇年代中頃のことであった。中級学校の教員として働いていた私は、ある日突然、何の理由も知らされることなく学校を辞めさせせられた。校長が私を呼びつけて「あなたは明日から出てくるな」と言い渡されたのである。私はどうしてなのかさっぱりわからない。生徒や父兄達も同様であった。

私は当時、中学三年生を受けもっていた。あと二ヵ月で卒業を迎えるという時期であった。生徒や父兄達は辞め

させられた訳を聞くが、答えられるはずがない。ついに生徒達は真相を求めて授業放棄、ストライキまでするようになった。浅草や上野に多い父兄達の間でも、私が教職から退く理由を明確にせよ、と学校側に要求するまでになった。

私は悩み抜いた末、これ以上事態を混乱させるべきではないと考えて、だまって身をひくことにした。学校を混乱状態に陥れると、それが直ちに生徒達にはね返るしかないと判断したからだ。

こうして私は、朝総連民族学校を辞めた。いや辞めさせられたわけである。しかし、このようにして教壇から不当に追い出された教員は私一人ではない。やはり同じ学校の教員であったが、学校当局の受けの悪かったある人は、教壇に立たせてもらえなかった。徴罰として毎朝校庭を掃除させられたあげく、ついに学校から追放されてしまった。

果たしてこういうことが現代の社会であっていいことだろうか。断じて否である。優秀な教員、誠実な教員を「思想性が足りない」「政治的観点がよくない」といった理由で学校当局者、いや学校長個人が意のままにできるような体制がいいものかどうか。その後、朝総連民族教育の衰退ぶりを見るまでもなく、答えは自ずと明らかだ。

しかも、学校当局は教職から離れた私に追い打ちをかける。学生や父兄ばかりか、同僚達にも私と接触させないようにするのだった。道で会っても、かつての同僚達はあいさつさえしなくなる。実質的な〝村八分〟だ。朝総連は私を不当に処分したばかりでなく〝村八分〟という前近代的手法をもって、私に対したのだ。

このように組織は歪められてゆく。上から下まで大衆をないがしろにした官僚主義がまかり通るところとなった。私は朝総連のこのような体質にほとほと嫌気がさした。どこかで大きく間違っているのだ。それも枝葉末節的なものでなく、根本的なところに誤ちがあるのだ、と私は思うようになった。

私はもとより、多くの朝総連系同胞をして朝総連組織から離反させた最大のものは、「主体思想」「唯一思想」という名のもとに展開されている「北」の異常なまでの個人神格化だ。私が現役の教員として民族学校で働いていた時も、「金日成思想」一本ヤリの教育だった。民族解放闘争史は、金日成「北」主席中心に書きかえられる。「北」

権力の変遷過程がそのまま教科書に反映させられる。南労党（南朝鮮労働党）、延安派の粛清、そしてその他諸々の政治的党派が粛清されると、それは直ちに歴史改編作業として進められ、かれらが日帝時代に果たした民族解放闘争史上の役割まで否定・抹殺してしまうのである。

そして、この権力構造の変遷過程、歴史改作の過程がすなわち、金日成個人神格化確立への道に通じるのだ。過去多少なりとも、歴史を勉強したものであれば、このような「北」のやり方には疑問を抱くものだ。いや、勉強したものでなくても、皮膚感覚的にこれはどうもおかしいと思って当然ではないか。

しかし、韓徳銖議長をはじめ朝総連の指導者や幹部達は腹の中はともかく、そのようなことをおくびにも出さない。「北」のやり方には無条件服従する。正しいか正しくないか、そんなことはどうでもよい。「北」の指示には絶対従わなければならない。それが在日同胞の要求や願望にかなおうがかなうまいが、そんなことはどうでもよいのだ。

このような意味で、「北」において個人神格化が制度として確立される過程は、同時に「北」＝無謬だという一つの神話が確立される過程でもあったのだ。当然のことだが、朝総連が規約にもうたっている「民主主義中央集権制」と組織運営の原則は否定される。自己批判、相互批判はないがしろにされ、上部の指示はたとえ誤ったものであっても、絶対的に服従しなければならなくなる。相互批判のできない官僚的な組織となってゆかざるを得なくなってしまったのだ。

この傾向に輪をかけたものが「敵区」理論だ。日本という資本主義社会は、我が祖国の敵だ。このような所で朝総連は活動しているのだ。組織内外のことを外部にもれないようにしなくてはならない。組織に対する批判は必然的に外部にもれる。したがって批判は利敵行為だ。反革命行為だ、ということになる。健全な自己批判、相互批判して、健全な組織の発展があり得ないとするならば、これこそ組織の自殺行為というしかない。しかし朝総連は、自己批判を封鎖することで自殺行為を選択したのだった。

しかも最近では、金日成「北」主席に対する忠誠の三原則というものまで制度的に決められている「絶対性の原

則」「無条件性の原則」「信条性の原則」というものだ。こんな気狂いじみたものがまたとあるだろうか。そして、この「北」での個人神格化体制の上に、韓徳銖議長ら朝総連首脳部は、自らの地位の安定をはかっている。「首領さまの言葉はすなわち韓徳銖議長の言葉」というあの論理だ。朝総連に官僚主義がまんえんしないわけがない。その産物として形式主義、功名主義が発生しないはずはない。

私が朝総連に見切りをつけたのは、このような「主体思想」「唯一思想」の名のもとで露わになる朝総連の基本的欠陥に気づいたからだ。とは言っても、私は訪韓をそう簡単に決意したわけではない。過去の経歴が経歴だけに長時間のためらいがあった。いくら「過去を問わない」と言っても、私は韓国の法律にてらして〝罪〟を働いている。だから当然のことに、万一処罰されるようなことがあってもやむを得ないと思った。ある意味では悲愴な覚悟を固めて行ったのだった。

おおげさに言って、二、三年ぐらいは刑務所ぐらしを強いられてもやむを得ないと考えていたし、実際同伴した家内にも、そう言いきかせた。「言葉にはくれぐれも注意するように」とも言った。非常な決意をもって望んだのであった。ところが故郷に帰ってみると、どうだったか。悲愴なまでの私の決意をあざ笑うかのように韓国は変わっていた。日本において想像していた韓国とはまるっきり違うのである。

政治活動に長年参与してきた私は、朝総連から不当な処分を受けて以来、数年間政治活動もできず、かといってこれといった職もなく悶々とした生活を送らざるを得なかった。ふり返ってみるだけでも身ぶるいするような日々であった。

その間、訪韓した兄弟達から何回となく帰郷するよう勧められた。知り合いの民団幹部のさそいもあった。しかし、私の凍りついた心を動かしたのは、故郷の老母が人づてに帰郷を促す言葉を伝えてきたことだった。息子に会うまでは死ぬに死に切れないというのだった。私はいま、この人達に心から感謝している。

組織にまん延する官僚主義に反発して朝総連に見切りをつけた後も、私は長い間、それでも「北」と朝総連は「平和統一」をやろうとしている、と思っていた。ところが今度訪韓してからは、朝総連でいう「平和」がいかにウソ

八百であるか、現実をつぶさに見ることで納得することができた。

出発する前、私の頭の中には朝総連でいうオーバーな宣伝は割引きできても、日本の新聞が伝えるものはある程度信じていた。日本の新聞によると、韓国は「軍国主義」で彩られている。権力による強力な統制で民衆はにっちもさっちもいかない状況に追いこまれていなければならないはずであった。

しかし、短い期間ではあったが私の直接見た韓国は、どうもそうではないようである。日常生活必需品は豊富に出まわっており、民衆はどこでも、平和を楽しんでいた。若い人達は高い科学技術をいつの間にか身につけ、建設にはげんでいた。生き生きとした躍動感をいたるところで感じたのだ。

日帝時代の暗い時期を経てきた我々の世代は、戦時体制がどのようなものか、体験を通して知っている。戦争を準備し、遂行するために最底辺の民衆がどのように犠牲を強いられ、暗い表情をするものか、本能的に感受することができる。したがって、私が韓国に抱いていたイメージも、そう明るいものでなかった。いや、やはり暗いものであったと言った方が正確であろう。

その上、私には昔の暗い故郷のイメージがダブついて映る。働くこともなく、深酒をしてはケンカをしたり、賭け事に明け暮れしていた人々の表情が昨日のことのように思い出されるのだった。

それだけに、韓国の現実は私を驚かせずにはおかなかった。昔のそのような暗い生活は、農村のすみずみにも見られなかった。そればかりか、自分達の村を少しでもよくしようと一生懸命働いている。生活革命が着実に行われ、人々の精神生活が一掃されたような感を受けた。

初めて会う義兄は、軍人だった。陸軍中領で兵器廠に勤めていた。実姉の間に四人の子供がいたが、現在では二十万近くの給料をもらっているとのことである。子供を大学、師範大学と高等教育を受けさせるばかりでなく、貯金して家まで買えるといったゆとりある生活をしていた。もっとも、この義兄の場合は、韓国でも上クラスの層で、今年退役することになっているが、それでも十万余円の年金がつくということである。

大邱で義兄と一緒に飲みに行った時のことだ。ある大衆酒場に入って飲んでいると、近所の派出所から勤めを終

えた警官数人が飲みに来ていた。私が日本から訪ねて来たということもあって、かれらとの間に話がはずんだ。やはり、かれらの生活状況に関心がゆく。お互いに酒を飲み交わす間に給料のことを聞いた。このクラスの警官の給料は約四万五千円ということであった。それでは、厳しいのではないかとたずねると、その中の一人は、私にこう言った。

「現在私の家族は妻と子供二人の四人だが、この給料で食べて家賃を払い、毎日少しずつはドブロクも飲め、まあ数年前に比べると我々の生活はよくなった。今後はもっともっとよくなりますよ」

私達はさしつさされつドブロクを飲み交わした。話し合っている間に、給料のことばかりでなく、下級警官の生活状況がほぼつかめるようになった。確かに日本と比べると、生活水準はまだ低いようである。しかし、かれらはだんだん良くなってゆくという自信を持っている。昨日よりは今日、今日よりは明日、我々の生活は必ず向上してゆくのだという確信が、末端の人達にまでゆき届いているのだ。

そして、このような確信があるからこそ、人々は楽天的になるのであろうか。だれもかれも自信を持っているように私には思えるのだ。かれらと対話を重ねるうちに私も心にゆとりを感ずる。かれらの楽天性が伝わってのことであろう。私は自分の過去を簡単に話した。そして「逮捕すればどうですか」と言って、みんなを笑わせるまでになった。大邱の大衆酒場での下級警官との語らいは、いまでも私の心に強い印象を残している。それが民衆の生活を肌を通じて感ずることのできるまたとない機会となったからである。

韓国は大きな変化を遂げていた。民衆の生活は日々よくなっているのだ。しかも韓国国民は、このように良くなりつつある生活を戦争で失ってはならないと思っている。南北間に平和が維持されてこそ、経済建設が可能だし、そうすることで自分達の豊かな生活が保障されるのだと信念に近い気持ちを抱いている。六・二五動乱という同族間の戦争が何をもたらしたか、身をもって体験しているだけに、他のどの民族より戦争への憎悪心は強いのである。韓国国民は、世界のどの国民よりも平和愛好国民である、と私はおくればせながら実感した次第である。自分の無知が本当に恥ずかしかった。

# 水清く空気さわやかな祖国

金祥彦
（大阪市生野区桃谷四―六―三
29歳・観光会社員）

祖国を離れて、日本にきて住んでいる私に、母国を訪問する機会を与えて下さったことに対して、心から感謝の意を捧げたいと思う。

一月二十四日、大阪空港を後に一路ソウルに向って飛ぶ飛行機の中に母国訪問団の一員として席をともにしていた。一時頃金浦空港に到着した我々は感激をもって母国の土を踏んだ。金浦空港では親戚達と共に母国民の温い歓迎を受け、用意されたバスに乗ってソウル市内に向った。中でも40～50年振りの父母兄弟、親戚たちとの涙の対面には、私もなぜか目頭が熱くなる思いだった。

一月二十五日朝からバスに乗って秘苑に着いた一行は日本で考えた祖国とは余りにもちがうことに驚いていた。高層建物が余りにも多く、国民生活も豊かで、私自身、想像だにしなかった状況を現実に見たのでした。秘苑を見物した我々はソウルを離れることになりました。

そして漢江をわたり起亜産業というところに行きました。ここは自動車を生産する工場でありました。工場の規模の大きさには再び驚かされました。もはや他国の力を借りなくても自らの力で、やって行けるという力強い思いをさせられました。

起亜産業を後にして、我々一行は一路ソウル―釜山高速道路を経由して慶州に向いました。途中の空気は日本では想像も出来ないほどきれいで、すんでいました。

そして農村は機械化され、住み良いところになっていました。慶州で佛国寺を観光した翌日、工業地帯の浦項製鉄所に行きました。我々一行は自らの目で祖国の発展の様子をしっかりとみつめました。

浦項製鉄所を見学した我々は、温い国民の歓迎を受けつつ蔚山工業地帯に到着しました。蔚山工業地でもその発展振りは目をみはる程でした。想像も出来ないほどの大きな船を一度に五隻も造っていました。その大きさは26万トン級のものでした。このように国民が団結して国の発展に貢献するようになった祖国はいまや自給自足の力が充分についたことを知りました。

このように私は3泊4日の団体行動を終えたのち、故郷である済州道を訪れました。済州道といえば、小さな島と考えがちですが、観光地で有名なところです。ここでも農村の発展は目ざましいものがありました。このように祖国の発展はすみずみにまで及んでおり、その上、水きよく、空気もさわやかな住みよいところという感を強くしました。

未だに母国を訪問したことのない若い人々に、祖国の発展状況を伝えると共に、民団に加入し、一人の団員として祖国のためいっそう努力しようと考えております。

## なくした財布が戻ってきた

### ―女子銀行員が届ける―

韓国鉄

（大阪市東成区東小橋　28歳
朝連高級学校卒業）

私は日本で生れ日本で生活している、現在二十八歳の朝鮮籍を持つ、総連系の高校を卒業した在日韓国人ですが、

この度の旧正帰省団に参加しないかと、ある人に勧められて、一月二十五日午前の便で帰省団の一員として参加しました。

参加するに当って、自分自身にも多少の不安と、どういうところなのか一度行ってみたい、という気持ちの時、家族と友達、総連の反対を受け、次第に反対を押し切ってまでも行ってみたいという複雑な気持ちのままで、二十五日便のソウル着の飛行機に乗りました。

金浦空港に降り、税関を通って表に出た時、たくさんの人の歓迎を受ける中で、泣き、抱き合う人を見た時、私も親族に連絡しておけばよかった、と感じたものです。

ソウルローヤルホテルで、夕食の時、歓迎会を受けているうちに、次第に不安が解消されていくのを感じました。

祖国の素晴しい発展ぶりを目のあたりに見て、私の想像していた以上であり、私の考えを訂正しなければならなかった。

いろいろな名所史跡を見学し、釜山に近づくにつれて、早く父親の生れた土地を見てみたいという気持ちと、もう少し時間があって、もっとたくさんの名所史跡や工場等を見学してもいいのじゃないか、と考えたりしながら、済州道へ行くのを楽しみに、三日間バスの旅行を楽しく過ごしました。

釜山から済州道行きの飛行機に乗り、空から島の全景を見た時、ここが父親の生れた島だ。素晴しい景色だなあと思った。飛行場に降り、車でホテルに行き、明日にでも新陽里のおばあさんに会いに行こうと考え、知人とサウナに入り、ビヤホールでビールを飲み、食堂に入って食事をしていると、財布をなくしているのがわかったので、私は、どうしよう、旅券も入っているし、持っていたお金を全部入れてあったので真青になったが、すぐ警察署に行き、話したところ、市内の女子銀行員が拾って届けてくれていたのである。

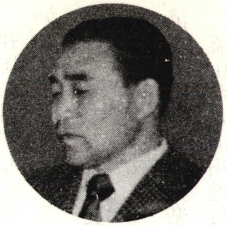
私は喜び、明日にでも感謝の気持ちを述べに行こうと考えて、その晩ホテルで眠った。あくる日銀行へ行き、感謝の気持ちを述べ、主人がいるということで、プレゼントにジョニ黒を渡し、故郷の新陽里に向った。

そしておばあさんに会い、コモニムとサンチュンにも会って、温かく歓迎してもらい、非常に感激した次第である。

十日間という短い日数ではあったが、私にとって生涯味わうことの出来ない感動と思い出が心の中に生れた。

# 若者にみなぎる覇気

姜自吉
（東京都葛飾区居住 51歳
前朝鮮人商工会監事）



私は七人の子持ちだ。みんな朝総連の民族学校にかよわせた。そして長女の場合は、民族学校の教員として働いていたこともある。私は人一倍、在日同胞社会における民族教育の必要性を痛感していた。それで国語を教える朝総連系民族学校に子供をやらなければならないと思っていた。民族学校の運営にも私なりに協力を惜しまなかったつもりだ。

こうして私は、商工人の立場から主に民族教育の発展になんとか役に立ちたい、と願ってきたのである。ところが、日が経つにつれて、民族教育の内容は変わってくる。六〇年代の中頃からであったように記憶しているが、「唯一思想」という名のもとに「政治・思想」教育が注入されはじめた。民族教育を実施すべき各級学校は、文字どおり個人神格化を内容とする「政治・思想」キャンペーンの場に変わってしまったのだ。

これではダメだと考えるようになり、国語を学べなくても、子供たちは日本の学校に入れた方がよいと判断するようになった。妻や子供たちの〝抵抗〟はあったが、それでも私の考えどおり押し切り日本学校に転校させた。そして、これを契機に私は内心ひそかに朝総連から離脱し、帰郷することを決心したのである。

私のこのような決心に油をそそいだのは、朝総連が非難してやまない民団の人たちが、自由に故郷に出入りして

いることである。

自由に韓国を往来することによって、私が内心「帰化」するのではないかと思っていたような人も、民族精神を取り戻す。その子供たちにしてもそうだった。韓国には民族精神を回復させる何か不思議な〝妙薬〟でもあるのだろうか、といつの間にか、私はそう信じるようになった。

そして、昨年十二月のことだ。なにげなく新聞を見ると、南北赤十字会談のもようが載っていた。同会談では韓国側が離散家族さがし運動と相互のお墓参りを実現させようと提案した。それに対して「北」側は、即刻拒否するとともに、韓国赤十字社は米軍撤退のためにわれわれと共同闘争をしようと逆提案している。だれが見ても韓国側の提案は道理にかなったものであった。たとえ韓国側に政治的な意図があったとしても、それは受け入れなければならないものであったろう。受け入れた上で実務的に煮つめなければならなかったはずだ。率直にいって私は、この時「北」側の代表は狂ったのではないかと思った。この連中とつき合っていてはダメだと心にいい聞かせた。

こうして私は、朝総連を離反することを決意するとともに、三十数年ぶりに故郷を訪ねることにしたわけだ。もちろん、朝総連ではだまっていない。様々な人を寄こして、ひきとめようとする。私の所属する支部の幹部もきたし、朝総連中央から直接派遣されたものもきた。しかし、時間をかけた私の訪韓決意は、その種の阻止工作ぐらいでひるむはずがない。

こうして私は、とうとう妻を伴って韓国に行ったのである。だが本音をいうと、訪韓までの私の胸中たるや、不安感でみちていた。朝総連に見切りをつけ、かれらのいうことはウソだと思っていても恐怖感は心の中から消えようとしないのだ。その中ではまだ朝総連の虚偽宣伝を清算できていなかったのである。妻もいつなんどき逮捕されるやも知れない、と私の手を離そうとしない。不安そうに周囲をながめては、おどおどしている。妻がやっと私の手を離すようになるまで二日かかった。手を離すようになると、こんどは生き生きとしはじめる。私のことが顔中にないかのように単独行動をとり出したのである。

つき並みないい方だが、やはり韓国は大きく変貌していた。なかでも私の胸を大きく打ったのは、韓国の青年、

子供たちの礼儀正しさと、若者らしい覇気にみなぎったその表情であった。私は、在日同胞が日本であぶく銭をもうけようと苦労している間に、何か貴重なものを失っているのではないかと思った。経済的な面に限定していうなら、韓国はまだ日本より遅れているであろう。しかし、民族の伝統、その精神を正しく継承しているという点では、在日同胞ははるかに及ばない。

私は、韓国に行く前、なんといっても故郷は貧しい、生活費のたしにと小遣いでも少々送ってやれば自分の義務は果たせるのではないかと信じ込んでいた。故郷に行って実兄に再会して、このような考え方がいかに傲慢不遜であったかを反省させられた。

故郷と肉親は何十万、何百万のお金より、私が帰ってくることに首を長くして待ちわびていたのである。両親をはじめ先祖の墓参りをしても、そう思った。経済力にものをいわせ、人を雇って、あるいは草かりをさせることもできるであろう。だが、先祖の墓に参拝しながら、私は財力だけでそれが守れるものでないことを、いやという程思い知らされた。

祖国の変化の中でも、特に私を驚かしたのは、その間の故郷・済州島の変わりようであった。私の常識では、石だらけで、こんなところに建てられるはずがないと思っていたところにも家がどんどん建っている。石が片づけられ、綺麗な道がつくられている。その昔、酒を飲んだり、バクチをしていたりしていた人々の生活態度は一変し、誰かれを問わず勤勉になっているではないか。これには本当に驚かされた。都会に比べて田舎はまだ遅れていたが、それでも、私の記憶していた故郷とはまるっきり違っているのだった。

これが話に聞いていたセマウル運動の成果なのか、と私は思った。わずか数日間の滞在ではあったが、このような変化を引き起こす原動力がどこにあるのかを私なりに発見することができた。

兄の家の近くに、大きな岩があった。道路づくりにこの岩がじゃまになったことはいうまでもない。村中の人々は、特に青年たちが中心になって、岩を崩す作業に熱心に取り組む。それぞれ自分の仕事の余暇を利用して少しずつ岩を崩していくわけである。当然のことだが、数日もすると岩は綺麗に片づいてしまう。

このようなことは、昔の故郷を知る私にとっては驚きであった。諦念にうちひしがれ、勤労意欲をほとんど持ち合わせなかった昔日とは全く異なり、少しでも自分の故郷を、自分の国をよくしようと人々は働こうとしているのであった。勤労意欲が国中にみなぎっているのだ。確かに韓国は変わったと私は故郷の小さな出来ごとを目撃することで、そう実感することができたのだった。

このような勤労意欲がみなぎっている限り、祖国の発展はうけあいである。その昔、貧困・韓国の象徴といわれた済州島も大きく変化している。まだ改善すべき問題点も多いが、この分でゆくと富める島にすることもできない相談ではないと、勝手な想像をめぐらすことも可能になっていたのだ。

その一つはミカンの収穫が思っていた以上に伸びていることだった。関係筋によると、昨年のミカン収穫量は約十万トン。倉庫など保存施設、それに輸送手段がまだ整えられていないこともあってミカンの豊作は、値下がりを招き、利益とならなかったようである。だが、私の見るところでは、保管と輸送設備を完備することで、その程度の値下がりは防げるように思えた。

二つめは、海産資源の豊富さである。さば、あじ、たち魚、いわし、たいなど、さまざまな魚が近海で捕れる。あわび、さざえ、なまこなども豊富にある。漁業技術さえ高めれば、この面でも可能性はまだまだ掘りさげることができるのではないか。

それに済州島では農業、水産業と関連した工場建設を積極的に進めることができる。油菜工場、カンヅメ工場などは、どんどんつくってよいのではないか。朝総連などは、済州島が公害に汚されるといって、工場建設に反対するキャンペーンを行っているが、それは無知の産物としかいいようがない。私は、いまの十倍もの工場をつくっても、公害の心配はまずないという確信を持った。

その上、済州島は自然の条件に恵まれた観光地帯である。道路舗装をさらに進め、観光客誘致のための宿泊施設、交通手段を充実させるならば、この面でも外貨獲得の可能性を伸ばすことができるだろう。これら諸事業発展の可能性を総合すると、済州島の開発は韓国それ全体と同じく、まだ端緒についたばかりなのだ。勤労意欲の向上にあ

わして、この豊富な天然資源は、明日の韓国発展の可能性を秘めているといっても過言ではない。
それにしても、先に述べた岩崩し作業に象徴される韓国国民の勤労意欲の高まりは大変なものである。われわれもやればできるんだ、豊かに暮らせるんだ、という自覚が国民の間に浸みわたっている。韓国の辺地である済州島で私は、その変化がどのようなものであるかをまざまざと見せつけられた。貧しいながらも、人々が真剣に働いている様相をみることで、私の心は清められた。日本という外国に住みながら、自分の祖国である韓国の実情を知ろうとしないばかりか、悪口ばかり言っていては、ばち当たりだ、と私はつくづく思った。
同胞である韓国国民がその間、どんなに苦しい思いをしてきたかを、なぜわれわれは理解しようとしなかったのか、われわれは大いに反省しなければなるまい。私たちが日本であぶく銭をかせいでいる間に、本国では国民たちが一丸となって立派な国を建設したのではないか。いままで、これといった協力もできなかった自分を恥ずかしく思うと同時に今後はこのままではダメだ、と私は決意した。
このように三十数年ぶりの訪韓は、私に様々な感動をもたらしたし、その感動が軸となって、私の物の見方、考え方を根本的に変えたようである。

# なつかしい祖国を訪ねて

張梓樞
（明石市大久保在住　50歳
前朝総連明石支部分団長）

故郷を離れて三十有余年、誰が忘れることが出来ようか。

正月や盆がめぐり訪ずれる度毎にはるか幼き頃の吾がうるわしい郷愁の想いで幾度想い出した事か。

日本の植民地統治下の我が故郷は日本の敗戦に依り三十年前に解放され、その後三十八度線を境に北と南に分断されそれぞれ異った政治形体下で我が民族は生活をしているのである。

私は一九七五年九月十五日、始めて祖国韓国を訪問したのであるが、それ迄私は朝鮮人総聯合会明石支部の私の住んでいる地区の班の責任者として苦しい生活をしながら指示通り、民族の為だと思い働き、何ら恥じることなく誇りにさえ思い民族の念願である平和統一が出来るものだと信じていたのである。

昨年の夏、民団の役員をされている友人に朝総連系の同胞が韓国を訪問出来るとの説明を詳しく聞き、私は故郷に一度帰り、なつかしの兄弟親せきに、そして幼き頃の友達に逢うべく手続をしたのである。

勿論この事を妻や子供達にも話した。家族は皆揃って理解し、賛成してくれた。

故郷をはなれて異国に住む者で誰が己の祖国、故郷を忘れるものが居ようか、これを伝え聞いた総連明石支部の役員は私の韓国訪問は民団側の謀略であるから思いとゞまるようにと幾度も説明に見えたのであるが、私はこの機会に私の意志で決意したのであると云う事を力説したのであるが相手は理解してくれなかった。

金浦空港に降り立った時、万感こみ上げてくるのを禁ずる事が出来ない程強烈に私は祖国の土を踏み、分断されてはいるが、独立した祖国の清らかな空気にふれ、国際的威信を高め民族の繁栄を念願して止まなかった。

私は一九七六年中に妻を帯同して再び祖国を訪問すべく準備をしている。

妻もこの日が一日も早く来ることを心待ちにしている。

郷里では兄弟親せき、そして友人知人、全て私の久し振りの帰郷を心から歓迎してくれた。首都ソウルは私が想像していたよりもはるかに秩序もあり、都市観そのものも近代的で立派であった。

ソウルでは我々を歓迎する催しもあった、うれしかった。何故か泣けた。

私は短い訪郷の日程を終えて、うしろ髪を引かれる思いで日本に帰って来たのである。

私が祖国を訪問するについて色々とお骨折り下さった方々に心より感謝しております。

# 金浦空港で男泣き

崔　春　圭
（大阪市此花区西九条上通一丁目二七
土木業）

私はこの度、大韓民国居留民団の皆様の御協力のおかげで、二十九年ぶりに我が祖国である韓国に帰れる機会を得ることが出来た朝総連の一員である。出発前日は、どこからうわさされたのか、総連幹部五、六人が家にすわりこみ、私の帰国を阻止しようと説得し始め、夜の八時頃まで私のそばを離れず見張るのであった。

八時過ぎ、やっと、また来るからと言い残して帰るのを見て、私はすぐ、以前から知り合いの民団役員宅に荷物を持って行き、その晩はそちらで一晩泊めてもらい、出発の途につきました。金浦空港に到着した瞬間、涙と喜びと歓迎の渦の中で、ただ涙を流し男泣きに泣くばかりであった。

三泊四日の団体行動を通じて、祖国の驚くばかりの発展ぶりを目の前にして、幾度も朝総連の連中らが今まで宣伝していたことが、どれほど虚偽と欺瞞に満ちた宣伝であったかを知らされるに十分であった。それと共に我が祖国もどこの先進国にも負けないほど発展しており、なお一層の発展のために努力している祖国の人々のご苦労にあつい感謝をすると共に韓民族として少しも恥ずかしくないという自信が、全身を力づけてくれたのである。

さて、待望のふるさと――。順天にひと走りした。二十七年前離別したっきり、今日まで一度も会うことの出来なかった姉は、健在しており、私と会った瞬間、「夢ではないか」とわめきながら私の手をにぎり、うれし涙に泣

きくずれたのである。目をふきふきしてみると、甥達も立派に成長しており、また安定した職業に就いてそれぞれ豊かな生活をしているではないか。

私が今日まで日本で想像していた様な貧困な生活は、影も形も見つけることが出来なかった。「なぜもっと早くこの様に喜び迎えてくれる人々に会いに来なかったのか」後悔と自責の念で、夜も満足に眠ることが出来なかったのである。

故郷の山河は昔も今も変らず、青々と流々としている中で、この様にあたたかく迎え入れ、親族の人々に会わせてくれた韓国政府のこの人道的な配慮に対し、今私は何をしてこの恩返しをすればよいのだろうかと、考えに悩まされたのである。

夢のような十五日間はあっという間に過ぎ去り、涙の離別を再びしなくてはならなかったのである。そして再び帰国することを血肉達と確約しながら大阪へ帰って来たのである。在日韓国諸機関、民団の皆さんにこのようなおろかなる私のためご苦労下さった事、厚く御礼申し上げ、過去のミスはさっぱりぬぐい去ってくれることと思う。

## 希望に満ちた未来を確認

康應範
（大阪市生野区鶴橋一丁目五番四号
30歳　電気技師）

私は日本で生れ育ち、学校・職場・友人と、取り巻くもの全てといってよい程日本（人）に近い、典型的な二世である。

今回、在日同胞帰省団の一員として、一月二十四日大阪を出発し、ソウル、釜山、済州道経由後、二月一日戻って来ました。旧正月墓参団があると知ったのは、二週間前の従兄の葬儀の席上、知人より「君のハルモニムは元気でいるよ」との話からである。

達者でいると知った時の驚きと嬉しさ、それに一度会ってみたいとの気持ちが入り乱れ、居ても立ってもおれず、是非とも参加してみたいとの気持ちが募るばかりだったけれども、言葉、仕事、経済面……等の事を考えると、そして何よりもら致され帰って来れぬのでは？　との不安感で躊躇せざるを得なかった。が知人の熱心な勧めで参加するとは決めたものの、複雑な心境でもあった。

やがて出発日となり、不安ながら、飛行機が金浦空港に着き、初めて見る祖国、初めて踏みしめる祖国の大地の感触を味わった時は、体中がカーッと燃えるような熱さで、それまでの不安、寒さも一ぺんにふっ飛んでしまい、込み上げてくる感激を抑えようのない衝撃に追いやられた。

夜中、雪で遅れた私達一行を乗せたバスが宿舎に向って突っ走った際、北の挑発に備えてのきびしい体制下におかれた韓国の一端を見た思いであった。翌日より、十八台を連ねた帰省団一行のバスを見守る人々、沿道にて手を振る人々、バスの中、タクシー、トラック、自転車に乗る人々、また家の中より飛び出して来る人、店より、工場より出てくる人々、そして小さな子供達までが人なつっこく真剣に手を振る姿を見た時は、涙、涙……。止めどもなくこぼれ落ちる涙のみであった。

見ると、横のおじさん達も目頭をおさえている。そしてみんなも、手の痛いのを忘れてまで一生懸命手を振っている。到る処でこのような温かい人情に触れ、「これこそ母なる国なんだぞ」「これこそ同胞なんだぞ」との感激と幸福でもう胸がいっぱい。ペンを執る今ですら……。

離日まで抱いていた不安感がまるで嘘の如く、否や恥ずかしさを覚えたと言った方が良いだろう。そんな中をバスは行く。国立中央博物館、仏国寺、慶州博物館、自動車工場、製鉄所、製油工場、造船所等の見学……。五千年の歴史を有する崇高な文化、芸術遺産に、また産業面では、目覚しい建設と発展する姿を目の当りに接した時は、

感嘆と同時に希望に満ち溢れた未来が確約されたような気がした。
そして釜山解散後の念願の済州行き。聞くところによると、城山面㱐興里は済州島でもかなりの田舎というけれど、いよいよ家族に会えるのかと思うと胸がワクワク。初めてハルモニ、コモニム、ヒョンニム……の手を握りしめた時は、もう何も声にならない、ただ涙、涙……。「生きていた甲斐があった」と九十四歳になるハルモニは、何よりもの土産と喜び泣き叫ぶ。
興奮の一夜が明けてからは挨拶まわり、父兄を始め親族の墓参り、そして旧正月を終え、温かいもてなしを受けて帰日の途についたのである。
私は今回この感想記を書く事になったが、強要されたものでもなければ虚偽、歪曲、誇張の何ものでもない。ただ体験してきた事をありのままに述べてみただけである。
民族の悲願である祖国統一も、イデオロギー論争のみでは何一つ前進しない。その前にこのような人道上の問題を早急に解決せねばならない。
最後に温かく迎えて下さった母国の同胞達、韓国政府、並びに道民会を始めとする関係者の方々に深謝致しますと共に、今後も継続され、一人でも多くの同胞が参加される事を期す次第です。

## 骨身にしみる同胞の熱情

金振玉
（大阪市福島区海老江八—二—三三
63歳　塗装工）

歓迎、歓迎！　私がこの世に生れ、今日までたったの一度でもこのような熱い、そして真心こめた歓迎を受けた

ことがあったのだろうか？
生れて初めてのあの歓迎ぶりを今でも忘れることが出来ず、私の胸を熱くさせ涙ぐませるのである。朝総連の連中が、出発の前日まで私の帰国を阻止しようと、「本国の親戚がKＣＩＡからひどい拷問を受けなければならないようになるから」とか、または「行った本人は二度と日本へ戻ることが出来なくなる」等の虚偽にみちた宣伝をしながら、私の帰国を止させようと五人もの総連幹部が交替に私の家に座りこみ、私を監視したのである。
そこで、私も正直言ってその時の心境としては、兄弟に会いたい、先祖のお墓参りもしたい気持ちは山々ではあったが、総連の連中らの話を聞いていると、不安な気持ちが先走り、何回も取消そうかと思った事があった。けれども、今回私の帰国にいろいろとご苦労して下さった私と同郷の民団役員の方を信頼して、私は決断し帰国の途に至ったのである。
金浦空港に到着したとたん、今までの私の不安はいっぺんにふき飛んでしまったのである。行く所々のあの骨身にしみるような熱い歓迎ともてなしに、ただただ熱い涙と、今まで自分の歩んできた過去に対し、良心の呵責を受けるだけであった。
なにしろ四十六年ぶりの帰国である私にとって故郷の山々はなつかしさをふりまき、喜びに満ち溢れた感激の毎日であった。四十六年ぶりに会えた兄弟！　そして親戚の人々、また子供の頃のはなたれ友達、白日夢の中を私はうろついているのではないのか？　と何回も自分で自分の体をつねってみたけれども、夢ではなく正に現実であった。
夢にも忘れたことのない故郷の山河は、セマウル運動にて美しく整理され、農家の人々の生活は平和そのもの。日本での毎日毎日がばたばたした日々であったのに比べ、故郷の人々の生活はなんと毎日がのどかな、平和そのものの日々なのであろう！
私はなぜもっと早く帰国しなかったのか残念で残念で、泣きふしてしまったのである。今からでもおそくはないのだ。私のように総連の連中のことを信用し、行かずにいる人々は一人残らず自分の目で確かめるべきだと思うの

車イスに乗って帰省した張東秀さん（七八・広島市）

㊤一月二十四日十二時五分旧正月省墓団第一陣が金浦空港に到着した。

金浦空港で市民の歓迎をうける訪問団員

名札、ピケットを持って肉親を探す家族たち

赤十字社社員から歓迎をうける訪問団員

「兄さん！　どうして今まで帰って来なかったの？」
三十五年ぶりに再結合された兄は妹の肩に泣き崩れた。

千福徳さん（五六・北海道・左）は三十七年ぶりに訪問、お母さん金イベさんに抱きつき泣きくずれた。

白髪の老母は三十余年ぶりにやってきた息子と抱きあい泣き崩れる。

もう離れまい。
紅顔で離別した兄弟は白髪が
ぼちぼち出はじめていた。

㊨釜山で母親と数十年ぶりに再会し「もう離さない」と抱き合う親子

㊧数十年ぶりに祖国を訪れ、金浦空港でたまらずハンカチで目頭を押えるオモニ

江原道出身の同胞たちの待合場所で再会した姉弟。三十年ぶりの再会である。

ソウル市民歓迎会場の入口でも、肉親を捜すピケットが目立った。

ソウル市民歓迎大会で少女たちから花束を受け、思わずほほえむ婦人たち

崔貞美ちゃんの「少女の願い」にこの婦人は一時間もハンカチで目頭を押えっぱなしだった。

ソウル市民歓迎大会が開かれた中区奨忠洞国立劇場入口正面

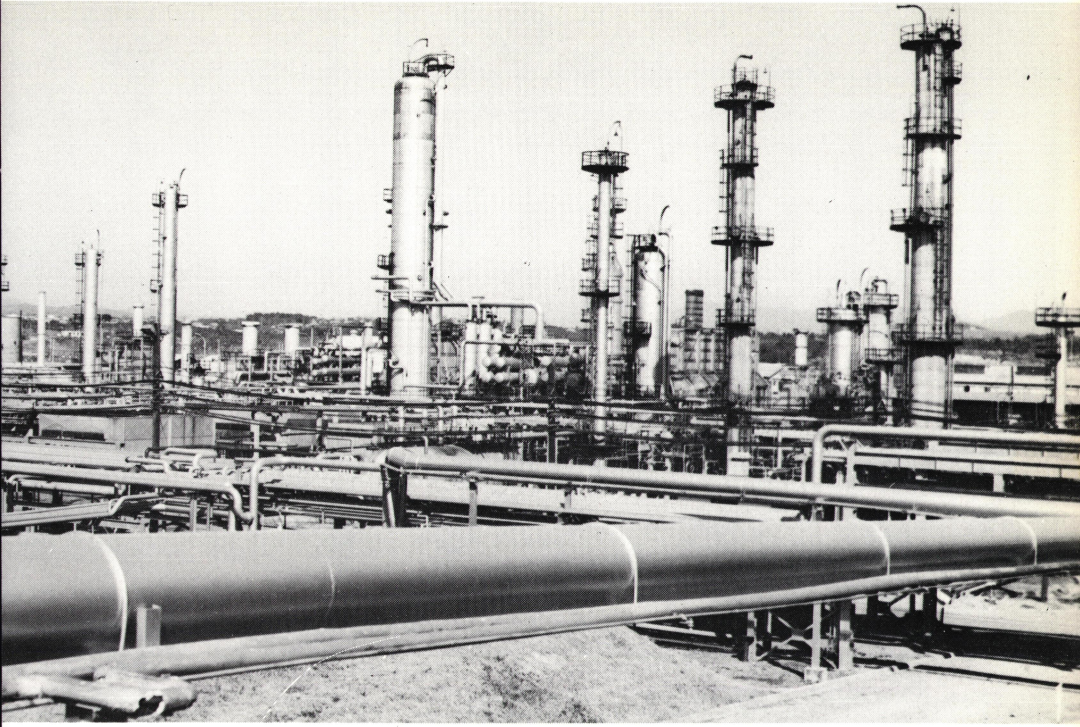
韓国福岡青年会議所会員たちが福岡出身同胞を
探すプラカードを掲げている。

帰省団の昼食時。テーブル狭しと並べられた
本場の韓国料理には、「おかわり」が殺到。

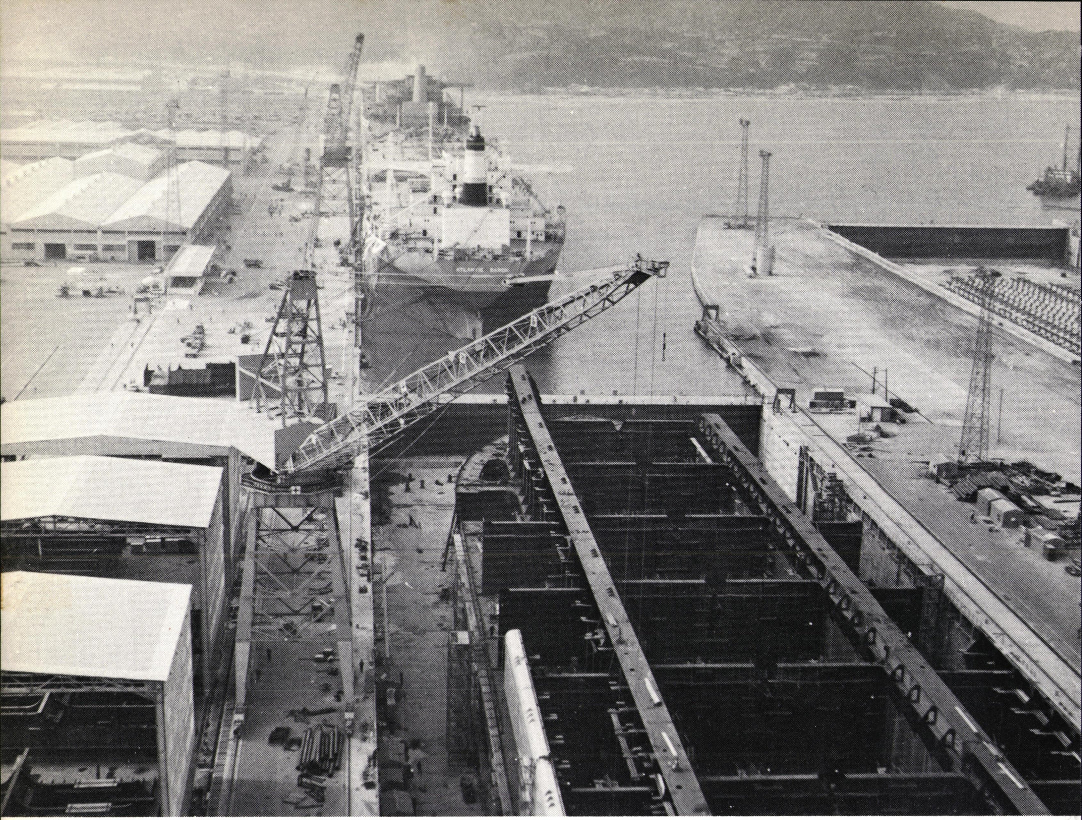
新羅文化のシンボルでもある慶州の仏国寺。
花郎道精神についても説明を聞く。

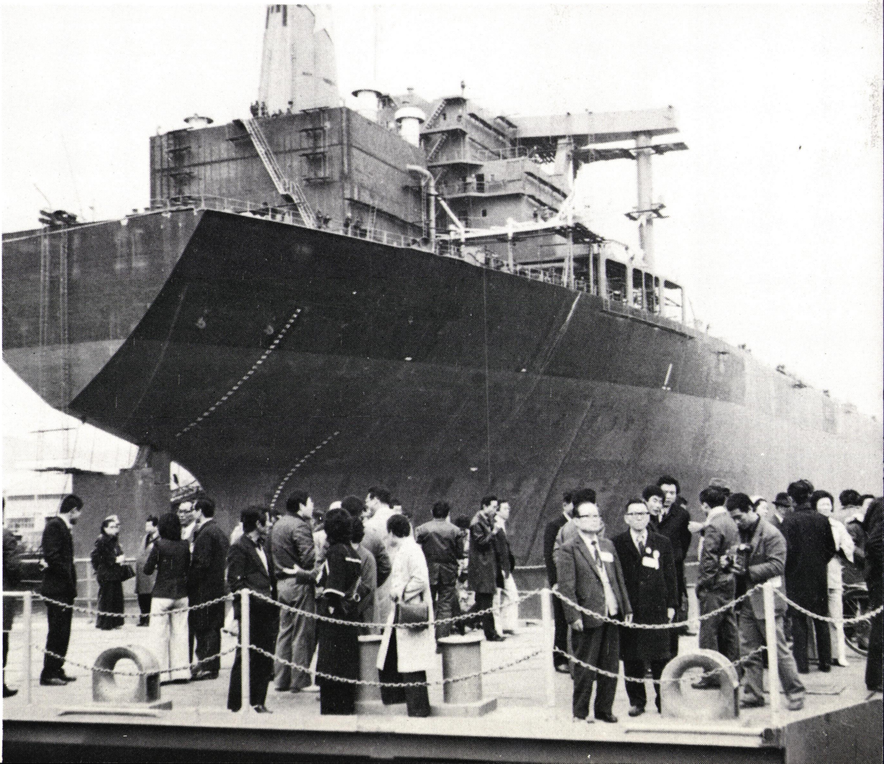
起亜産業の自動車工場を見学する訪問団員。
わが子を見るようにいちいち手で製品をさわってみた。

世界水準の技術と施設をほこる
蔚山石油コンビナート。



浦項綜合製鉄所の内部。
訪問団は鉄ができるまでの工程を熱心に見学し、
その規模が大きいのに驚嘆した。年産850万トンも間近。





蔚山の現代造船所を見学する帰省団一行。

韓国の輸出高は過去10年間に250倍増加　今年は65億ドルを目標。

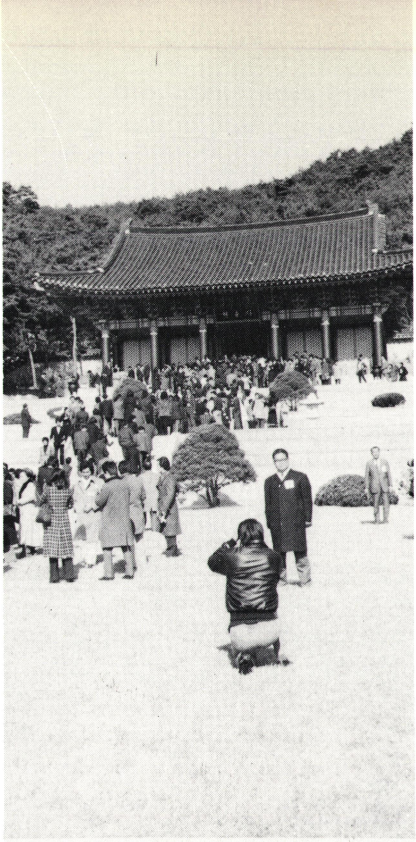
㊤造船立国を目ざして建設された現代造船所。世界各国から建造注文が殺到している。建造技術では世界の最高水準に達している。

オートメーション化された国産自動車生産工場の起亜産業を見学する訪問団。

現代造船所で造船能力に感嘆したのか、
従業員の説明を熱心に聞く婦人たち。

国軍将兵が眠る国立墓地を参拝する訪問団は
改めて戦争の悲惨さを思い起こした。

国立墓地を参拝。
護国英霊に焚香する訪問団員たち。



㊦韓国の歴史が一目でわかるソウルの民俗博物館を見学する帰省団。
㊨李舜臣将軍を祠る顕忠祠に参拝する訪問団。
㊧忠南温陽にある顕忠祠を参拝する訪問団。
ここには忠武公李舜臣が祠られている。

福岡県出身の郭鍾錫氏を探します。温陽の電話番号まで記した尋人看板の下を関連者たちが往来した

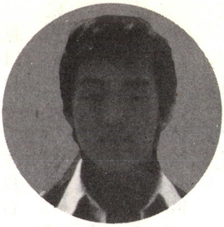
母国省墓団員たちは、帰日後、祖国の真の姿をありのまま伝えた

訪問団員は公式スケジュールを終えて
各々故郷に帰り、祖先の墓参りをした。
農村はセマウル運動で変貌していた。

である。一日も早く、我が祖国大韓民国のあたたかき胸の中に抱かれてくれることを心から祈り、またこのような私共の帰国のために全力を尽くし、ご苦労下さった韓国政府の関係諸官の皆様及び、大韓居留民団の皆様のご苦労に厚く御礼申し上げると共に、より一層韓国に発展と光栄があることを願望するのである。

# 祖国に帰って働きたい

権　弘
（東大阪市森河内本通二－一七
20歳・立命館大学在学）



十二月二十四日、その日の大阪空港は、ひどく雪が降っていた。私は母と弟と一緒に朝早く家を出た。タクシーを待つ間、とても心配だった。集合時間までに空港につけるのか？　また、雪で飛行機が飛べないのではないだろうか？　高速道路は凍結で通れない。しかしどうにか集合時間までには間に合った。しだらくの間、空港の待合室で待っていた。点呼は意外に遅く始まった。

祖国訪問団で韓国へ行くのは、私と弟の二人で、母は仕事等の関係で行けない。やがて飛行機が出るので、私達は混雑の中を飛行機に乗りこんだ。飛行機の中から、母が手を振る姿を私と弟はじっと見つめていた。飛行機は動き出した。いよいよ祖国へ行くのだ。そう思うと、私の心の中は、うれしくもあり、不安でもあった。ほんとうに帰ってこられるのか？　今帰ってこの手記を書きながら考えるとアホらしい事だが……。

数分後、韓国の山々が下方に見えてきた。この下が私の祖国か。広々とした、のどかな光景だった。いよいよ我

々を乗せた飛行機が、ソウルの金浦空港に到着した。外にはカメラを手にした記者風の人々が待ちかまえていた。私は戸惑いながら入国手続きをすませた。

出口には、多くの人々が押し寄せていた。ここで初めて、私は歓迎されているのだ、私は祖国の地にいるのだ！と感じた。涙を流す人々の中を歩いているうちに、私は自分が恥ずかしく情けなく思えた。

私は日本で生れ育った。日本の学校で日本の教育を受け、韓国人である誇りを失い、日本が故郷であるかのように思いこんでしまっていた。

それに私は、自分の国の言葉も地理もわからない。そのことが情なく、いらだちさえおぼえた。祖国の純情、寛大さにわびるほかはない。

それからの数日間、いろいろな所を見学してまわった。どこへ行っても歓迎され、手厚くもてなされ、涙ぐましく、あわただしい日々であった。

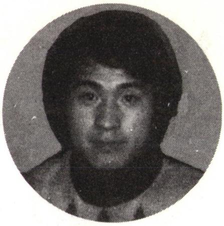
美しく広々とした山や川。川には氷が張りつめ、小学生くらいの子供達が、川でスケートをしている姿は、のどかで、祖国の優雅さを語っている。国のあらゆる所に、民族の歴史がある。それに触れ、その優秀さを、私は同国人として誇らしく思う。

また、進みゆく産業開発、それにたずさわる人々の勇々しい立派な姿、民族の栄光のために——。一人一人が信念を持ち、確信し、団結し、また自信にあふれた姿を見、私の心は痛くしめつけられる。私も祖国のために、民族のために何かをやらなくてはならない、と思う気持ちでいっぱいになった。

私はとても大きな考え違いをしていた。私の思っていた祖国は、貧しく、貧富の差がはっきりしている高度成長されていない国、文明、思想、団結力、行動力、すべてがおくれているとだけ考えていた。しかし今は違う。自分の目で見、耳で聞いた。思想も団結力も、すべてに優れていること、町は熱気にあふれ、若者達は向上心豊かであることを知って、とてもうれしく思い、私も祖国の人々と力を合わせ、祖国繁栄のために働きたい。そしていつの日か、言葉を覚え、地理を覚え、家族とともに、我が祖国へ帰る。

# 祖国に役立つ男になりたい

権正春
（東大阪市森河内本通二―一七
日本鉄道高等学校三年）



ぼくは、韓国人として一度韓国へ行ってみたいとは思っていたけれど、こんなに早く行けるとは思ってもみなかった。

言葉や歴史等もまだ勉強していないし、どうしようと思っていたけれど、韓国へ行っていろんな所を見て体験し、それを生かし、日本へ帰って勉強しようと思いつつ、去る一月二十四日大阪国際空港を出発し、約一時間後、一度は行ってみたいと思っていた韓国ソウルの金浦空港へ着いた。大阪では、韓国は寒いし貧しいと聞いていたけれど、あまり大阪とかわらないなあと思った。

韓国に来てびっくりしたのは、日本と違って道路にあまり信号がないということだ。でも車がスムーズに走れるので便利だなあと思った。

それに、水曜日と土曜日には、お米節約のため粉食を徹底的にするということ、そして日本と違って、食べる物が辛いということだ。でも、どっちかと言えば、韓国の料理の方が新鮮でおいしいなあと思った。それと、川でスケートができ、土地が広くて子供達がのびのびと育つ。

そんな環境がうらやましかった。それからいろいろな所を見物したが、寺院等は、日本と造りは似ているけれど、

柱一本一本に色がついているところとゴミがひとつも落ちていないところなどは韓国の方がきれいだし、また、すばらしいなあと思った。それと日本は、人口が多くてゴミゴミしているけれど、韓国は土地は広いし、どこへ行っても空気がおいしいし、住みやすそうだなあと思いつつ、韓国を去る日が近づいた。

そして、最後の宿泊の釜山のホテルについて、町の中を自分で歩いてみたけれど、にぎやかで、活気にあふれているなあと思い、日本も、にぎやかなことにかわりはないけれども、活気が韓国より欠けているなあと思った。それは、韓国では青年達みんなが目的を持ち、それを自分自身で自覚し、やりとげようとする気持ちでいっぱいなので、こんなに活気があるのだと思った。

でも、日本人は一般的に目的もなしにただ遊びまわってその日その日を過ごすだけで何も目的を持っていないから、にぎやかでも活気がない。そんなところに違いがあるので、韓国は発展が早いし、すばらしい国になると思いながら、つくづく韓国人に生まれてよかったなあと思いつつ、一月二十八日釜山空港を発った。

走馬看山ではあったが祖国の熱愛は濃かった。次に行く時には、韓国の役に立つ男となって行きたいなあと思った。

# 「漢江の奇蹟」に誇り

文　正博
（大阪市大淀区本庄西通四―一四
21歳・大阪経済大学在学）

私の父も母も朝鮮人でありながら、二人共母国を知りません。もちろん、私も知らなかったのです。このことは、私には大変恥ずかしかったのです。

だから、今度韓国が朝鮮籍の者を、母国に招いて下さったことを、大変感謝しています。
さて、母国についてですが、私は用事があったので、十二月二十五日から同三十一日までの、たった七日間の母国訪問でした。母国を見て最初に感じたことは、美しく寒い国だということです。金浦空港についた時やソウル市内でのそして大田での歓迎に、私は、目がしらが、あつくなるのをおぼえました。
初めて来た祖国なのに、なつかしさが、心の中にこみあげてきました。そして、国民の私達に対する態度、軽蔑ではなしに、いたわりの心をもって私達に接してくれたことには、感謝の気持ちでいっぱいです。
そして、済州島についた時、連絡をしていない、父方の親戚へ、韓国政府が連絡していて下さったこと。私の母方のおじさんにあえた時などは、韓国政府への感謝の念でいっぱいでした。
済州島は、私の友達がいった時のことを話してくれたこととは大変異なっていました。
第一に家の造りがりっぱでした。これは、韓国が富んできたことを示すいい材料であると思います。
第二に、国民の顔があかるかったことです。祖国は、まだまだの国ですが、すばらしい発展をとげ「漢江の奇蹟」とまでうたわれるようになったことは、日本にいる在日韓国人たちにとっては、大変鼻の高いことです。
今からは、なるべく早く、平和的に統一して、韓国・朝鮮といがみあうことのないようにしてほしいと思います。一部の国民の思想は異なりますが、なんといっても同じ民族なのですから。民団の方々の、御援助に感謝いたします。大変よい勉強をさせてもらってありがとう御座居ました。

■訪問団員の声■

# 帰日後に朝総連と絶縁

## ――和歌山県在住三人の場合――

### 裸足で飛んで来た家族

（其の一）　母親と幼女二人を故郷に残したまゝ日本で働いていたS甲伊氏は解放の年に一度くにへ帰ったが住みつけず再び日本の地へ渡って来た人、その時代のふるさとが目の前に浮んだに違いない。

釜山の水営空港には知人も来ていない。でも一人合点で家までは行けると思っていたらしく、一人ででも充分探せると自信ありげにそう言ったが私の目からすればどうも不安であった。何故なら、田舎とは言ってももう30年を越えたのだから……

とにかく他の用務もあって馬山まで行くついでに私も一緒に行くことにした。故郷は昌原という所、高速バスの中から窓辺に映る風景を眺めているうちに自信は次第に薄れて行ったらしい。

やがて車は昌原に着いた。一人でも行けますと言ってたSさん、どうも不安な顔である、やむなく私も降りた。駅前に出たあとしばらく四方を眺めていた。やっぱり昔とは違っていたのだ。この田舎町昌原も今ではそう簡単にすんなりとは行けない所だった。

あのむこう側あたりに橋があったんだが一独り言である、30年一昔前の橋は新しく架けられて久しく、其の中間地にも多くの建物や商店が立ち並んでいた。

やっと方向を探り川辺まで来た。そのむこうに住家がある。すぐそこの玄関口(大門)から一人の婦人が出て来た。私達を変な顔をしてちらっと見た。瞬間、何かを言った。「えっ！Sさんじゃありませんか？」言うが早いかそのまま振りむき、今先出て来た玄関口から中へ入った。さわがしいなぁと思ったらとたんに裸足のまゝで飛び出して来た弟と家族！何かを言わんや。

さてこの人、弟が3人に、おいたち、それからあの娘2人とむこ2人、涙の再会はこうして成ったが、さも自信有りげな実家探しもすでに30年が過ぎたらどこの山河でも3たびは変っている筈である。

幼女もすでに嫁に行き、次に訪問する時には新しいお母さん(日本の人)も必ず一緒にお伴して下さいねと父親の前で頼むのであった。

## 帰日後、総連県本部と切縁

**(其の二)** 第一次訪問団の一人であったB斗生さんは凡そ40年振りでふるさとを見た。そして叔母さんにも逢った。自身始めは少しの金でも叔母さんのお小遣いにとふところに入れて有ったのだが実際にはつまらぬことであった。自身の暮しがむしろつまらなく儚なく思えたからだ。

日本で聞いていたふるさとの生活とは打って変っている。すべてが新しい。田舎の貧村でもお米は供出され、お米は全然なく農民達はろくに食べられない等良くも欺されたものだ。

上京の日に叔母さんは小包一つをくれながらソウルへ行ったらあけて見なさいと言った。セマウル号と言う特急列車の中でそーっと開いて見た。何と8万円のお金とともに「日本へ帰る時おみやげでも買って行きな――」との親心こもった手紙もあったんだと嬉しそうに語っていた。

この一次墓参り団に加わって行ったB斗生さんは、老令にもの言わせ、自身の目で見た母国の発展相と親族の

生の暮しに感激し、でたらめで非良心的な総聯県本部の役員と委員長を前に、今迄のうそと卑しいやり方に抗議したあと、これで君等とはお別れじゃが、これからはそんなまねしないでくれときっぱり縁を切って来たんやと話しながら、でも今なお真実を信じないで居る、おしか阿呆もいるんでなぁ――と笑っていた。

## 朝鮮学校で学んだ知識は無用物

**(其の三)** 胸がつまってよ――と言う。この人は総聯学校小中高級を終えて更に東京の朝鮮大学を二年間も通った総聯通である。年二十二才で、名は金サンスさんである。

慶州の叔父さんが釜山まで迎えに来られた。お父さんが急な用で一緒に行かれなかったと言う。感想を聞くと、胸が一杯でさ――と前置きしたのち、行って見て始めて悟ったことを三つにまとめて言ってくれたのである。

(1) 韓民族がこんなに人情深い民族であったということを真に味わったこと。
(2) 日本の朝鮮学校で学んだ知識が実につまらない無用物であるということを悟ったこと。
(3) 新しいふるさとの良さと生き生きとした親族愛を骨身と心で知ったとの三つである。

そしてこの金さん、叔父の家が慶州付近の路辺にあるので、一行の車がその道路を走ると、思い出した様な速さで向い側の人に代ってもらい、身を乗り出して叔父の家やら家族の人に別れを惜しんだ。勿論叔父の家族も近所の人達も旗を振り手を振り沿道を賑やかにしたのは言うまでもない。

佛国寺からの帰りにも亦同じこと。もうなつかしい叔父の家とも当分さようならするからです。アヂォシ!オパヨ―涙ぐましい一幕の歓声と旗の波。同胞の血とは何であろう?ほんとに血は水より濃いんだという実感である。この一行にもう一人のおばあさんはG氏。三十五年振りの訪韓であった。馬山が故郷で今は埼玉県に住む。年老いしお母さんに抱かれて五日も六日も話したと言う。そんな長い物語。それでもなおお物足らなかったようだ。ソウルへ行く前日釜山の旅館に集ったのに、其の夜馬山へ電話をし、もう一度母に逢いたいと乞う。近くて遠かった母国への道!やもたてもたまらない其の心情をどうして抑えよう!其の晩もう一度母の胸もとへ帰ったのであ

る。

親と子、母への限りなきこいしさをどんと晴らして帰った日、目には新しい希望で湧くよう涙が光っていた。

■帰日歓迎会で■

# 病弱の母、六人兄弟を連れて

## ―京都府在住九人の感想―

京都市下京区　趙水済(男四十六才)

私は母と共に、旧正月母国墓参団の一人として、一時帰国することが出来たことを非常に嬉しく思っている。日本で朝総連の宣伝謀略にばかり耳を傾け、韓国は乞食があふれ、凡ての人が日常生活に苦しんでいる、山ははげ、電気や水道の施設も非常にまずしいとばかり聞いていた。

ところが、飛行機で釜山に着いたときにはその発展ぶりに目を見張る思いであった。アスファルト道路は、日本のそれよりも広く伸び、建物の波も日本のそれにまさるものがあった。

旧正月を前後して釜山の半島ホテルに泊っていたが、親戚の住所を知ることが出来なくてこまっていた。ところが、釜山放送局と釜山新聞社当局の報道を通じて、目的が達せられ郡庁職員の車に乗り田舎にいるオイ子にめでたく対面したことに対し、感慨無量に思っている。

蔚山の精油工場、浦項製鉄所、造船所、そして慶州の古跡観光を通じて母国のめざましい発展ぶりに驚き、いた

る所で本国同胞のあたたかい歓迎をうけて、全く感動した。

日本には未だ本国のありのままの姿を知らずして、まちがった認識をしている同胞がいることは、まことに残念だ。このような不幸な同胞たちに、私たちが母国の新面目をありのままに知らせてやり、彼らをして朝総連側の不当な妨害をしりぞけて、母国を訪問するよう勧めたい。このたびの帰国に際し、本国同胞の皆様、そして民団役員の方々に対し深く感謝する。

**京都府船井郡　李在坤（男四十一才）**

私は、今度の墓参団参加前までは、韓国はまずしくて乞食があふれ、人はうえて倒れていると非常にみじめなことばかり聞いていた。

ところが、釜山で飛行機のタラップを降り、いたるところで祖国の発展ぶりをまのあたりにしたときには、ただ驚きの目を見張るばかりであった。特に浦項製鉄所、同現代造船所等は、日本のそれと全くかわりないことにびっくりして、感激で胸が一杯であった。

これからは、朝総連側の無謀な宣伝にだまされることなく、居留民団と協力して、母国の発展のため微力ながら奉仕したいと思う。

**京都市南区　白点順（女三十八才）**

今年で六十七才になる母は、平素の念願として本国にある父の墓を一度でもお参りしたいと、つねづね言っていた。ところで、今度の旧正月母国墓参団参加を希望すると、やはり朝総連側の妨害作戦に直面せざるを得なかった。けれども母は、私の念願である夫の墓まいりをしたいというのに何が悪いのか、とつっぱり、民団側のすすめに従って、一時帰国の手続きをすすめた。

ところが、母は体が急に悪くなった、医師の診断も体がもたないから旅行をやめるようすすめた。

けれども、母は死んでも是非行きたいとのことで、私たち七人兄弟が母の母国旅行について相談をすることになった。

その結果、母を行かせてやることにし、兄弟の中だれかが看病のためつきそいをすることにした。ところが、兄弟はわれもわれもということになり、結局二番目の病弱の兄だけをのこして、六人が母の看病のため、母と一緒に母国を訪問することになった。

〃母が、父の墓を自由にお参りしてくるというのになぜ悪いのか〃どうか、一日も早く母、親、兄弟が母国を自由にゆききするようお願いしてやまない。

## 京都市南区　崔相洛(男五十五才)

私は、徴用で日本に来て以来、三十七年になる。今度はじめて旧正月墓参団に加わり、母国を訪問することが出来た。

私は、八人兄弟で本国に七人住んでいる。その兄弟は皆健在であり、それぞれ仕事に希望をもって働いていた。その兄弟の姿を見たとき、私は嬉しさのあまり涙があふれ、一言も言葉をかわすことが出来なかったぐらいだ。

朝総連は、私の故国を直接間接的に中傷した。そして、妻が少しの旅費を準備してくれただけでだれ一人、私の墓参団参加を支援してくれたものも賛成してくれる者もなかった。だから私は一人で家を出て、空港行きのバスに乗り、又帰った時も出迎えてくれる人は一人もいなかった。

ところが、本国での兄弟との対面は〃血は水よりもこい〃という言葉通り、深い親近感にうたれたものがあり、あまりのうれしさに呆然とするばかりであった。

兄たちは、私に〃お前はもっと本国のことを勉強しなさい〃といってくれた。帰って来て、私は義理の兄弟に〃私は本国へ行ってから死なずに帰って来たのだ。君も一回行って見ろ〃とすすめた。

本当に、今度の墓参団に参加出来たことをこころから深く感謝している。

## 京都府綾部市　金東律（男五十九才）

私は一九一七年生れである。日本で小学校を卒業し、全然母国語を知らなかった。一九四〇年頃から母国語を学びはじめ、一九四一年には戦争の関係でグアム島へ行くことが出来た。

一九四五年八月、日本の敗戦直後、私はよろこんで帰国し釜山に滞在しながら弟とおい、そして親戚等をさがしましたがとうとう目的を果せず、その当時のお金三万円をくめんして密航で再び日本へ帰って来た。その後ずうっと母国に対して何一つつくすことなく、かえって誤解をさえいただいていた。

このたび民団側のすすめで旧正月母国墓参団に加わり、この目で正しい祖国を見るべく母国訪問の途についたのであった。私はこの目で祖国の都市、農村、漁村と問わず、実にめざましい発展をとげつつある様子をはっきりと見て来た。そして、いたる所血のつながった情の厚いあたたかい歓迎に接して来た。ただただ感謝するばかりである。

## 京都市上京区　権寧三（男七十才）

私は、四十二年目に夢にも忘れることの出来なかった兄弟、親戚にあうことが出来、涙で一杯であった。

かえりみれば、昨日まで朝総連の謀略と宣伝にだまされ、私の青春を無駄にしたことに対し、非常な憤りを感じ残念に思っている。

今度の母国訪問を決意した際も、朝総連側から〝君が韓国へ行ったら決して戻ってこれない、だから行ってはいけない〟といわれた。私は若しも帰国して再び日本へ戻って来ることが出来ない場合は、私はそこで親戚と共に暮すという覚悟であった。

なつかしかった肉親とあって、夜をあかしながら過去を語り合い、中でも私が今まで兄弟親戚に対し、何一つつくせなかったことをお佗びしたりもした。私は自由にどこへでも兄弟親戚を訪ねることが出来、都市も農村も昔の

面影を一変していることをまのあたりにした。朝総連のいうことは全くウソである。今度の母国訪問は非常に素晴しいものであった。皆様にこころから感謝している。

**京都市南区　崔逑用(男五十六才)**

本国政府当局並びに、民団側の皆様のおかげ様で四十年ぶりに母国を訪問したことに対して、まことに有難たく思う。

朝総連側からは、この人道的墓参団事業に対し〝これは韓国政府の謀略行為だ〟と非難しながら、あらゆるデマをとばして妨害している。自分の生れた故郷に帰り、父母、兄弟、親戚と会うというのがなぜ悪いのかと私はこれらの連中に対して、いく度も反問した。

私は今まで、朝総連側の虚偽宣伝にだまされ本国に対し、父母兄弟に対して何もすることが出来なかった。それでも本国政府と国民、そして親戚は私を親切にそしてあたたかく迎えてくれた。そして、過去の私のあやまちの凡てを許してくれた。私は自由自在にあちこちの親戚を訪問することも出来た。韓国には自由がないと言っている人はウソつきである。

私たちの祖国は分断されている。その中で韓国はめざましい発展をとげつつ、私たちを迎えてくれた。

これから、私たちは微力ではあるが、母国のよりよい発展のため力をつくさなければならないと思う。特にわれわれの二世、三世を本国へどしどし送り、立派な祖国であることにめざめさせ、韓国人としての誇りをもって、この社会で立派に生きてゆくよう努めなければならないと思う。

**京都市東山区　金正雄(男四十一才)**

私は、元朝総連組織の分会長の役をつとめたこともある。この度の旧正月母国墓参団の一人として、私も参加することが出来たことを心から感謝する。

私は残念ながら本国で、親戚にあえることが出来なかったが、本国の政府当局と国民の皆様があたたかい歓迎をしてくれまして、血のかよう同胞の愛情に対し自然と頭がさがりました。

これから先、私は大韓民国の国民の一人として本国に籍をのせ、本国のあたたかい人道的配慮に対し、微力ながらむくいるべく頑張りたいと思う。

**京都府城陽市　膚吉夫（男）**

私は現在京都府の城陽市に住んでいる。今度の墓参団参加には、京都の民団を通ぜずに、東京で手続きをすまし、羽田空港から母国訪問の途についた。それには理由がある。勿論朝総連側の妨害を意識してのことである。今日も、この盛大な歓迎会に途中で参加するようになったのも又何かの理由があったからである。しかし、私は意を決して、今ここで皆様と共に民団側のあたたかい歓迎会に進んでのぞんだのです。

ほんとうに、旧正月母国墓参団参加は私にとって素晴しいことであった。深く皆様に感謝する。

■寄　稿■

# 信じ合う心が大事

高　行　洙

（民団大阪府生野東支部団長 訪問団引率者）

今日まで、自分の母国、自分の故郷へ、行きたくても行かれなかった朝総連傘下にいる不幸な人達を、人道的に

救助するために、朴正熙大統領閣下からのあたたかい配慮のもとで、この運動を展開するにあたり、深々なる敬意を表わしながら、未熟な者ではあるが、大韓民国のために献身する決心をあらたに固めた。

この運動を通じて人間として生涯、社会のために貢献することが、どれほどむずかしい事であり、又どれほどうれしい事であるかという実感を深くしたのである。自分が民団の支団長だという事責を背負って立ちあがり、その日から、人間と人間の間で、この事業を展開してきて思うことは、お互いに信じ合うということが、いかに簡単でかつむずかしい事であるかという点であった。

朝総連の人達が個人(金日成)崇拝の精神でもって、善良な人達の頭をマヒさせているこの事実は、彼等が悪宣伝に眩惑されている人達を「故郷に帰って、先祖父母の墓を参拝し、父母や兄弟そして親族達とも会ってみなさい」という事を、朝連系同胞に訴えてみたところ、初めは「ウソだから、兄の言葉にだまされるな！その言葉にだまされたら、再び日本に戻って来られない。と朝総連の妨害は実にあほらしくて話にならなかった。

二度と話しをしない様にと言われた時は朝総連虚為宣伝がどれ程根深くはびこんでいるかを、再認識せざるを得なかった。

しかしこの事業が個人の問題でないという趣旨を理解してくれる人がきっといると信じて、力のある限り努力しているうち、一人二人が集まるようになり、結局数十名が理解してくれ遂には祖国に向って出発するようになった時には、もうこれ以上うれしい事はなかった。

ソウルに向った機内では、参加者全員の顔色が瞬間に変わってくるのを認識せざるを得なかった。一時間余で金浦空港へ到着した。空港広場に数千名といっても過言ではない歓迎者の人垣を見て、おどろくうちに、みんながお互いに手を引き、肩を抱いて泣きわめきであった。

その中でも、ある人はもうすでに死んだものと思っていた人が、目の前に現われたので、これが本当に亡霊かとうたがい、お互いに顔を見合わせながらとめどもなく泣いているのを見て、一生、生まれてこれほど善い事をしたという実感で、うれし涙が流れたのである。

初めての夜はソウルで過し、浦項製鉄所、蔚山製油所、現代造船所、起亜産業と石油噴出所を見学し、韓国が中進国から先進国に脱皮することもごく先の事であろうと思う。世界のどの国の人々が見ても、実に輝く国家であり、希望に満ちた国であると思うのである。大田から慶州への途中でも、市民達が太極旗をもって歓迎してくれた時は感慨無量であった。

釜山へと向っている時、参加者のほとんどの人が「高団長、本当に感謝します。数日前までは(訪韓前までは)自分達の全くの誤解でした。」といいながら「これからは、一方だけの話しを聞かず、自分のこの目で実際に見たり聞いたりします」といいながら、過去三十年という長い歳月を虚送したのをくやしがっていた。「日本に戻って朝総連幹部をそのまま放置してはおけない。お前らも一度祖国を訪問して、自分達の目で祖国を見て、今迄の様な悪宣伝をするな」と言ってやるんだと言う人達も多かったのだ。その時、私は本当にそのやりがいがあったと感じたのである。

二十七日、最終日程の午後七時半頃、空港に到着してみると、ソウルよりおとらない多くの歓迎の人波であった。張道知事が歓迎の辞を私達に述べて下さった時、言葉では言いあらわせない感激をうけたのである。

故郷訪問。私への連絡場所を玉林旅館に設けて、十日間宿泊したが、参加者全員が「大変ありがとうございました」といいながら、自分達の父母、兄弟、そして親族達をつれて、毎日私をたえまなく訪問してくれたのである。

市内は三十数年前には、想像も出来なかったのが、現在は町中にタクシーが往来し、電気・水道が完備され「日本に住むより、自分の故郷に住むことがもっと安らかに住めます」といいながら「自分の町に来て下さい」と言う人さえいました。

観光地として自慢出来る道路計画も順調に進んでおり、セマウル運動によって、一生懸命に村の整備をしていた『愛国精神』がとび散る若い青少年達の一人一人に活気が現われていいました。夢にも思っていなかった私達の村の発展ぶりにおどろかざるを得なかったし、新生活をする楽しい顔色をみたのである。

数十年前、日本に渡る前を回想して見る時、これが本当に私の故郷だろうかと別天地に来たような感じであった。

それだけではなく遠くから見上げる漢拏山、瑞雲ある漢拏山の四季を通じて、たえず変化している雲山。幼い頃、登って見たかったところも、今は車に乗れば山の近くまで行ける。これ以上、有難い事があるだろうか。

人間はどこまでも自分の足で歩き、自分の汗を流しながら自分の目で見て、自分で経験を積む必要があるという事を、もう一度認識し、参加者達の交わす会話を聞いた時、そしてこの人達の顔を見た時、これが偽りのない真の心情であると私自身、引率責任者として重い荷をおろしたように、身が軽く半ばホットした状態であった。

■寄稿■

# 証明された思想の超越

金鍾雄

（民団大阪府大正支部事務部長
訪問団引率者）

一九七六年一月二十四日、大阪空港は帰省客で混雑していた。

今まで他国住まいに疲れたへとへとの顔と顔とが、数時間後、目の前に現われるだろうと思われる情景などを浮べつつ、半ばいらいらしているような、うれしいような雰囲気に慕っている場景が、あちこちにたむろし、出国手続を待ちかまえている各々の表情には、すでに祖国訪問のいろいろな溢れんばかりの想いが、胸を騒がしているようであった。

六十才余りの老婦人の帰省団員のそばで、若い娘が旅券と外国人登録証を紛失しない様、何度も念をおしていたが、本人はそんなことよりも、心はすでに祖国の空へ飛んでいたのだった。

今、弟が現在五十才を過ぎているというのに、彼が十才、まだ遊び盛りの時に夫について日本に渡って以来、四十年という歳月を過したおばあさんの顔には、長いしわの一つ一つが、過し日の苦難を物語っていた。

出国時間だ。飛行機の窓の外に見える小さな家、低い山、丁度おもちゃなどが散らばっているような風景、地上の動きが一目で見える様だ。帰郷に満ち溢れている人々の心は雲の上を飛び越え、在日同胞帰省団歓迎のプラカードが呼んでいる釜山飛行場に到着した。

文字通り、昔のままの故郷にもどって来た。どれだけ恋しく思った故郷の山河だっただろうか、〝ようこそ、いらっしゃい〟とひびきわたる声、溢れる人情味。やはり私の故郷だ。

私の民族の高貴さと、一言で表情を感じ取ることが出来た。出迎えに来てくれた弟や甥達、「アイゴ！姉様、どうした事なの」と一言、感激と感涙にまぶたをうるませ、声をつまらせて次の言葉が言えなかった。

思えば、長い歳月の間、恋いしさとつらさに耐えながら、夢の中で見た親や兄弟だったのだろう。立派に暮せるその時には、互いに捜し会おうと決心し、あらゆる苦難や悲しみに耐え、立派に暮すための努力もしたが、しかし無情なこの世の中は、肉親さえも引裂いておきながら、良いとか悪いとか、ああだとかこうだとか言い争っているうちに、人生の半分が過ぎ去り、行きたい、見たい私の故郷、私の兄弟を知っていながらそっぽを向いてしまったこの現実。怒りと感激が一度にどっと流れて来るのだった。

今般の帰省団一行は、自分達の決断と実行にこそあらゆる理念と制度、そして思想を超越する事ができ得る無限の力があるのを、再び認識した。

そしてそれこそ人間が持たなければならない徳性であり、萬民に符合する道理であるということも知った。

きれいに整備された道路を、私を乗せた車は、浦項に向って走った。窓の外に見える風景に再び驚いてしまった。私個人は帰省する機会が時々あるが、近年数年間訪韓する毎に変っていく風景には、おどろかざるを得なかった。

昔から私達の生活風　に、わらぶき屋根が住宅そのものであった。低く小さいわらぶき屋根が、今では数十キロメートルを走っても、見つける事は不可能だ。革命的発展なのだ。それから、チゲ(荷物をのせて背負う木製の具)

をかついでたきぎを運ぶ人の昔からの姿も見あたらない。

時期的に今頃だったら必ず見なければならない姿が見えないのは、生活制度がどれほど変化したかを証明するものであるに違いない。

いつからこの様に変ったのだろうか。慶州の道は広く、清潔で、溢れる人波は、華やかなファッション、ショウでも見ている様だ。時代の躍進に燃えて歩いている若者達の心意気は興味深く、希望に満ちた喜びが溢れているかのように感じとられた。

慶州を過ぎ、名も知らない平野を通り過ぎる時の、市内に向って流れる川辺に広がる光景は、躍動を想起させてくれた。曲りくねったみみずのような田畑は、力強いブルドーザで数萬坪の土をさっと押しのけてしまった。

数十キロメートルぐらいと思われる堤防は、洪水があるたびに形を変え、水の流れは、その時毎に進路を変えたし、それに伴って農地も変形していたのであるが、然し今は、田んぼは田んぼ、川は川で明確になっているのだ。即ち治山治水そのものである。

このようなすばらしい山河を造成した違大な力が一目でわかった。すでに整備された田畑は碁盤の目のように真すぐで、田畑のあぜ道は、チゲの代わりにトラクターが行ききしている。

そうだ！あらゆるものは、やれば出来るのだ。私達同胞社会にも、今迄の考えを改めるところを改め、又開化しなければならない事も数多くある。躍進する祖国に貢献し、古き事にこだわらず、もつれている心情を、もっとわかりやすく説明し、長い歳月の間放置され、胸の中に積み重ねられたわだかまりと、浮き世の流れにしたがって、考えの流れが違った心などを、これからは正しい祖国観念で判断しなければならない良い機会だと云える。

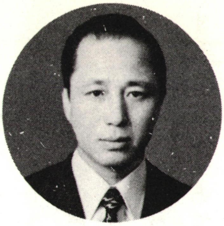
祖国山河の整理と同じく、きれいさっぱり整理された気分で、溢れる太陽をまともに受け、明日の繁栄を期待しながら、希望に満ちた日々を送ることこそが何よりも生きがいのある暮しではないだろうかと思う。知人もない、苦難な他国暮のしに終わりをつげ、知人、兄弟達の間に見守られて、残りの人生を美しく、有意義に生きて見たい、と自分自身に言い聞かせている私を発見した。

■レポート■

# 私が送った望郷の友人

金　載　賛

（大阪韓国学校ＰＴＡ実行委員）



始めに、ことわっておきたいのは、朝総連組織の一員であり、私の友人である彼は、私の紹介と推せんで朝鮮籍のままで母国を訪問したということです。

したがって、私自身の訪問記ではないのですが、彼が母国から戻って来るや早速、私に会いたいとの電話があり彼の家まで出向きました。すばらしい感想を聞かせてもらったのですが、彼が現在まだ朝総連組織の一員であり、その他計り知れない人間関係の複雑さ等を考える時、私が敢えて私の名前でここに紹介させていただいたのです。彼が訪韓感想として言うには……。

私が母国を訪問したのは三十余年ぶりです。飛行機の上から母国を眺めた時、複雑な涙がとめどもなく頬をつたわり、私の故郷は南なのに何の理由もなく、どうして金日成の思想を盲目的に信奉していたのか、思わずこぶしで自分の頭をたたきつけながら、心はすでに母国へと急いだ。

税関では、私のパスポートを見て「貴方の故郷は変わりましたよ」とおよそ役人らしくない想像もしていなかった優しい目で私に語りかけるのでした。私もつい「そうですか、有難うございます」と返事し、数年前までは想像もしていなかった私の言動でした。

多くの歓迎陣の間を通り抜けて、バスに乗りこみました。すばらしく延びた高速道路、本当にすばらしい。日本の高速道路と比べても、優るとも劣らないではありませんか。蔚山工業団地、雄々しい姿を一望した時「うむ」とうならざるを得なかった。

数日後、故郷を訪問した。大体このあたりだと思ったが「わからない、ぜんぜんわからないではないか」。昔の陰や形も存在していない私の故郷。まるで別世界へ来た様な錯覚をし、目の前がくらくなりそうだった。

しかし、目を大きく見開いてよくよく見直しました。すばらしく発展していた故郷。成長しながら私を待っていてくれた故郷に対して、私は本当にはずかしかった。「私ですよ」「解らないね」という会話がつづくこと三十分。ようやく新たに自己紹介して解ってもらえた。にが笑いしながら、皆んなと再会を喜びあった。もう二度とこんな屈辱をもたない様、私自身しっかりしなくてはと心に誓った。

朝総連の皆さん、貴方がたの故郷は南ですよ、北とは何の縁もゆかりもないのですよ。もう一度自分の故郷を見て、再確認しようではありませんか。

彼が語っているうちに、だんだんと話しに熱が入り、私がだじだじする程でした。彼が母国へ出発する時、私は大阪空港まで見送りに行きましたが、そこでは予期せぬハプニングがありました。

どうしても母国の訪問をさせないもくろみでしょう。「朝銀」に勤務している彼の娘と同僚達そして他のグループが隊列を組み、自分の父が母国訪問するのを中止させようとし、又それを応援する為に、彼女等が実力で阻止しようとするのでした。もちろんこんな事は予想をぜんぜんしていなかったわけではなかったのですが、場所が場所だけに、まして国際空港ではありませんか！外国の人達はどう思うでしょう？。

あまりの非常識さにあきれるよりは、憤りを感じたのでしょうか、大阪韓国学校の李校長先生が、彼女等に「静かに話しあおうではありませんか、場所を変えて」と冷静さと校長らしい威厳で以て話しかけたのですが、どうしても彼女等の耳には入りません。それどころか相手かまわず「ここは、貴方のロビーなの？」。私は側でそれを聞いて唖然としました。遂に校長先生も勘忍袋の緒が切れたのでしょう。怒りをこめた大声を張りあげられたので、その

場もどうやらおさまりました。
こうでもしないと、この愚かな朝総連の配下共には利きめがありません。私は心の中で喝采を送りました。お陰様で無事、飛行機も離陸出来ました。
それにしても不愉快な出来事でした。私も一言叫びたいのです。朝総連の皆さん、自分自身で韓国を訪問しなさい。そうすれば、空港でのあんな見にくい一場面も起らないでしょう。何故、自分の生まれた故郷を訪問するという自然のあたりまえの人間欲望を妨害するのでしょうか。それも金日成の命令の一つなのでしょうか。
母国訪問という人道主義に、朝総連の人達も早く悪夢から覚めて、参加される事を切望してやまない気持で一杯です。

■詩■

# 血肉の情

禹博一
（民団布施支部事務部長 訪問団引率者）

慕わしい　父と母は　この地に　眠る。
この地が　我が祖国で　あろうに……
やるせない　千愁の日　三十星霜、

三千槿域　この地で　我が　先祖　父母
兄弟が　生を　営んだ。
この祖国を　どうして　忘れられようか……

望郷の　想いに泣く　朝総連の　同胞たち、
この　たび　祖国、故郷の　山河を　訪れたり、
誰が　これを　止められようか……
血肉の　情は　天理の　心ぞ、

我は　この　感激を　見た。
そして　感泣した。
三十余年ぶりに　年老いた　親の胸に　抱かれ
顔見知らぬ　兄弟とも　巡り会い、
まぶたの　姉妹と　抱き合って
むせび泣く　人、人、人……
この　感激、わが　祖国の　地で　なくして
どこに　あり得ようか……
祖国の　もとに　母の胸に　はやく　いだかれよ、
土の　ひとにぎり、一本の　草木も
我が　もので　あり、
我が　先祖の　眠る　この地は
今まで　我を　待って　いた。
つらく　長かった　過ぎし　三十余年、

夢にも　忘れられなかった
我が　慕いし　故郷の　山河だった。
くやし涙と　不信の　傷跡が
異国の　冷風に　あって　あまりにも　つらかった。
あまりにも　孤独だった。

冷たい　風に　傷負いし　我が　宿命に
暖かい　母国の　薫風が　吹いてくる。
あゝ、祖国、母の　ふところに　抱かれし
先祖の　霊前に　膝まづく、
望郷の　千里の　道のり、　今こそ　扉を　開く、
離散家族が　睦まじく
情を　分かち合う　ところに、
清く　美しき　祖国が　あるのみ……
涙で　むせぶ　墓参り、罪の　許しを　乞う、
天よ、許したまえ、我が　ふらちを、
我は　人倫の　大本を　ここで　取り戻した。
血肉の　恨を　満した。
今日も　我が　五千万同胞は

祖国は　我等を　あたたかく　迎えてくれた。
自由の　良心は　天地を　ゆるがした。
人心を　動かした。
民族総和の　呼び掛けに　勇気を　得て
宿願の　祖国訪問の　途に　ついた。
朝総連系　同胞達は　今　故国の　山河に　膝まずき
自分の　愚かさを　悔む。
頬に　果しなく　流れる　涙……
許して　ください！　許してください！
母国の　土の　匂いに　長年の　郷愁が　喜びと　変り
祖国の　発展を　目の前に　ただ　驚き、誇りを覚える
父よ　母よ　お許し　ください！
長生きして　ください！
祖国よ　有難う！
我は　今や　幸せを　覚えました！
我は　今や　我自身を　取り戻しました！

人間の　魂の　結合を　願い、
人間愛を　叫んでいる、
赤十字精神を　蘇らせ、
博愛精神に　基づき
一筋の　先祖の　血を　受け継いだ　民族に
大逆の　罪を　犯さぬよう、
この　感激を　蘇らせ
民族の　魂で　あらゆる　障壁を
ぶち壊そうでは　ないか。
そして　新しい　歴史の　曙光を
祖国の　地に　照らし
清い　目で　祖国の　彊士を　愛し合おうではないか

あまりにも　長かった　歳月なので、
あまりにも　慕しかった　父母兄弟なので、
あまりにも　待ちに待った　同胞たちなので、

# 第三部　望郷の念

＝ルポ・美談・随想＝

# 祖国、肉親の原点

## ＝すべてがドラマの連続＝

張　哲　男
（東和新聞取材部長　訪問団随行員）

「祖国、肉親」とは、朝総連同胞にとってなんなのか。異郷の地・日本に住む南韓出身の彼らには重く、また、せつない。

議論百出だった「祖国、肉親」とは――各人のおかれた環境等によって多少のニュアンスの相異もあろうが、ほとんど〝死語〟となっていたのは確かで、玄海灘に向かって「祖国、肉親とは」と、大きく叫んでみたところで、どんな答えが返ってくるというのだろう。在日同胞にとって韓国と日本を結ぶ接点は、玄海灘でもなければ、帰巣本能でもない。そこに「祖国があり、肉親がいる」という事実ではなかろうか。

朝総連系在日同胞の帰省によるすさまじい肉親の情に接して、改めて「祖国、肉親」とは、を問いたくなった。帰省団によってえぐり出された「祖国」とは、祖国に帰ることであり、「肉親」とは、肉親に会うことだと、その原点を見出したのである。故郷で肉親達が再会する光景をみて涙するよりも、「祖国に帰り、肉親に会う」ことの方が、はるかに人間的であり、意義が大きいと思う。

帰省団が金浦空港に到着してからは、すべてがドラマの連続だった。父の遺骨、母の遺影を胸に抱き、数十年ぶりに祖国の土を踏んだ息子や娘達。父や母と再会、嗚咽のオモニやアボジ。そして兄弟同士が抱きつき号泣する姿に、もらい泣きする周囲の人達等、それはすべてがドラマだ。心の中ではみんな「なぜもっと早く祖国に来なかったのか」とぶちまけたくなるような光景ばかりだった。

このすさまじい肉親の情に、みんな胸を熱くした。感受性の強い韓民族が数十年ぶりに再会する光景は、ものすごい迫力だ。そして市民の温かい歓迎にみんなが泣き、喜び、踊り、笑いこけた。

帰省団の興奮の高まりは、国立劇場で開かれたソウル市民の歓迎大会にすべてが集約されている。汝矣島国民学校五年の崔貞美ちゃんが愛くるしい声ながらも語気を強め、「ハラボジ、ハルモニ！　こんな素晴しい祖国になぜ早く来なかったのですか。なぜ早く親や兄弟達に会いに来なかったのですか。わたしは、会いたくても会えない、顔も知らない祖父と祖母が、三八度線の向こうにいるのです。いつ会えることができるのでしょうか——」

この悲痛な叫びに、大人達は、そして北韓はどう応えようというのだろうか。三千余人の帰省団は涙で応えた。今回の帰省団の出発に際し、朝総連はありとあらゆる妨害を重ねてきている。軟禁、脅迫、ら致等数え切れないほどの悪質ぶりだ。帰省団の中に「自分の祖国、肉親に会いに行くのになぜ妨害するのか」と問う人がいたが、朝総連からの返答は、まだ私の耳の中には入ってきていない。

いまの朝総連にとって「祖国」とは金日成であり、「肉親」とは、これまた金日成である。こんな馬鹿げた〝お題目〟はもう通用しなくなってきている。帰省団によってもち帰られた祖国の真実の姿が、かれらに「在日同胞六十万の祖国は韓国であり、肉親は自分達の親や兄弟達である」とはっきり断言している。

今回の帰省団の中で特に目立ったのは、二、三世の若い青年達が多く含まれていたことだ。前回の秋夕帰省団の時と比べ、二倍ないし三倍にも激増しており、もちろん朝総連学校からの編入生も多く含まれていた。

大半が朝総連の妨害をふり切ってきただけに、祖国に対する感触も一世達とはちがい、新鮮で鋭いものをもっている。高層ビルが林立する表通りから買い物客でごった返す裏通りまで、くまなくみて来た彼らには、祖国が着実に発展する息吹きに自信と誇りをもったにちがいない。

そんな青年達も気になるのは、やはり祖国の同世代のことだ。まず驚いたのは、青年達のすごい気迫だろう。「日本に追いつけ、追い越せ」の国民一丸となっての頑張リズムには、気負いさえ感じられた。それが帰日歓迎会で、一世達に比べてより積極的に感想をのべ「これからの私達の義務は、偽されている朝総連同胞に祖国の真実の

姿を伝えることだ」とはっきり断言している。

当初、祖国の肉親達は、日本にいる自分達の血縁がなぜ会いに来ないのか、不思議でたまらなかった。日本からわずか二時間足らずの近距離にありながら「なんと親不幸な人達だ」と憤怒もした。そして「親や兄弟よりも、金日成の方が大切なのか」と叫んだりもした。そんな〝親不幸〟な彼らが数十年ぶりに肉親と再会した時の言葉が、「悪かった。済まなかった」と、一言叫んだだけであとは言葉にならなかった。いままで朝総連に偽まされていた後悔と怒りが爆発したのだ。あらゆる中傷と妨害をふり切って、祖国を訪れた帰省団の決断と勇気を讃えたい。

いま、京都で開かれている「韓国美術五千年展」の開会式で、韓日両国主催者のあいさつの中に「韓半島に咲きほこったけんらんたる文化は、あらゆる面で、日本文化の形成に非常に大きな影響を与えた。――必ずや両国民の理解と友好を一層強めるのに寄与し、今後の両国民の交流を発展させるかけ橋になる――」と語っていたが、他民族同士が文化交流で友好を図ろうとしている時、同じ韓民族が交流を深められないことはあるまい。

日本人が三百五十点におよぶ超国宝級の逸品を鑑賞することで、日本文化の原点を知ることができるように、朝総連同胞も、祖国を訪れ自分の目で確かめてこそ、真の姿を知ることができる。韓国政府のさし向けた人道的な英断と同胞愛による〝かけ橋〟を渡るのは、朝総連同胞自身なのである。彼らに残された課題はただ一つ「決断」のみである。

「祖国と肉親」を数十年間にわたって背負い続けて来た朝総連同胞は、いま〝アリラン峠〟を越えつつある。

# 幼い子供らの歓迎に胸詰まる

成　美　子

（統一日報記者 訪問団随行員）

李鍾範氏が目頭を押さえて言葉を切ると、同室の尹鏞洙氏（五六）が間髪を入れずに自分のことを語り始めた。

彼は三十八年ぶりの祖国であること、千葉で廃品回収業を営んでいたこと、〝朝鮮籍〟である彼がこの三十八年間祖国に来れなかったのは、政治的なものであるというよりは、むしろ生活に追われて来れなかったのであることをとつとつと語り、「日本人と結婚したので、娘が戸籍上は私生児になっている。娘が高校に入学する時〝本当のおとうさんがいるのに何故いないことになっているのか〟と問いつめられて、ショックだったし、せつなかった」

「私が韓国へ行くと言うと、娘達が〝おとうさん韓国へ行ったら帰って来ない。行かせない方がいい〟と、おかあさんに言い、みんなで私を行かせないように説得した。私は、〝冗談を言うな。墓参りをしたらすぐ帰って来る〟と言ってでかけて来た。

来てみたら、この寒空に、ちっちゃな子供からおばあちゃんまで、〝よく来ましたね。苦労なさったでしょう〟と涙を流して手を振って迎えてくれる。それを見て胸がいっぱいになりましたね」と言う。

尹鏞洙氏は、昨日の顕忠祠での老夫婦について「若い青春を無にして、自分の夫を待ちこがれ、あんなにともに白髪になってから再会したんですよ。立派ではありませんか。祖国の御婦人の姿には、胸がはりさける思いでした。えらいもんですね」とぽろぽろと自分も涙を流し、顔をびしょびしょにした。それを聞いて李鍾範氏が口をはさむ。「立派なのは立派かもしれないが、これは悲劇なんですよ。私達は二度とこんなことを起こしてはならないのですよ」

実の姉の名前だけはわかっているが、釜山で会えるかどうかわからないという尹氏は、李氏に向かって「家族に会えた人はいいですね。余裕がありますね」と話しかけた。「私は、あなたの幸せの半分でも、おすそわけしてもらいたいですよ。釜山で家族に会えなかったらと思うと、私はもうしょぼんとしてしまいますよ」

李鍾範氏がきっぱりした声で、尹鏞洙氏をはげましている。

「大丈夫ですよ。この韓国の民衆の私達に対する歓迎ぶりを見たでしょう。国全体が、一致団結して私達の家族をさがしてくれているではないですか。会えますよ。きっと会えますよ」

深夜、二人の部屋を退いた私は、今度はロビーで、慶州市古跡観光の案内課にいるという金栄涛氏につかまった。

私達の墓参団一行は、連日テレビでかなりくわして報道されていたが、金氏は私から生の声を聞きたがり「墓参団の人々に、この慶州で不満なことはありませんか」「みなさん仏国寺等ご覧になってどんな感想を述べていらっしゃいましたか」と、たずねてきた。

彼はうれしそうな顔で、「昨晩は、大阪から来た墓参団がこのホテルでお泊りになったんですが、大阪の民団の役員さんが、去年の秋夕墓参団で参加した東淀川の崔さんが、私によろしくと言っていたと伝えてくれましてね。崔さんはちょうど本籍がこの慶州で、家族のゆくえがわからなかったんですね。それで、私が一緒に区役所をまわってさがしたんですが、彼の弟さんは、韓国の占いでお兄さんが大東亜戦争（第二次世界大戦）で死んだと出たので、もう何年間もチェサ（祭事）をやっていたと大層おどろきましたわ。崔さんは日本で土建をやっていて、気持ちがはっきりした人なので、日本に着いて、空港に迎えに来た朝鮮学校に通っている息子二人に、戸籍謄本をばっと見せて、〝ほらみろ、俺は韓国に行って死なないで帰って来たぞ。これが証拠だ〟といい、その日から二人の息子さんは朝鮮学校をやめさせたそうですわ」

彼は語り終わると、しばらく考え込んで付け加えた。

「もし、これを記事にするなら崔さんの名前を出さないでください。日本では、韓国から戻った総連系の人々が総連の人になぐられたりする事件は起こりませんでしたか。崔さんの各前が出て、いやがらせでもされたら気の毒ですから……」

# 「涙の海」の再会

李　義　元

（共同新聞韓国支社取材部長）

第三次朝総連系在日同胞達の大挙帰省は、母国国民の大きな関心事であった。彼らは朝総連の束縛から逃れ、勇

敢に母国の故郷行きを決めた人達であった。

三千余人の一人一人が三十年、五十年ぶりに血脈を探し求めるなど彼らが皆主人公であった。彼らが最初に金浦空港に降り立ち、肉親の人達と再会した時の場面というものは、長い歳月にわたり離れ離れとなり、その血肉が通う感激の瞬間であり、痛哭と身じろぎであった。

その間、彼らが入国して出国するまでの美談のいくつかを紹介しよう。

○……今回の省墓団は、昨年の秋夕省墓団の時よりも、その人数は遙かに多かった。従って金浦空港でも開港以来、このように感激的で身じろぎした喜びの場面は初めてのことだという。

帰省団が到着した時、空港待合室は、数千人の親族らの歓迎で埋まり、帰省団員の氏名が書かれたプラカードや横幕を掲げる人、血肉を叫ぶ声、再会の感激で泣き崩れる人、号泣する姿等、とにかく金浦空港の幾日間というものは、涙の海と化した。取材のため空港に出た記者、カメラマンさえもらい泣きして写真を撮れない有様であった。

金浦空港待合室に飛び込んでくる模様は様々だったが、母国訪問後、日本に帰って報復（朝総連からの）されないかという心配している人も見受けられる。

だけども半世紀ぶりに訪れ、申し訳けないという表情も見受けられた。ほとんどの人達が余りにも昔の出来事として受けとめ、特にとてつもなく変った祖国の姿に驚いていた。

○…彼らが行く先々で、挙国的な歓迎を受けたことから深い感銘に浸っていたようだ。

南山トンネルを通過し、ソウル市内の雄壮な姿を見ては皆が感嘆していた。

浦項、蔚山、釜山、慶州、牙山顕忠祠、国立墓地等の地方視察に出かけた時は、完全に警戒心を解き、心配顔が薄れたほどだった。秋風嶺高速道路塔で暫く休憩した時、六十歳代の一同胞が高速道路欄干の鉄柵を見て、これは真鍮ではないかと大変驚ろき、「大東亜戦争」の時真鍮はほとんど寄せ集めてしまった、と記憶を振り返っていた。

浦項では石油が出るという話に皆が喜びの声を上げ、盛んな拍手を送っていた。浦項総合製鉄訪問の時、熔鉱炉から出る伸べ棒が、それぞれの作業段階を経て、ハード・コイルになって出てくる時、皆が珍しそうに拍手をした。

名古屋で家内工業ながら鋳物工場をしているという趙某氏（四八）は、現代造船所を見学し、このように大きな工場は初めて見る、と感嘆しながら、朝総連系信用組合の貸出金を返済すれば、韓国に引き揚げ、このような工場で仕事をしてみたいと話していた。

○…ソウル市内の国立劇場で開かれた歓迎式の時、韓服（ハンボク）姿で参加した婦人のうち、金烔動さん（八二）は、五十九年ぶりに帰国したが、ソウルに住む嫁、趙貞順さん（五二）が縫ってくれた服だと言い、生涯にわたってこのように嬉しいことはないと話していた。歓迎式が終わったあとも、楽しそうにニコニコしながら出てきた。

また一つ、金浦空港でのことだが、国内記者をはじめ、外信記者百余人が大挙して詰めかけた。去る一月二十四日、第一陣で訪れた趙諸守氏（七六）は、兵庫県に住んでいるというお爺さん。趙さんは、記者団の質問に魂が現われるほどであったという。

このような騒ぎに、返って記者達を狼狽させる出来事があった。それは三十七年ぶりに再婚した安再文さん（六七）が日本人妻を伴い帰国してみると、空港に韓国の本妻、崔京禮さん（六一）が出迎えていたからである。

崔さんは、夫の実家が慶南三千浦にあり、女中をしながら半生を送ってきた。今回の帰省団に夫が帰ってくるという便りを夫の実家から聞き駆けつけたという。従って記者達は、安さんに奥さんが出迎えに来られたと伝えると、安さんは極めて困難な立場に陥り、身を置く場所がなかった。それは日本人妻とともに同伴して来たからだった。

このため空港に出ていた記者達は取材よりも、当人の家庭破綻を何よりも心配して、安さんと夫人（日本人妻）の通関手続きを済ませたあと、日本人妻だけを別に連れて行き、先ず車に乗せた。そして安さんの本妻を会わせるよう便宜を図ったのである。

すると、その時初めて安さんは大きな溜め息をつきながら本妻と会ったが、その時の対話は涙だけの現場であった。この時の対話を紹介すれば、安さんの開口一番は「おばあさん（お前という意）が死んだものと思い、日本の嫁をもらった」と述べ、夫人は地べたに座り込み、涙を流しながら言うには「よかった。よかった……」と連発し

た。

実に涙なしでは見られない場面だった。この時傍にいる記者達も、それぞれが手ぬぐいを取り出し涙をぬぐっていた。

○…とにかく三千余人の全て一人一人が胸に秘めた数々の事情をもっていた。「百聞之不如一見」という例えのとおり、朝総連系在日同胞達のこうした実感に満ちたことが、他にもあり得るだろうか。余りにも感動的な場面が多く、「血脈の自分の故郷、自分の肉親の親族を、また自分が行きたい所に行き、会えるという人道的な意味が、全てにおいて圧倒するという貴重な教訓を改めて学んだように思う。

□インタビュー□

# 真の同族愛を発揮

## ―24人の訪韓者を世話―

金　徳　九

（大阪市生野区在住
山下商会代表取締役）

一月二十三日の大阪からの第一陣が出発する伊丹空港のロビーは送る人、送られる人で大混雑ぶりをみせていた。搭乗手続きをたすける人も参加者も思惑は様々のようである。ロビー一面に一抹の緊張感がぬぐえず、祖国分断の悲しみをあらたに吟味させられているような雰囲気である。

肉親のいる故郷へ帰る事は、めずらしくも不思議でも何でもない、当然な事であるはずなのに、最大の勇断を必要たらしめたことに対するいかりを感じているのかも知れない。

特に中傷、謀略、デッチ上げを専業とし、嘘を並べ、韓国ひぼうが得意な朝総連にとっては、それこそ組織崩壊の危機感と焦燥感に襲われた悲惨な朝であっただろう。その日の空港ロビーにも忠誠を誓わせられた朝総連の張込監視者の目は、番犬のように光っていた。

「行けばただでは帰れない。殺される」という具合におどしをかけ、組織防衛のための極限状態の中で思いついた悪質極まる妨害戦術と文句は、もうその煽動的効力を失ったばかりか、その意味が裏目にとられている。

人道的な肉親の再会をはばむ行為は正気の沙汰とは言えない。川の流れを逆流させようとする試みに似た狂気じみた行動である。去年の旧盆の墓参団が祖国を自分達の目で確かめて、口コミで伝わるその発展ぶりと肉親の情、同胞愛のすべてが、朝総連で聞かされた逆であったから、かえって同胞達のいかりも極端であったにちがいない。最初は母国訪問の勧誘に快よく応じてくれなかった朝総連系同胞達が雪崩をうって参加し、旧正母国訪問団のような大掛かりな訪問団が実現したのもその証拠である。

また、朝総連のこれとは反対に、今度の訪問団にまつわる逸話や美談が数ある中で真の同胞愛に燃え、自己を犠牲にしてまで同胞達の里帰りを世話した非凡な篤志家の、かげの苦労話もある。何と対照的なものであろう。

大阪市生野区の実業家、金徳九氏を訪ね、その世話した内容を聞くと…。

小じんまりした社長室は、大学の研究室を思わせるような部屋で、書斎のように机に本が積み上げられている。小がらでがっしりした体格にしっかり締っている口もと、一見厳格そうな心の強そうな人である。二十四人の参加者を世話した功労を夫人にゆずる金徳九氏の口ぶりは、意外に大変謙遜で人なつこくやさしい一面ものぞかせてくれた。

いそがしい会社の仕事を何日もほうりっぱなしにして、説得に歩き廻った時の苦労話を聞きながら、金徳九氏が立派な実業家として成功し、人一培国思いの人でありながら、民団や同胞社会にもあまり知られていない理由のようなものが、おのずからわかって来るような気がした。

十八歳で日本に渡り、終戦後、国へ戻るつもりで東京から大阪へ移って来たのが、大阪に住みつくようになった

きっかけだそうだ。今は三男一女にめぐまれ、事業の方も大部うまく行っているとのことである。

話題が朝総連の話に移ると金社長は、「祖国解放後の在日同胞社会に結成された在日朝鮮人連盟が、日本共産党と手を結んだ一握りの共産主義者によって占拠され、共産主義思想が扶植された。そのために自由民主主義を標榜する民族系が分離して出来たのが民団である」と在日民族社会の歴史的変せんを明確に理解しやすく説明してくれた。

「数十年の日帝下に、在日同胞社会は政治的にも社会的にも虚脱状態にあった。解放の隋性から非常に高揚した同胞大衆の愛国的行動を冒険主義的な北韓金日成に従属させ、結果的には今日の朝総連の中央集権的組織をかため、同胞達を欺瞞してまで金日成につくす民族的反逆行為をくりかえしている集団に化した」と学者まさりの整然たる理論を展開してみせた。

旧盆墓参団の映画を民団支部で見せてもらって、六十を過ぎた在日同胞が里に帰り、九十の母親にすがり泣きくずれ、父親の墓前に伏して四十年の不孝を涙でざんげする光景は目をうるませずには居られなかったという。

他の同胞達にもこの光景を見せてやりたい。そして、親兄弟がいなくなる前に会わせてやりたい。さっそく、ビデオのデッキを民団に寄贈する運動に率先した。

金社長夫婦は、家族ぐるみで母国訪問の勧誘に歩き廻った。まず近い親せきや知りあい等の周辺から輪を広げて行くことにした。

「人間だれでもが望郷の念は持っています。親兄弟がこいしくない人がおりますか。朝総連組織の幹部や活動家達にも故郷はあるはずです。心の中で行きたい気持ちは一緒で、思いきって勇気を出せるようにすべきです。

民団はひるまず説得にあたり、また信頼を得られるように心がけなければなりません。民団を通して祖国を透視しようとする傾向がありますから……」民団支部の顧問役についている組織人としての戒めであり、金社長の信条でもあるようだ。「民団史三十年の中で今最も意義ある事業を始めました」という愉快そうな話しぶりは、聞く人の気持ちをも愉快にさせてくれた。

金徳九氏夫妻が世話した人達の中には、朝総連の女盟や組織の活動家も沢山いる。今度の母国訪問から帰って四人もの子弟をすばやく朝総連学校から大阪韓国学校に転校させた車さんの話も聞かせてくれた。もはや金徳九氏は、車さんの唯一の相談役になったような気がした。

北韓からの勲章を受賞し、朝総連の忠誠分子である、ある有名人は、説得には応じてくれたが、彼の動向をあやしまれて、どこかに監禁されたため、実現する事は出来なかった例もある。また、長男は朝総連活動家で同じく幹部クラスのインテリ母親を説得したが、家族の意見が揃わず、徒労に帰してしまった。義弟を通して二十代の若い連中も六名が参加した。金社長夫妻は、自分達を信頼して応じてくれた事がうれしくて、また不安がる参加者のために、夫人を案内役としてつき添わせることにした。そして一月二十三日、大阪を一緒に出発したのである。

参加者達の旅費や生活資金等も立て替え、戻ってから余裕が出来たら返すようにと使った金額だけでも五百万円にのぼる。いくら事業家だとはいえ、五百万円の負担は決して軽いものではない。しかし、金はこういうところに使えば最も値うちがあるものだと、人生哲学をまじえ、自身の価値観をのぞかせた。

大部前の事、親せきの結婚式によばれたが、新婦の家が朝総連で、家族写真をとるように誘われた時、一緒にとれなかった事を思い出し、祖国の発展がもたらした人道的民族交流のすばらしさをたたえながら、北が一方的に破棄した七・四共同声明の精神を実行に移し、南北の異質性をせばめ、民族の歴史的正統性をひきつげる祖国を取り戻さなければ……」と語る金徳九氏の識見は政治家的な適確性がある。

家庭の事情で金社長夫人は四日に大阪へ戻らなければならなかった。しかし、その人達だけを残して帰る事になるので、不便をさせてはなるまいと、今度は金社長が案内役を交代するため、四日の一番機で大阪を立った。一日もぬけられない会社の仕事は、その間オールストップである。五日のソウル市民歓迎会で行事に参加した金社長は、感動にうたれて泣く同胞達を見て自分ももらい泣きし、ハンカチをベトベトにぬらしたとの話だ。

参加者達が日本に無事戻って間もないのに、もはや、六、七人の参加者がお礼に来てくれたという。この人達のためにお互いに助け合う運動を広げたいと強調する。

根本的な問題は民生運動である。融資・税金・戸籍の整理・子弟の教育問題等を具体的にあげながら、心の中で、今度肉親と祖国を取り戻してやったことを、ひそかに喜んでいるように見えた。

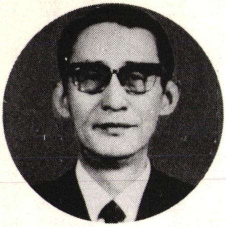
口先だけで愛国や愛族を叫ぶ人は多い。しかし、金徳九氏夫妻のように、日本という外国社会に住む同胞達を心から愛した人が何人いるだろうか？　私財を投じ、家族をあげて祖国を知らない同胞のために、また三、四十年間も会えなかった肉親に会わせてやるために、昼夜をかまわず走り廻ってあげた成果は、我が民族だれしも念願してやまない民族再結合と、祖国の平和統一を早めるための偉大なる道なのである。

■随想■

# 涙とともに到来した故郷の春

## ＝ソウル歓迎大会に参席して＝

安　寿　吉（作家）



『過去はしのび難く、暗く、だまされて悲しいものであった。そのすべてを感激の涙で漢江に流してしまい、今日は祖国の胸に抱かれて歓び、来日のために一つにかたまり、子孫たちへ自尊心と栄光を植えつけよう……』

金玉吉梨大総長の歓迎辞そのままに、ソウル市民歓迎大会場である国立劇場ロビーにいる三千余人の在日同胞帰省者団員の顔には、喜びと自尊心と活気と明るさが花咲いていた。

これはその間、帰郷者たちが懐しい父母、兄弟たちと親知たちと会い、先祖の省墓を行

い、観光で祖国の発展相を目撃し、皮膚で感じとったところから生じたものと思われる。交わす話も明朗だったし、動く動作もきびきびしていた。わずか一週間という短い時間だが、祖国と血すじがいかに貴重で、温かく、心安らぐものであるかを語ってくれて余りある。

大会は市民千余名も参席した満員の中で幕が上がったが『故郷を捜すことを阻むことはできない。思想を超越し、ただ民族愛で皆さまを歓迎する』という具市長の開会辞の後を韓服を身にまとったKBS児童合唱団の子供たちが舞台の上で、御礼と座席をまわりながら省墓団員に花たばを渡した。この花たば贈呈で感激の序章がくりひろげられた。

金総長のやさしい言葉での心にしみる歓迎辞は団員たちの胸の中にしみわたったようである。共鳴の拍手が何回も聞こえた。ハンカチで涙をおさえる人も多かった。

しかし、感激がもっとも高潮したのは、人気歌手たちの過ぎ去った昔の歌と、舞踊団の「コットカッシ」の踊りと扇の舞いにいたったときであった。そして、汝矣島国民学校五年生崔貞美嬢の言葉は満場を感激の海にかえた。

『……私はハラボジ（祖父）とハルモニ（祖母）に会いたい。しかし会うことができません。私のハラボジとハルモニは元山にいらっしゃいます。今日、この席にいらっしゃったハラボジとハルモニのように、私のハラボジとハルモニはくることができません。会いたくても会えないのです。今度日本に住んでいたハラボジとハルモニのいらっしゃる光景をテレビで見て、父と母と一緒に泣きました。私のハラボジとハルモニに急に会いたくなって泣いたのです。』

私も流れる涙をどうすることもできなかった。

『……ここにいらっしゃる皆さま、日本に帰られたら、私のハラボジとハルモニもこられるようにしてください』この「少女の願い」は一千万離散家族の願いであり、何の飾りもない純粋な表現である。それがあらためて感ぜられ、場内は粛然としてしまった。

その後をついだのは、踊りと昔の歌である。

少女たちの可愛い「コットカッシ」と扇の舞いを見る同胞たちの表情はなごやかな中にも、涙にぬれていた。こんなにも可愛らしいものがあったのか。この子供たちも私たちと同じ血筋だ。いつの間にか、このように思って流れている涙であったのであろう。

李美子、羅勲児、河春花、呉基沢、朴京姫などが歌った「荒城の旧跡」「木浦の涙」「旅人の悲しみ」「他郷ぐらし」「涙にぬれた豆満江」等々、三十年前に流行した歌に年老いた団員はもちろん、若い団員たちもハンカチを目にあてていた。

女団員の一人が舞台に上がって歌った「三八線……」は事変と国土両断の悲劇を再びよみがえらせた。

歌の順序の最後である「ソウル慕情」「ソウル讃歌」の明朗かつ力強いメロディーには、団員たちは、手をたたいて拍手を合わせた。慰労する歌手も、それを受けた団員たちも一つの心、一つの感情、一つの呼吸となっていることを物語っていた。

司会者がマイクで座席の何人かをインタビューするのが、そのまま場内に放送された。

今度故郷に帰ってきた私たちは、多くの同胞たちが温かく迎えてくださったことに感激した。祖国がこんなにも発展していたのは予想外だった。日本に帰れば、見たままを隠すことなく、いまだに疑惑をもっている人々を覚醒させ、かれらをして祖国を訪問するように勧める。私たちも何回もきます。弟たちも必ず帰郷させ、祖国の真の姿をじかに見せたい……。

『……故郷にきて胸痛く思うことがある。それは私の帰郷省墓を羨ましがる同胞がいたためである。家族が「北」にいる人たちである』

答辞で今度の全国的な歓迎に感謝して、祖国の発展に驚嘆を禁じえないと述べた帰省団代表権重錫氏は、南北離散家族の再会問題に言及した。これは先の少女の願いとともに、在日同胞とくに朝総連系同胞の祖国訪問の画期的な意義について、いま一度深く考えさせるものとなった。

舞台に老人の一家族、六、七人が登場した。老人の男の方は帰省団員、ハルモニと息子、娘、よめは韓国にいた。

家族たちは父親が亡くなったとばかり思って、祭礼までしてきたのに、今度劇的に再会したというのである。
話題になるようなものは、その間の報道を通じてだいたい知らされていたが、実際舞台に登場した話題の主人公である家族を直接見ると、本当に感激的であった。
日本の植民地、歪な解放、六・二五事変と過ぎ去ったわが民族の受難の悲劇的な有様を、その家族を通して象徴的に見るようであった。
人間文化財金素姫の歌と国立舞踊団の楽しい農楽で大会は幕を閉じた。が、その前の贈物の贈呈で、国民学校児童が省墓団の児童に教科書を渡したのは、意味のあることだった。

# 第四部　内外の反響

＝有力紙の社説、論調＝

# 真実を見て、伝えて欲しい

朝鮮日報 （1月25日付社説）

（一）

旧正省墓のため朝総連系在日同胞帰省団六百余名が、二十四日ＫＡＬ便で入国、母国の土を踏んだ。

昨年秋夕省墓を契機に、三十年または四十～五十年ぶりに、初めて母国を訪問した在日朝総連系同胞一千六百余名に続く今度の帰省訪問は、旧正の月末まで継続され、二千五百余名が故郷と家族を尋ねて来る。

我々は、彼らを温かく歓迎する。朝総連系在日同胞の母国訪問は、昨年七月、南北共同声明三周年を迎え、在日居留民団が展開した訴えを発端とする。民団は、在日同胞だけでも和解の幅を広げようと、何の条件もない朝総連系同胞達の母国訪問便宜を積極的に斡旋してでたものである。

勿論、政府の支援なしには達成が困難な事業として、昨年まで一千六百余名の朝総連系同胞達が母国を住来する成果を収め、朴大統領もしばしばこの事業の意義を強調し、継続推進を誓ったことがあって、朝総連同胞達の母国訪問事業は、南北赤十字会談の努力と共に挙族的な離散家族再相逢事業の一翼へと逐次熟してきているのである。

顧みれば、数奇であった過去の祖国運命を想起させることになるが、朝総連系同胞達は、三十年またはそれ以上の歳月を、祖国と家族親せき達と断絶されたまま、最も近いながらも最も遠い異域となってしまった日本の地で、望郷の辛苦をなだめつつ生きてきた。在日同胞の九十五％以上が南韓に故郷をおいている。南韓出身であるということを思う時、人間の悲劇でこれ以上のものはあり得なかった。

解放と共に北の地にその包みが広げられた共産主義というイデオロギーが祖国を二つに分断し、海外同胞社会まで両断する悲劇をもたらした種となったのである。しかし、人間の本能であり、水（イデオロギー）よりも濃い

血である血肉の情や同胞相互の懐しさが、そうした人工の障壁をいつまでも眺めるだけということはあり得ないことである。

（二）

散り散りばらばらの家族親せきを探してやるため、南北赤十字会談が提議され、内心はどうであれ、イデオロギーの包みだけに追われていた人間達をして、その名分と意義の前に対話の広場に立たざるを得ないようにし、同胞間、民族間で戦わずに平和的に祖国を統一しようとの約束を民族の前に行った、七・四南北共同声明を出したがどうしようもない、同胞としての、民族としての血の胎動を、我々はその間に経験した。

朝総連系同胞達の母国訪問の実践は、実にこうした民族の血の胎動から始まった、余りにも貴重な所産である。しかし、それが容易に成された結実ではないことを我々はまた知っている。朝総連は、あらゆる妨害工作を組織的に展開した。「行けば帰れない」という虚偽宣伝と脅迫をこととしてきた。それにもかかわらず、遂に母国訪問が実現するや、彼らは一層酷毒な方法をとった。傘下組織要員を総動員して、甚だしくは幼い学生や子女にさえも監視役割を任せ、朝総連頭目韓徳銖が直接に陣頭に出て「故郷訪問という、同胞を分裂と売国へ引っ張っていく挙動である」と威脅して廻ったし、生計に直結される経済攻勢を取って、朝総連信用組合に借金のある同胞が母国へ行ってくれば、理由を問わず借金を回収し、一切の取引きからしめ出してしまうという非人間的な手法まで動員した。

今度の旧正母国訪問阻止のためには、朝総連はあらゆる事業を一切中止し、必死的な妨害工作にでている。それでも、流れる水を塞ぐ道理はない。血肉の情は、それほど濃いものであったし、また内外同胞達がそのような反民族的行為を座視するようなこともなかった。在日民団同胞達が朝総連同胞達の母国訪問を経済的に支援するためキャンペーンをくり広げたし、これに呼応して、国内からも大々的な募金運動が展開され、いまだに継続されている。

これまた、血が水よりも濃いという同胞愛の価値ある証明そのものである。いまやそのいかなる術策によっても在日同胞の、故郷を探し、家族に会おうという所望を折るとか、防ぐことはできなくなった。人間が最も従うほか

ない自然の理致は、人為でどうにかできる道理ではない。こうして、在日同胞達の母国訪問は列をなしているのである。

時恰も本国は、酷寒期を迎え、暫らくの間水銀柱が零下十度を上下する気候が継続しているが、数十年ぶりに母国と家族を尋ねて来た帰省同胞達を迎える国内同胞達の温かい歓迎は、これまで彼らが海外でなめた心の寒さを快よくぽかぽかと融かしても余りあるものと確信する。

そして、どうかすると、辛い寒さからむしろ帰省同胞達は、数十年前に触れた母国の体臭を、一段と強く呼び起こすかも知れない。母国のあらゆるものが彼らにとっては、そうしたどうにもできない身にしみる懐しさの全部なのである。

（三）

昨年、秋夕省墓団第一陣が来た折の歓迎会で、朴順天女史が「これからは誰が何と言っても別れないようにしよう。そうするため、皆さんが日本に帰る時、必ず祖国の土をひと握りつつ持って行くことを勧めます」と嗚咽する声で訴えた時、満場の帰省同胞達が全員、ハンカチで顔を覆い、感極まって泣いた光景を回想させる。

このような祖国と、このような祖国同胞達は、このように帰省同胞達の母国訪問を温かく歓迎している。我々は帰省同胞達に、昨年秋夕省墓母国訪問同胞達に、初めて言った言葉を再びそのまま伝えたい。

皆さんは、自由に来て自由に故郷と家族を尋ねてみて自由に帰っていく。我々はあの或る群れのように、祖国が「地上の楽園」となったと言い張るようなことはしない。しかし、数十年前に比べ、祖国がいかに変ったかということだけは、充分に見ることができるだろう。そして、そこで何かを感じるだろう。訪問を終えて帰れば、その見て感じた事を在日同胞達に伝えてくれることを望む。必要以上に誇張することも、美化することもなく、真実そのままを伝えてくれることを望むのである。真実に立ってこそ、散らばり、分かれた同胞と祖国の運命を開拓していく上で真の力を合わせることができると信じるためである。

それが、皆さんを温かく歓迎する我々が、皆さんに望む全てなのである。

# 旧正省墓在日同胞を歓迎

## 東亜日報（1月26日付社説）

朝総連系在日同胞旧正省墓団三千名が、母国を訪ねて来ている。三十年または四十年ぶりに祖国の土を踏んだ感慨はもう言葉にできないものがあるだろう。しかし、それは彼らのみの感激ではない。全民族の感激であり得ないわけはない。昨年の秋夕省墓団の訪問以来、継続推進されている朝総連系在日同胞の母国訪問事業は、まず人道主義の観点から世界的に注目を引いている。不幸だった歴史の犠牲者であるこれら離散家族の再会は、いかに強力な権力やイデオロギーも、人間の心を完全に支配することはできないという事実を呼び醒してくれるものだと言えよう。言うならば、それは受難の民族が世界人類に与える一つの教訓となりそうである。

我々は何よりも先ず、人生の黄金期を異域の土で送りながら、あらゆる物質的及び精神的苦痛をなめたであろうこれら同胞達の訪問を心から歓迎する。いかなる経緯であったにしろ、今は朝総連と関連した生活を行いつつも、今日の祖国の姿を自己の目で直接見て、先祖の墓の前に立てば、新たな感懐を感じることになるだろう。そういう感懐の一つ一つが積もって、今後南北離散家族再会を実現する上での下地とならなければなるまい。だから、この人達を迎える家族・親知達は言うまでもなく、一般国民達を失望させることがないよう注意しなければならない。

朝総連系在日同胞の母国訪問は、このように大きな意義を持つ人道主義の事業であるが、それは同時に政治的効果が伴うためである。それは、昨年秋夕以来母国を訪問した朝総連系同胞の大部分が民団系へ移ってきていることからも推測できる。北韓共産主義者達は、あの七・四共同声明を休眠にしてしまい、在日同胞達の間の人道主義事業さえ手段方法を問わず妨害しているが、そうならそうなる程、彼らのうそだけが現われてきてしまうだけだろう。

従って、この機会に民団や関係当局にひとつ提議したいのは、朝総連系の一般同胞だけでなく、場合によっては朝総連の幹部達や朝総連系の事業家達、または学者・文人等の知識人達も母国に一度来て、自由に見て行くよう努力せよということである。

この人達をして組織と金銭、または偏見の束縛から抜け出させるようにすることも当然な課題であると考えられる。しかし、何よりも我々の心を痛めることは、朝総連系在日同胞の中で、母国を訪問したいと心に決めていながら、旅費がなくて意向を達成できないでいる人達が多いという事実である。これに対しては、昨年末から国内外で誠金運動が展開されているが、充分なものとはなっていない。

こういう種類の誠金運動は、他のこととは違って、財閥達や高所得層だけでなく、国民全てがいっぱいのご飯を分けて食べる心掛けでくり広げるようになってこそと思う。今、我が国は真冬の寒さが続いている。長らく旅立っていた人達であるが、比較的暖かい日和の中で育てた彼らの子供達の皮膚に触れる寒さを心の温かさで融かすことによって、なつかしい母国訪問が実り多いものとなるよう願う。

# 在日同胞の旧正省墓

## 中央日報（1月26日付社説）

旧正を控えて、三千名近い朝総連系在日同胞達が、何陣かに分れて続々故国を訪ねて来ている。この人達は、大概解放三十余年ぶりに初めて故郷の土に足をおろす人達である。二十代に故郷を離れた若人達が、帰る時はしわの

ある顔に白髪まじりの姿であった。三十年ぶりに故郷の土を踏んだこの人達を迎える家族達は、一様にのどがつまって言葉をつぐことができなかった。

故郷の土を踏んだ満腔の感懐と、永々として会えないと思っていた家族に会う喜びを、いかに筆舌で形容することができようか。その上、生前に奉ることができなかった父母を、故郷の裏山の墓の前で対面する不孝息子の哀切な心情を、誰が推測できたであろうか。このふびんな情景を単純に民族の悲劇とだけ無心に見過ごしてしまうには、余りにも胸に痛むことではなかろうか。

既に故郷を訪ねた朝総連系同胞達は、家族達と夜通し過ぎ去った歳月の回想の包みを解いて、惜別の心で帰って行った。この人達は一様に今後はしょっちゅう故郷を訪ねることを誓った。この人達は、今や失郷民族ではなく、堂々と故郷を持った人達である。

今回の旧正省墓訪問によって、故郷を取戻した朝総連系同胞は四千名を越す。全朝総連系同胞二十余万名に比べればまだ微々たる数字ではあるが、その秘めた意味は深長である。イデオロギーのために、散らばったこの人達の家族との再会は、まさしくイデオロギーを越えた人間愛の勝利の証拠と言えるものである。

イデオロギーというのは時代に従って変ることもあるが、人間愛の基調となる家族に対する愛は変ることのない原始的なものである。だから、この原始的な愛を否定する政治や制度というのは、人間の悲劇を深化させる単なる桎梏に過ぎない。不幸にも我々の一千万離散家族同胞は、最も辛い別れの痛みの中で既に一世代を送った。悲劇にしては、三十余年という歳月は余りにも長い歳月であった。既に恨みの中で眼を閉じた人も少なくない。同じ分断民族である東・西独は、早くから離散家族の再結合を実現させており、西方世界と共産圏もヘルシンキ宣言以後、人的交流の増大が約束された。

しかし、唯韓半島のみは、離散家族の恨みが解ける展望は暗くなるばかりだ。同じ体制の対立の中でも、ゲルマン民族が解決できることを韓民族が解決できないとするなら、大きく見て我が民族の羞恥でないわけがない。

しかし、こうした羞恥の遠因を綿密に追ってみると、これは全体的に北韓共産主義者達の教条的頑固性のためで

ある。北韓赤十字会は離散家族の再会のための我が側の現実的提案を、いわゆる「条件環境論」という先行条件をうち出して全面拒否している。北赤の条件環境論というのは、南韓で共産主義を合法化し、間諜活動及び共産党の組織と宣伝を許容せよというものである。離散した家族の生死を確認し、手紙を交換し、互いに会おうというのに何の先行条件が必要だというのか。

既に朝総連系在日同胞四千余名の母国訪問で、彼らの主張の虚構性は明白となった。「条件環境」が変らなくとも彼らは自由に家族や親知に会って帰ったのではないのだろうか。

この人達の故国訪問の後には、国内の同胞達の鉄火のような声援があった。それに比例して今やっと細々とあけられたこの道まで塞ごうという北傀を朝総連組織の悪辣な策動が強化されている。しかし、このように順理に逆行する共産集団の策動は、自らの非人間性のみを現わすだけで、結局失敗してしまうだろう。

今、初の歩みである離散家族再会の機会が、朝総連同胞のみならず、南北韓の間に全般的に拡大する日がどうか来るように皆が充分な努力を行うべきである。

# 同胞帰省団に要望する

## ソウル新聞（2月3日付社説）

三千名近くの朝総連系在日同胞達が、今度の旧正を期し、帰省団の名で前後四陣にわたって、各々が欲した故郷の土を訪ねた。三十～四十年の隔絶を埋めた肉親達との涙の相逢、祖国の真の姿に初めて対したいっぱいの感激等、

連日報道されているこの人達の母国訪問消息は、我々をしてその心情を推測しても余りある感動を感ぜしめている。それだけ血は水よりも濃いためであろうか。我々は、この感動こそ誰も防ぐことの出来ない人間本然の常情であり、直ちに一つの血筋の民族のみが持つ同胞愛であることを極力実感しながら、今母国を訪ねる帰省団同胞達に幾つか歓迎と激励の意を伝えようとするものである。

先ず、我々は朝総連のあらゆる執拗な妨害工作をおしのけて、ひたすら自由意思により母国訪問の途を択したこの人達の決断と勇気を褒心から讃揚して止まない。

昨年朝総連系同胞達の秋夕省墓事業が成功したことに大きくあわてた北傀は、「今度の旧正には、ただ一名の訪韓者も出すな」という厳重な指示を朝総連に下すと同時に、先月十七日には萬景峰号を日本横浜に送り、旧正帰省の阻止工作を陣頭指揮し始め、朝総連はこのような指令下、去る一月中旬頃からあらゆる組織事業を中止して、一人当り五名の対象者を分担させ、脅迫、恐喝と戸別訪問を反復させるなど、必死的な妨害をくり広げてきたものようである。

しかし、南韓は生地獄である。そこへ行けば生きて帰れない、と宣伝していた彼らの言葉は、既に先般の秋夕と新正に母国を訪問した一千六百余名の同胞達によって、法外のうそであることが逐一暴露され、まさしく彼ら組織内には「朝総連にこれ以上だまされるわけにはいかない」との民族的自覚の波が起きている。今度の帰省団一行中、金日成勲章までとったことがあったが、「人間の道」に従うほかなかったという滋賀県朝銀副理事長李亨植氏の場合、「取り戻した我が祖国に骨を埋めたい」と述懐した京都市朝銀総代盧吉夫氏の場合、「同胞二世達にうその教育を行ってきたのが呵責される」と後悔した朝総連高校教師権重錫氏の場合等がこれを雄弁に立証している。

人間が自分の生れた故郷を訪ね、三十年以上も生離別した肉親に会い、先祖の墓の前に祭礼をあげることほど、自然の道理と応当な権利がまたとあろうか。北傀と朝総連は、こうした道理にそっぽを向き、権利を踏みにじっている。それは、徹頭徹尾虚偽と逼迫で厳格に閉鎖された彼らの社会が、真実と自由の前に一朝に崩れることを恐れているためであることは、改めて言うまでもない。従って、このような策術を蹴って、遂に人間となった道理と権

利を取戻す朝総連同胞達の母国訪問は、早くからそうあらねばならない、真に立派な壮挙としないわけにはいかない。

次に、今度母国を訪ねたこの人達に特にお願いしたいことは、直接見て感じた祖国の真の姿を、そして理念や思想を超越して挙族的に温かく迎えた故国々民の同胞愛を、事実そのままに在日同胞社会に知らせてほしい、ということである。我々は、朝総連の経済的圧力によって母国訪問の意を果すことができずにいる在日同胞達のため、その間困難な暮しの中からも、無慮九億ウオンにもなる誠金を集めて送っている。また、来たる五日にはソウル国立劇場で今度の旧正省墓団のための歓迎大会を開く準備を行っている。

ここには何らの仮飾があるはずがなく、ひたすら離散家族の切ない精誠のみが込められているだけであることを深く認識してくれるよう望む。

自由と平和の中に発展を重ねている祖国の実像を見て、初めて感じた民族的矜持、人道的問題が政治的非理よりも優先することを実証した同胞愛、これは単に今回の帰省団同胞達だけが保管する実りであるだけでなく、在日同胞全てに平等に分けなければならない貴い母国の贈物なのである。

# 心と精神

## 米・ニューズウィーク誌（1月19日付）

米誌「ニューズ・ウィーク」（一月十九日付）は、民団の推進している朝総連同胞帰郷墓参事業をとりあげた。

これは「心と精神」という見出しの記事で日本発。民団からはもちろん、朝総連側からも取材し、双方の見解を併記する形になっているので、朝総連側のいう誇張した数字もそのまま紹介されている。が、「このような（民団の）努力が朝総連側を大きく狼狽させる一部の問題を提起しているのは間違いない」とし「朝総連の宣伝（韓国に対する）が全般にウソでないにしても、私が直接目撃したところによれば（韓国は）良い点が九〇％で一〇％程度が悪い点だった」という、朝総連同胞墓参団員の言葉で結んでいる。記事全文を紹介する。

数日間、韓国と「北」は六十万在日同胞の忠誠心をめぐって熾烈な宣伝戦を展開して来た。最近だけをとっても、「北」の積極的攻勢に押され、このような競争は一方的なゲームのようであった。

「北」は一九五八年以降、ざっと六千七百万ドルの資金を朝総連を通じ、在日同胞社会に投入して来た。このような資金は、在日同胞を共産主義化させようとする各種計画と、団体に投入されたのはいうまでもない。

朝総連の場合、東京都内に現代的な五階建ての本部を置き、工作をして来ているが、大学一個を含む百六十一個の学校を運営しており、在学生数は五万余名に達すると彼らは推算する。朝総連はまた、十四個企業体と三十八個信用組合を網羅する金融王国を傘下にしたがえている。

朝総連のスポークス・マンは、このようなすべての活動の結果、在日同胞の三分の二が「北」を支持すると主張している。しかし、ソウル側は、民団という在日韓国人団体を通じ、朝総連会員たちを韓国に招請、家族親知を訪問するようにし、さらには韓国の社会や経済的発展を見せて、生きた証拠を直接目撃させることにより、朝総連の宣伝に反撃を狙い始めた。

さる九月、このような故国訪問計画が本格的に着手されて以後、民団幹部たちによれば、一千五百ないし一千八百人の朝総連会員たちが韓国を訪問し、そのうち、一部はこのような体験に基づいて韓国側に移籍した。

〃朝総連は、韓国にはこじきがいっぱいいて、米軍に占領され、食べる米もない〃と悪宣伝をしていると、呉敬福民団事務総長はいう。しかし、韓国から帰って来た人たちは、このような宣伝がウソで極一部を除いてはその間、

朝総連に欺されて来たことを悔い、韓国の驚くべき発展に感動していることもつけ加えた。民団幹部たちは、朝総連側が故国訪問を妨害しようとあらゆる手段を動員して来たが、失敗したと明らかにした。

呉事務総長は、訪韓の日程が決まるや、朝総連側は朝総連系大学の門を閉め、学生たちに朝総連会員宅を一軒ずつ訪問させ、韓国に行けないように妨害して来たと語った。呉氏は次のように明らかにした。

「韓国に行けば逮捕され、日本に帰って来れないと脅した。もしくは、韓国に行こうとしている人に、韓国が赤化統一されれば、あなたが韓国を訪問したという事実は、反逆行為とみなされるだろうという脅迫をした」

民団幹部たちはまた、朝総連系信用組合に債務のある朝総連会員たちが韓国から帰って来た後、債務を即時償還しろと、報復を受けたと主張する。

これに対し、わかりきった話であるが、朝総連幹部たちは民団のこのような新たなイニシアチブが成功しないだろう、と断固否定した。民団が出した数字は「すべて虚偽であり、全然根拠がない」と朝総連常任委員会の朴在魯副議長はいう。「一部、わが団体の会員たちが行ったのは事実かも知れない。しかし、彼らは直接自分の眼で韓国の悲惨な状況を見るために行った人たちだ」ともいった。

いずれにせよ、ソウル側は朝総連会員の故国訪問計画をめぐって確実に一大宣伝攻勢をすすめている。

民団は現在、旧正月に際しての韓国訪問墓参団に三千人の同胞を募集しようと試みており、このような計画の一環として韓国と日本においては、故国を訪問したいが旅費がなくて行けない同胞たちを助けるために募金運動を展開している。

このような努力が、日本内韓国人社会に対する朝総連の拠点を深刻に動揺させるかどうかは、異論の余地があるしかし、この訪問計画により、故郷に行って来た在日同胞は「朝総連の宣伝が全般にウソでないにしても、私が目撃したところでは、良い点が九〇%で、一〇%程度が悪い点だった」と打ち明けた。

■報道■

# 母国で旧正月を

## ＝日本紙が大々的に報道＝

### ■朝日新聞（1月25日朝刊）

旧正月にふるさとの墓参りをするため、朝鮮総連系の在日朝鮮人一行が二十四日、韓国に到着した。朝鮮半島の南北分断を反映して約六十万といわれる在日朝鮮人は、韓国系の大韓民国居留民団（民団）と、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）系の朝鮮人総連合会（総連）に分かれて対立しているが、この日の墓参団はその対立を超えての里帰りといえる。

この日正午すぎ、大阪からの第一陣二百四人が金浦飛行場に降り立ち、空港で出迎えの肉親と三、四十年ぶりの再会を喜びあった。ソウル市内を見物のあと大田市、浦項製鉄所、慶州の古跡などを見て釜山で解散、そのあとそれぞれのふるさとを訪れる。

今年一月三十一日の旧正月を前に帰国する総連系墓参団は合計二千五百人にのぼる予定。

南北の離散家族さがしの交渉が行き詰まったあと、韓国政府と民団は、韓国に故郷を持つ総連系在日朝鮮人の里帰りをすすめており、旅費などの一部の経費を補助するため韓国では募金運動が繰り開げられている。これまでに七五年の秋夕（お盆）のときの七百人をはじめとして、千六百人が韓国を訪れている。

## ■毎日新聞（1月24日夕刊）

三十一日の旧正月を前に、在日朝鮮人の「母国訪問団」の第一陣二百四人が二十四日午前十時半、大韓航空機でソウルに向け、大阪空港を出発した。

在日朝鮮人（韓国人）の出身地はほとんど〝南〟だが、故郷で旧正月を祝い、先祖の墓参りをしたいという願いが日本の外人登録で「朝鮮」籍を持つ人をふくめ実現したもので、数十年ぶりに祖国の土を踏むお年寄りや、日本で生まれ、初めて母国を見る若者たちがほとんど。両手いっぱいにみやげものを抱えた家族連れが午前七時過ぎから同空港国際ロビーに集合。パスポートの交付を受けたあと、粉雪の舞う大阪を離陸した。

この日は三便計約四百人が出発したが、関西からは二十七日まで八便に分かれ九百十人（在日韓国居留民団調べ）が出発、二週間の日程で韓国を訪問する。

## ■読売新聞（1月24日夕刊）

韓国の旧正月（一月三十一日）をふるさとで――と二十四日、関西の駐日朝鮮人四百六十七人が、大阪空港から大韓航空機で一時帰国した。関西からは二十七日までに約千人がはじめての母国訪問に出発する。

韓国在日居留民団大阪地方本部（黄七福団長）の説明によると、この訪韓団は「朝鮮総連系の同胞」で、祖国の分断によって韓国出身でありながらこれまで帰国出来なかった人たち。在日の一世たちにとっては三十年、四十年ぶりの里帰りが実現した。

朝鮮半島の緊張を反映して在日韓国人、朝鮮人の間にも〝分断の壁〟が厚かったが、在日居留民団では「七・四共同声明（四十七年）に基づき、「民族の大同団結、人道主義の見地から思想や理念を超えて、離散家族の再会に踏み切った。過去の組織活動、資金提供といった前歴は問わず、母国訪問にも一切の条件や制約をつけていない」といっており、この交流を平和統一への足がかりにしたいと期待している。

第一陣の出発は午前十時三十分。小雪がちらつく中、臨時便で二百六人が飛び立ったが「まずお墓参りをしたい」という人ばかり。三十九年ぶりに慶尚南道咸安へ帰る八十歳の老人(兵庫県尼崎市在住)は母親の遺骨を抱き「二度と帰れないと思っていた。祖国の実情をこの目でしっかりと見てきたい」と話し、趙一済・在大阪韓国総領事や黄団長らの拍手に送られてタラップを上った。

一方、この訪韓について朝鮮総連はさる十三日、韓徳銖議長が大阪で記者会見し「在日同胞の中に分断と対立を作り出す破壊策動」との声明を発表している。

## ■関西テレビ(2月29日放映)

朝総連同胞旧正月墓参団のうち、一月二十五日を前後して出発した二千五百人は、すでになつかしの故郷で家族と対面し、墓参を終えて帰日、二月三日に出発した墓参団は、きょう十三日をピークに帰国するが、墓参団一行の韓国でのもようが十一日、フジTVの主婦向け番組を通じて日本全国の家庭に届けられた。

午後三時からの主婦向け番組「三時のあなた」では、墓参団に同行取材したフジTVスタッフの撮ったフィルムが放送された。

三十年ぶり、四十年ぶりの故郷を機中から熱い視線で見おろす墓参団員をクローズ・アップした場面から放映された同番組では、六歳の時に別れた姉と四十年ぶりに再会した金準燁さん、八十四歳の老母に妻と子を見せるために故郷を訪ねた崔桂扶氏一家、三十年ぶりに両親と弟を訪ねる李外令さん、夫婦で故郷・慶北迎日郡九竜浦の父、姉に会いにきた申大坤氏が登場し、感激の再会場面が流された。

また、同番組では、沿道で手をふって歓迎する人々の姿や、いたるところに高層ビルが建ち並んだソウル市街、現代造船所や精油工場に驚く墓参団員の表情を写しだし、旧正月の歳拝や、ユンノリ、ノルティギなど韓国の風俗も伝えた。

一方、関西テレビでは二月二十九日の日曜日午後四時十五分から三十分間、前朝総連滋賀朝銀の副理事長李亨植

氏をテーマにした「四十一年ぶりの里帰り」を放映、視聴者に感銘を与えた。

■評論■

# 平和統一の契機に

金山政英（元駐韓日本国大使）

韓国が提唱した南北会談や、南北赤十字会談などが進展していない中で、北鮮系在日韓国人の墓参団事業は韓国の統一問題について歴史的な契機になるでしょう。これまでの数回の墓参で韓国の実情を知り、理解することによって北鮮に対する信用は失われつつあると思います。

また、出発前に墓参団に対し朝総連から圧力や反対運動があったと聞いていますが、組織の力よりも祖先や親類縁者に対するきずなの方が強かったわけです。

# 第五部　もう離れまい

‖国民の声‖

□各界から□

# 皆んなを太極旗の下に

金　弘　壹（独立闘士）

我が国が解放されて三十年間、国民達や政府が取った反共政策は厳格な方法で、防共、勝共の範ちゅうを越すことができなかった。だから共産主義者達が多くいる国外でも共産党と言えばそれに接触するとか対話することも禁止して来た。即ち、共産主義者と言えば一つの血筋の同胞でも口をつぐんで往來を絶断させたのである。これは勿論、共産主義思想や間諜の浸透を防止するため止むを得ざる措置だった。

しかしその方法は比較的消極的であった。我々は共産党と交流したとしても自身の主義主張が確立され共産党であっても祖国の懐に誘導できる確固たる信念を持っていたなら、彼等をして転向するようにすることが反共戦線で採用されなければならないと思う。昨年秋夕から在日僑胞、特に共産系列である朝総連支配下にあった僑胞達を本国に招請したことは、以上のような意味で真に誇らしい事業であった。

赤十字会談を通じて離散家族の相逢、省墓、書信住来等の初歩的な協議も北傀の拒否で一つも成事できなかったことをいま我々が先手をうって在日共産系僑胞から先ず実践し、彼等をして共産党の対韓中傷謀略宣伝がうそであることを白日下にさらけだし、祖国の懐に帰るようにしたので、その効果は実に大なるものである。

これを周旋した在日居留民団に感謝し、今後もこの事業が一層成就して在日僑胞全体が大韓民国の旗の下に集まり祖国に忠誠することを望む。

# 民族統一の基礎作業

尹　天　柱
（ソウル大学校総長）

朝総連系在日同胞達が旧正月に、母国を訪問して省墓を終えて帰った事実は私をしてこの時間までもこの上ない喜悦の中で祖国の意味を私に再吟味せしめる。私は平素、彼等こそ我が民族史の悲劇を代表する同胞だと考えて来た。この三十年の間、彼等がなめた苦労はさておくとしても、どうして異国の土に生きることになったかという事実だけをとって考えてみても、彼等がいかに祖国への郷愁をこらえ辛棒すべく気苦労したか、推測に余りがある。

彼等に故郷への足をしばる原因が何であろうと、それは民族良心の指弾を受けて当然のことだろう。政治理念がいかに至厳であろうと、どうして人間本性を限りなく抑圧することができるのか。この度の在日同胞の母国訪問はまさにそういう意味で民族史に記録される快挙といえよう。

我が民族の統一問題は、独特な性格の課題である。一つの血筋としての愛情を再び確認して、そこからでた本能的集結力があらゆる思想、制度等に勝ち抜くその時点がまさしく統一の日だといいたい。従って、我が同胞は誰もが民族史の正統性をよく保管している大韓民国に尋ねて来て純潔な倍達民族の血筋を再確認し、祖国の土の匂いを身中にいっぱい詰めて行くことを望んで止まない。それは切断された民族の血管を再びつなぎ、国土の土塊を再び混ぜる基礎作業ではなかろうか。

# 私の江山よ

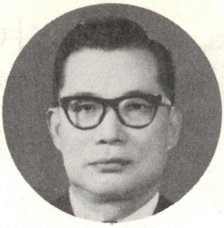
李孝祥（共和党議長署理）

その間、いかに朝総連に欺されてきたかを知ることができる。彼等の脅迫、狡猾にいかに抑圧されてきたのだろうか、彼等のもつ謀略中傷にいかにいじめられてきたのだろうか！

そうして母国は暗黒と貧困と独裁と圧迫と暴力のみが乱舞している世相と信じていたところ、来てみるとそうでない、本当におどろく発展と繁栄と自由と秩序と平和と幸福を音のままに享有できる我が母国なのだ、我々が夢にも忘れなかった母国が、このように立派に発展された姿を見て誰が歓喜と感激の涙を流さないだろう。

これこそ大韓民国の奇蹟でなくて何であろうか！　三十年、四十年振りに母国を尋ねた人がいる。今後政府は今年末までに一万名をさらに訪問させるようにしたいという。どうかたくさん来られて母国を見ていって下さい。

# 平和統一の可能性



白斗鎮（維新政友会会長）

二つだけははっきりしている。

一つは、故陸英修女史の遺恨がまだ消えていないのに祖国を背にして生きてきた同族を暖かく迎えた自由国民の寛容と政府当局が取った人道的処遇は民主韓国政府としての真面目を万邦に鮮明にし、これは、非人道的北傀集団が同胞を抑圧でくくりつけているが、外面上無言ではあっても実際はこれに承服している者は極めて少数であることを確信する。

獣でも「首邱初心」を持っており、人間として「飲水思源」の深い意味を先天に悟るはずである。くぼみにできた小さな泉が溢れて江を成して海に至るように、この祖国と共に民族の永遠さを切感させる。

# 共産支配生活を清算する時

白樂濬

（延世大名誉総長）

在日朝総連系同胞達を祖国に招請してくることはどこからみてもいいことです。政府の施策からもそうであるし、在日民団の事業としてもそうであるが、その上に久し振りに祖国を尋ねてくる同胞達にとっても感激的なことであり、我が国民にとっても切れていた血筋を再びつないだ喜びを与える好事でありました。

朝総連系在日同胞達にとっては北傀共産党の支配下の生活を清算する時が来ました。さらに欺すこともできないでしょう。昼が明るくなったので狐も消える時なのです。少しは欺すだろうが、全部をあざむくことはできず、たまに欺すことはできても、常にあざむくことはできないという有名な言葉があります。在日朝総連系同胞達は総て常に欺されることはないと思います。

# 故郷は久遠のメッカ

朴忠勲

（韓国貿易協会会長）

自己が生まれた故郷の山川を求めることは人間にとって強烈な本能である。故郷は我々人間達の久遠のメッカなのである。

日帝侵略の靴音が騒がしかったその当時、豊かな生活基盤を奪われ、未知の日本の土へと移っていった在日同胞達が、過去三十年の長い歳月の間一度も故郷の土を尋ねてくることのできなかった事実は、一つの哀絶な人生ドラマというには余りにも苛酷な現実である。その恨み多き三十年の歳月を朝総連の欺瞞戦術の鉄鎖に苦しんでいた在日同胞達の、夢の

中で描いた所願が達成され、故郷の山川を訪ねたのである。金浦空港で三十年振りに再会した親せき達とのどをつまらせた在日同胞達の涙は、思想の葛藤と憎悪の障壁をうちこわして、我々の民族的宿願である平和統一課業を達成する原動力となることを確信する。

# 生き甲斐ある明日への出発

太　完　善

（大韓商工会議所会長）

此の度、朝総連系同胞たちの母国省墓訪問は、人間悲劇の中で最も恨めしく苦しい離散の痛みを解いてくれた、人間愛の貴重な勝利の記録として非常に意義深いことである。そのうえ、朝総連系同胞たちが此の度の母国訪問を通じ、知らぬ間に発展した母国の真の姿を見て感激しながら、その間彼らが朝総連のあらゆる嘘偽宣伝に欺されたことを痛嘆しているのを見る時、もう一度一千万離散家族の苦痛にそっぽを向いている北傀の非人道的な処事に憤怒を禁じ得ない。

何とぞ比の度の朝総連系在日同胞たちの旧正省墓団母国訪問が、彼ら自身は勿論、その家族と隣人たちの生甲斐ある明日の新生活を開いてくれる画期的な始発点となり、またこれが契機となって未だに北傀の嘘偽宣伝に欺され呻吟している同胞たちに祖国の真の姿を知ることができる道となり、ゆくゆくは我が赤十字離散家族再会のための人道的努力の結実が速く達成されることを祈願して止まない。

# 付録

## 1　南北共同声明（全文）

最近、平壌とソウルで、南北関係を改善し、分断された祖国を統一する問題を協議するための会談が開かれた。

ソウルの李厚洛中央情報部長が一九七二年五月二日から五月五日まで平壌を訪問して平壌の金英柱組織指導部長と会談、金英柱部長を代理して朴成哲第二副首相が一九七二年五月二十九日から六月一日までソウルを訪問して李厚洛部長と会談した。

この会談で双方は、祖国の平和統一を一日でも早く実現しなければならないという共通の念願に基づいて虚心坦懐に意見を交換し、たがいに理解を増進させるうえで大きな成果をあげた。

この過程を通じて、双方は、長い間の断絶の結果として生じた南北間の誤解と不信を解消し、緊張の高潮を緩和させ、さらには、祖国統一を促進させるため、つぎのような諸問題について、完全な意見の一致をみた。

一、双方は、つぎのような祖国統一原則に合意した。

第一、統一は、外勢に依存したり外勢の干渉を受けることなく、自主的に解決しなければならない。

第二、統一はたがいに相手側に反対する武力行使によらず、平和的方法で実現しなければならない。

第三、思想と理念、制度の相違を超越して、まず同一民族として民族的大団結を図らなければならない。

二、双方は、南北間の緊張状態を緩和し、信頼の雰囲気を造成するため、たがいに相手側を中傷、誹謗せず、大小を問わず武装挑発をせず、不意の軍事的衝突事件を防止するための積極的な措置を取ることに合意した。

三、双方は、断絶していた民族的連繋を回復し、たがいに理解を増進させ、自主的平和統一を促進させるため、南北間で多角的な諸般の交流を実施することに合意した。

四、双方は、現在、全民族の大きな期待の中で進められている南北赤十字会談が一日も早く成功するよう、積極的に協力することに合意した。

五、双方は、突発的軍事事故を防止し、南北間で提起される諸問題を直接、迅速かつ正確に処理するため、ソウルと平壌間に常設直通電話を架設することに合意した。

六、双方は、このような合意事項を推進するとともに、南北間の諸般問題を改善、解決し、また、合意した祖国統一原則に基づいて国の統一問題を解決する目的で、李厚洛部長と金英柱部長を共同委員長とする南北調節委員会を構成、運営することに合意した。

七、双方は、以上の合意事項が、祖国統一を一日千秋の思いで渇望している全民族の一様な念願に符合すると確信しながら、この合意事項を誠実に履行することを全民族に厳粛に約束する。

李　厚　洛

金　英　柱

一九七二年七月四日

## 2、南北調節委員会

### ——副委員長会議中断の経緯——

一九七五年五月二十九日、平壌側はソウル側あての電話通知文で五月三十日の第十一回副委員長会議の無期延期を一方的に通告しながら、その理由は、大韓民国が『反共騒動、勝共騒動、滅共　動などで南北間の緊張状態と戦

争雰囲気を鼓吹しているため』であると主張した。
特に、インドシナ戦争終結後の南北関係の現実様相をおいてみるとき、平壌側のこのような主張は、実に理不尽で不当な言い掛かりとしかいえない。
五月三十日の第十一回副委員長会議が流産するに及んで、ソウル側の李東馥スポークスマンは声明を発表、次のように平壌側主張の不当性を反駁した。
『実にあきれ返った事実の転倒としか言いようがない。ベトナム失陥を前後して、北韓側が武力による赤化統一の野望を遂げる目的から、ベトナム戦型の武力南侵を企図するため、隠密のうちに兵力と火力を休戦ライン一帯に集結させ、空軍と海軍を前方に前進展開し、東西両海面で攻撃的な挑発をほしいままにし、非武装地帯のトンネル堀りを継続して推進するなど、無謀な戦争挑発準備に狂奔している事実は、北韓共産主義者たちの動向を注視している全世界の耳と口によって、否定する余地がないほど客観的に立証された事実である。にもかかわらず、北韓の最高当局者は、最近、北京とルーマニア、アルジェリアなど歴訪しながら、『戦争が起これば、失うのは軍事分界線で、得るのは統一』とか、『インドシナの次に崩壊するのは南韓』とか、『南韓で革命が起これば、決して座視しない』とか、『南韓から米軍を追い出したあと、必ず赤化統一を達成してみせる』などと、挑発的で好戦的な発言をためらわなかった。北韓共産主義者たちが今、どういう妄執にとらわれており、どういう陰謀を画策しているかは、われわれも知っており、そして、全世界も知っている公知の事実である。
われわれは北韓共産主義者たちのそのような無謀な企図を見破り、国民総和を土台に、強力な国防態勢を固めることによって、北韓共産主義者たちが誤判によって再び同じ民族の流血を強要する戦争を挑発するのを未然に防ぐことに万全を期している。
しかも、南北調節委員会ソウル側は、これまでの副委員長会議で、北韓共主義者たちにトンネル工事などすべての戦争挑発準備行為をただちに中止し、武装スパイの南派など、いわゆる対南暴力革命の妄想を即時放棄することを促すとともに、南北の間で安定した平和を固め、真の平和統一を指向する共同努力を実らせるため、一日

も早く南北調節委員会の運営を正常化させることを力説し、今もそれを力説し続けている。

結局、北韓共産主義者たちが今回の第十一回副委員長会議を一方的に流産させた魂胆は、副委員長会議で彼らの無謀な戦争準備様相が取り上げられ、それを客観的に立証するかずかずの物証が提示されて、弁解の余地すらない窮地に追い込まれるのを恐れるあまり、副委員長会議そのものの開催を忌避しようとするものであると、われわれは断定せざるをえない』

七・四南北共同声明発表三周年の前夜である七月三日、平壌側は金英柱共同委員長の名で声明を発表、大韓民国に対する悪意に満ちた誹謗と中傷を浴びせながら、『南北対話を再開するためには、「南朝鮮当局者」たちがその「根本姿勢」を直さねばならない』と強弁し、南北対話の条件として①在韓米軍の撤退②大韓民国の反共政策の中止③インドシナ戦争終結後、強化されている大韓民国の諸般国家安保措置の撤回などを要求した。平壌側はまた、同声明で『万一、「南朝鮮当局者」たちがこのような要求を受諾しない場合には彼らが退陣して「心から祖国統一を指向する愛国的民主人士」たちが政権の座につかねばならない』と主張し、そうなってこそはじめて『南北対話を進めることができ、祖国の自主的平和統一の道が開かれるだろう』と言っている。このような事実は、平壌側の当面目標が大韓民国の転覆打倒であって、決して対話の再開ではないことを明白にしたものにほかならない。

ソウル側の張基栄共同委員長代理は、七月五日、平壌側の金英柱共同委員長あてに、延期された第十一回副委員長会議を七月十五日に開くことを提案する電話通知文を送り、これに先立って、七月九日には声明を発表、最近の南北関係様相に憂慮を表明した。張共同委員長代理にさらに、悪化している南北関係を改善するため、一九七三年六月の第三回会議以降、引きつづき正常的な運営が停止されている南北調節委員会第四回会議を、光復三十周年にあたる八月十五日以降に無条件開催して、中断状態にある南北調節委員会での南北対話を再開しようと提案した。この声明で、張共同委員長代理は南北調節委員会の運営正常化問題に関する見解を次のように披瀝した。

『南北調節委員会を正常化するうえで、南北双方の間の新しい合意を必要とするのは、第四回会議の日取りだけである。第四回会議の開催場所は、すでに合意した順序によって平壌なのであり、したがって、会議の開催日

さえ決まれば、私とわが方の委員一同はとどこおりなく会議に臨むつもりである。

平壌側は七月三日、金英柱共同委員長名儀で声明を発表、対話中断の責任を逆にわれわれの方に転嫁しようとしたばかりでなく、南北調節委員会正常化問題には一言半句も触れずに、いわゆる「大民族会議」「南北政治協商会議」をやろうという、常套的な主張だけを繰り返した。

われわれは今、南北調節委員会という既存の対話機構を持っている。にもかかわらず、北韓側は既存の対話機構は差し置いて、何と、数百人ないし数千人の大人数が参加する「群衆集会」式の「大民族会議」とか「南北政治協商会議」とかいうものをやろうと、荒唐無稽な主張をしている。

北韓共産主義者たちは、離散家族たちの哀切な苦痛を人間的な見地から優先的に解決してやるための赤十字会談までも、理不尽な政治的主張を打ち出して膠着させることにより、天下の人倫までも政治的目的達成のための犠牲にしているということは、わが国民がすでによく知っている事実である。その彼らが、既存の対話機構は拒みながら、話にもならない「大民族会議」とか「南北政治協商会議」というものを持ち出しているのは、つまるところ、彼らの意図が真の対話には何ら関心がなく、ただ一つ、彼らの追求している対南暴力革命の手段と方便としてだけ対話を利用しようと、汲々していることを立証するものである。

周知のように、南北調節委員会は南北双方が厳粛に署名、合意した「南北共同声明」と「南北調節委員会の構成および運営に関する合意書」に根拠をおいて、統一問題を含む南北間のすべての問題を協議、解決する機能と任務と責任を持っている。したがって、対話に臨むわれわれの基本立場は、南北間のすべての問題は双方の合意によってすでに構成されているこの対話機構内で提起され、論議されなければならないというものであり、それこそ、ほかならない七・四南北共同声明の基本精神なのである。私は、そういう意味で、北韓側が即時かつ無条件に、対話の広場に戻っていることを、あらためて強力に促すものである』

しかし、平壌側の反応は、依然として否定的であった。平壌側は七月十四日、ソウル側にあてた電話通知文で、第十一回副委員長会議を七月十五日に開こうというソウル側の提案を一言のもとに拒否しながら、大韓民国が①六

・二三平和統一外交政策宣言を取り消し②反共政策を中止し③自立国防態勢を強化する努力を中止してこそ、はじめて南北対話の再開は可能であるという従来の立場をいま一度反復した。

張基栄ソウル側共同委員長代理は八月八日にも、第十一回副委員長会議を八月二十五日に開くことを提案する電話通知文を平壌側に送ったが、平壌側は今度はその可否はともかく、回答すら寄越さなかった。

ソウル側の張基栄共同委員長代理はさらに十月十三日、平壌側の金英柱共同委員長に電話通知文を送り、平壌側が相次ぐソウル側の対話再開提案を拒否し続けていることに大きく遺憾の意を表明しながら、南北調節委員会運営の早急な正常化を今一度促した。張共同委員長代理は、南北調節委員会第四回会議が双方の既存の合意によって平壌で開かれる番であるにもかかわらず、平壌側がその開催を拒否しているため、南北調節委員会の運営が二年間も中断されているという事実を指摘したうえで、『もし平壌側に、同会議を平壌で開けないだけの事情と立場があるなら、第四回会議を双方の間の中立地帯である板門店で開こう』という妥協案を示し、この問題を論議するために、第十一回副委員長会議を十月二十日に開くことを提案した。張共同委員長代理の十月十三日付け電話通知文の要旨は、次のとおりである。

『われわれの南北関係が直面している昨今の現実に照らしてみるとき、あなた側の態度は、実に深刻な憂慮を醸しているといわざるをえない。あなた側はすでに一九七三年八月二十八日、南北調節委員会の正常的な運営を一方的に中断させて以来、七・四南北共同声明を真正面からじゅうりんしながら、わが方に対するあらゆる暴力と軍事挑発をほしいままにして、南北間の緊張状態を激化させてきた。しかも、今年春のインドシナ戦争終結後、あなた側は武力による統一問題解決を公然と豪語しているかと思えば、新たな戦争挑発の口実にしようとする明白な企図のもと、大韓民国内での暴力事態の発生を教唆、扇動するのに血眼になってきている。今、南北調節委員会副委員長会議の開催までも拒否しているあなた側の態度を、以上のようなこれまでのあなた側の全般的な動向と結び付けて考えるとき、私は、あなた側の態度に対する深い憂慮を表明せざるをえない。

あなた側は南北対話を拒否する理由として、わが方の内外政策に言い掛かりをつけながら、いわゆる対話再開

の条件というものを固執するかと思えば、他の一方では、大韓民国の現政府とは対話をすることができないというなど、不当な詭弁を弄している。

今、南北の間には、解決しなければならない問題が山ほどあり、それらの問題は直接当事者たちである南北双方の対話と協議、そして合意によってのみ解決が可能なものであるため、南北対話が必要なのである。一九七二年七月四日、南北双方が合意して厳粛に署名、発表した南北共同声明は、ほかでもないそのような南北関係の現実認識に基づいたものであり、祖国の平和的統一を達成する過程で解決すべき問題を処理するための南北共同機構として、南北調節委員会を発足させたのである。南北双方が一九七二年十一月四日に合意、署名して内外に公表した「南北調節委員会の構成および運営に関する合意書」は、南北調節委員会の機能が①自主的平和統一の実現②南北間の政治的交流の実現③南北間の経済的、文化的、社会的交流と協力の実現④南北間の軍事的緊張を緩和する措置の講究⑤対外活動にあたっての共同歩調推進―などであると明文で規定している。

私が引用した二つの文件は、われわれ双方が順守することを厳粛に誓約し合った歴史的文書である。われわれ双方には、これら合意文書の明文条項を誠実に順守しなければならない義務がある。これら合意文書に忠実であるためには、当然、合意文書の関係明文条項に基づいて南北調節委員会を誠実に運営しながら、南北の間で解決すべきすべての問題を南北調節委員会内で提起し、協議し、妥協して、双方がともに同意しうる円満な解決を追求していかねばならないはずである』

しかし、平壌側はまたもや張基栄共同委員長代理の提案を拒否した。平壌側は十月十七日、ソウル側への電話通知文の中で、今度は、インドシナ事態後、国内外の憂慮に満ちた注目の対象になってきた北韓の武力南侵脅威が、大韓民国によって「でっち上げられたもの」であることを「認めよ」と強弁し、南北対話を再開するためには、大韓民国が『反共政策を「連共政策」に変えなければならない』と主張した。

ソウル側の李東馥スポークスマンは、十月二十日、平壌側のこのような不当な態度に対して、つぎのような声明を発表した。

『平壌側は十七日付け回答電文で、わが自由大韓の理念と体制、国防態勢、そして六・二三平和統一外交政策に対する常套的な誹謗を繰り返しながら、これら大韓民国の対内外政策の「廃止」または「撤回」を南北対話再開の前提条件として主張したばかりでなく、今度は一歩進めて、「南北対話が再開されるためには」大韓民国が、「反共政策を連共政策に変えなければならない」などと、南北共同声明に違反する主張までするにいたった。

いうまでもなく、われわれの国防態勢は北韓共産主義者たちの間断のない武力南侵野望を抑制して韓半島の平和を守り、南北の五千万同胞をして、もう二度とは同族が血を流し合う戦禍をこうむらないようにする戦争抑止力である。われわれの反共政策は、大韓民国の自由民主主義社会を暴力で転覆、共産化しようとする北韓共産主義者たちの間断のない陰謀と策動を封鎖することにその目的がある。六・二三平和統一外交政策は、現実状況の与件の中で、祖国の真の平和統一を達成しうる最も現実的で、合理的で、かつ賢明な統一接近政策である。これら政策は、大韓民国の生存と安全、そして韓半島の平和を確実に守りながら、真の平和統一を促進させるための必須不可決な要素である。

このようなわれわれの対内外政策に平壌側が言い掛かりをつけるのは、それ自体が不当千万な内政干渉行為である。しかも、南北対話を一方的に中断させておいて、対話のワクの外でそういう一方的で不当な主張を対話再開の前提条件として打ち出している平壌側の態度は、七・四南北共同声明と南北調節委員会の構成および運営に関する合意書を根底から破棄する行為であると、われわれは糾弾せざるをえない。

それればかりでなく、平壌側が南北対話正常化の条件として、われわれの反共政策を連共政策に変えることを要求したことは、彼らがわれわれと対話をする目的が、韓半島の平和や南北関係の改善など真の平和統一の追求にあるのではなく、ただ一つ、大韓民国の共産化を追求することにあるのを明白に自認したものである。このような平壌側の態度は、結局、平壌側の企図が南北間の懸案問題を対話を通じた合意によって解決しようというのではなく、対話に名をかりてその野望をわれわれに強要しようとするものであることを立証したのにほかならず、その点平壌側は南北共同声明に真正面から違反しているといわざるをえない。平壌側はこういうふうに、「平和統一」う

んぬんという宣伝が欺瞞に満ちた偽りの宣伝に過ぎないことを自らさらけだしたのである』

## 3、南北赤十字会談

### ——赤十字実務会談の経過——

大韓赤十字社代表団は、長い間中断されている本会議を早急に再開し、本会談議題の実質的な討議を進めるため、北韓側の肯定的な呼応を促すものであります。

しかし、遺憾なことには、あなた側はわれわれが討議、解決することになっている実務会議の議題、すなわち、本会談の早急な正常化と本会談議題の予備的討議について、いわゆる「雰囲気問題」「条件環境論」などといった先行条件を引きつづき固執しながら、同胞たちが期待している赤十字人道主義事業の実践を忌避する立場を取っています。

私は(韓国側代表)前々から、南北の一千万離散家族たちと五千万同胞の心からの念願を無視するあなた側の誠意のない会談姿勢が一日も早く是正されねばならないということを、重ね重ね促した事実があります。

私は今日、南北赤十字本会談の無条件かつ早期正常化と一千万離散家族さがし事業を早急に実現するため、あなた側の誠意ある態度をいま一度促さないわけにはいきません。

まず、本会談再開問題について述べると、あなた側も承知しているように、南北赤十字本会談が中断された原因は、一九七三年七月、平壌で開かれた第七回本会談以降、あなた側が合意したとおりにソウルで開かれるはずの第八回本会談を継続して拒否しているところにあります。大韓赤十字社代表団は過去二年間、第八回本会談を無条件、かつ早急にソウルで開くことを重ね重ね促し、実に五回にわたって具体的なソウル会談の日取りを提案、あなた側

代表団の会談参加を丁重に招請しました。しかし、あなた側はその都度、第八回本会談の開催を拒否しました。

あなた側が第八回本会談のソウル開催を拒否する口実は、「雰囲気が悪いため、ソウルで開催する人道主義会談に参加することはできない」というものでした。

あなた側のこのような対話拒否的な口実は、事実とは違うばかりでなく、自家撞着の矛盾を自ら犯しています。

第一に、あなた側のそのような主張は、双方間の厳粛な合意事項を一方的に破棄し、対話中断の責任を会談の相手側になすりつけようとするものにほかなりません。

南北赤十字双方は一九七一年十月六日の第三回予備会談で、「本会談はソウルと平壌で交互に開催」することに合意しています。

また、一九七三年七月、平壌で開かれた第七回本会談でも、第八回本会談は当然「ソウルで開催」し、ただ、会談の日取りだけは後ほど決定することに合意しています。あなた側はこのような明白な合意事項に違反して、「ソウルの雰囲気が悪いため、第八回本会談に参加できない」と主張しています。万一、あなた側が合意事項を修正したいなら、「雰囲気」うんぬんという口実を設けて対話中断の責任を相手側に転嫁しようとする小細工を弄すべきではなく、まず本会談を開催し、その本会談の席上で正々堂々と合意事項の修正を申し入れるのがあたりまえであるはずです。

第二に、あなた側はソウルで開かれた南北赤十字本会談に、すでに三回も参加した経験を持っており、私たち大韓赤十字社代表団も四回も平壌会談に参加した経験を持っています。

ソウルと平壌の間を往復した南北赤十字双方のこのような十分な会談経験は、すなわち「雰囲気問題」のために「本会談再開に応じられない」という、あなた側の主張を正当化することができないことを立証しています。

第三に、ソウルはあなた側の主張のように「会談雰囲気が悪いところ」ではなく、かえって平壌よりも良いところです。

あなた側も何度かソウルに来て直接目にしたように、大韓民国の首都ソウルは、すべての条件や施設面において、

世界のどの都市と比べても劣るところのない、自由で開放的な都市として発展を続けています。
去る五月十九日から三十日まで、十五ヵ国にのぼるアジア太平洋地域青少年赤十字指導者大会がソウルで盛大に行われ、赤十字事業の国際協力分野で立派な成果をあげました。
そのほかにも、ソウルでは大規模な国際会議と行事がひっきりなしに開かれており、ソ連、中国、東欧など共産国の市民たちも自由に出入国ができます。
にもかかわらず、ただひとり、あなた側の代表団だけはソウルに来られないと主張しており、わが方の丁重な招請にもかかわらず、アジア・太平洋地域青少年赤十字指導者会議にすら参加しませんでした。これはとりもなおさず、南北赤十字本会談の正常化を遅延させ、離散家族さがし事業を故意に忌避しようとするあなた側の腹の内を、そっくりそのままさらけだしたものとしか解釈のしようがありません。
南北赤十字会談を長い間注視してきたわが同胞たちと全世界は、あなた側のそのような理不尽な言い掛かりと、ウソにだまされるほど愚かではないということを、あなた側は悟らねばなりません。
私はそういう意味で、あなた側があなた側自身の不当な会談姿勢を是正し、今のような詭弁と責任転嫁発言を中止し、合意事項を順守して、早急にソウル会談に同意することを促すものであり、そうすれば、大韓赤十字社代表団は、引きつづき平壌で開かれる第九回本会談に喜んで参加するだろうことを、ここにはっきりさせておきます。
私はいま一度、同胞愛と赤十字人道主義の名で、南北赤十字本会談を無条件早期正常化するためのあなた側の誠意を促しながら、第八回本会談が一日も早くソウルで開かれるよう願ってやみません。
つぎに、私は一千万離散家族を一日でも早くさがしてやるための本会談議題の実質的討議における、われわれの立場を明らかにしたいと思います。
大韓赤十社代表団は一九七一年九月以来、あなた側と会談を始めたその日から、離散家族の問題を実質的に解決しようという立場から、まず、彼らが要求している緊急な問題と実現可能な事業から、一つ一つ討議解決することを主張するとともに、それに伴う具体的な解決方案を提示してきました。

わが方は一九七二年十月、第三回本会談で、議題第一項「南北に離散した家族と親せきたちの住所と生死を確認、通報する問題」を解決するため、まず、双方の赤十字機関が主管する尋ね人事業方式を提案しました。

これは、離散家族たちの自由意思によって、当事者たちが要請する尋ね人依頼書と尋ね人回報書を南北赤十字社が相互交換し合うもので、国際的にも広く通用されている普遍的な尋ね人事業方式です。

ところが、あなた側は何と「法律的条件と社会的環境改善」が先に解決されなければ、離散家族さがしには応じられないという政治的な条件を持ち出して、離散家族さがし事業の実質的な進展を阻みました。

あなた側のこのような主張は、離散家族問題を人道的な次元で解決しようとするのではなく、大韓民国を共産化するための術策として人道主義問題を悪用しようというものでした。

あなた側のこのような不当な態度により、その後、会談は膠着状態に陥ってしまいました。しかし、大韓民国赤十字社代表団は一九七三年七月の第七回本会談で、離散家族問題の早急な解決を欲する同胞たちの期待にこたえ、会談の膠着状態を打開するために、「南北離散家族と親せきたちで構成される墓参訪問団を、民族的な祝祭日である秋夕を期してたがいに交換しよう」と提案しました。

もし、あなた側がほんとうに人道主義問題を解決しようとする姿勢だったら、このような「秋夕墓参訪問団の相互交換」は、何ら前提条件なしに受け入れることのできる提案でした。

しかし、あなた側はこのようなわが方の人道主義的な提案と要請を、いわゆる「枝葉末節的な問題」という理由で拒否し、離散家族と同胞たちの切ない念願を踏みにじってしまいました。

一千万離散家族たちの問題を人道的に解決しようとするわが側の誠実な努力は、本会談が中断されてからもたゆまずに続けられました。

わが代表団は一九七四年七月十日、板門店で開かれた第一回実務会議で、離散家族問題の全般的な解決にそっぽを向いているあなた側の態度とあなた側の事情を考慮して、まず、老父母を対象にした家族さがしだけでも始めようと提案し、これを具体的に実現させるため、板門店に離散家族たちの面会所と郵便物交換所を即時設置すること

も提案しました。しかし、あなた側はわれわれのこのような提案までもいわゆる「条件・環境」を口実にして受け入れなかったのであり、その後、われわれが提案した離散家族間の写真交換事業まで反対しました。こうして、南北赤十字会談が始まって満四年が過ぎた今日まで、尋ね人事業をやりたくないというあなた側の立場のために、いまだに空転だけを続けています。

北韓赤十字会代表のみなさん！

私は、南北一千万離散家族たちと五千万同胞が、そして全世界の平和を愛する国民たちが、今、何を心から願っているかを、あなた側がいま一度冷静に熟考しなければならないと思います。

彼らは、あなた側がいわゆる「条件・環境論」のような政治的問題を南北赤十字会談の席で取り上げることより、人道主義会談を遅延させるのを欲しておらず、大韓民国を共産化するための戦略戦術の一環として人道問題を犠牲にすることも、決して容認はしないはずです。

彼らは何よりも南北に離散した肉身の生死と住所を確認し、たがいに手紙をやり取りし、また、自由に会えるようにしてもらいたいという人道的な問題の解決を熱望しているのであり、そうすることによって、この国で緊張緩和と平和定着が実現することを切に願っています。

南北に離散した家族たちをさがしてやり、彼らの再会を斡旋してやる人道的事業は、どこまでも法律以前、体制以前の崇高な問題です。したがって、誰もこの人道主義事業を政治的に悪用することは許されないし、また、政治的な理由を掲げてそれに反対することも許されません。

大韓赤十字社が一九七一年八月十二日、貴赤十字会に対して赤十字会談を提案したのも、ほかならないこのような人道的目的を達成しようということにありました。

私は、南北の相異なる政治体制や社会環境が、実際には離散家族問題解決に何ら障害にならないだけでなく、むしろ、人道的な事業を一つずつ合理的に展開していくことによって南北間の緊張状態を緩和し、相互間の不信を解消し、平和定着と祖国の平和的統一にも実質的に寄与することができると確信しています。

わが方のこのような一貫した立場と主張がどれだけ正当で合理的なものであるかは、最近、「朝鮮総連系在日同胞訪問」事業を通じて明白に証明されています。

周知のように、大韓民国では、今年の秋夕を期して数十年ぶりになつかしい祖国の土を踏み、忘れていた肉身を取り戻す朝鮮総連系在日同胞たちの感激的な母国訪問が大々的に展開されました。

思想と理念を異にしていた一千人以上の朝鮮総連系在日同胞たちが、すでに秋夕を前後して故郷を訪れており、これからも彼らの母国訪問は続くことでしょう。

このような朝鮮総連系在日同胞の母国訪問は、彼らに事実上の第二の光復の歓喜を抱かせてやった民族的なよろこびごとであるといえます。

それはすなわち、一千万離散家族たちのこれまでの苦痛を実質的に解決してやろうとする大韓民国のたゆまぬ努力が実を結んだものであり、われわれが推進してきた南北離散家族さがし事業が在日同胞社会で先に実現したことを物語るものでもあります。

われわれはこの事業を通じて、わが大韓民国には離散家族問題の解決を阻害する何ら条件や環境も存在しないということを、直接当事者たちの証言を通じて確認しました。

われわれは過去、本意ならずも祖国大韓民国に背を向けて暮らしてきた在日同胞たちに対して、彼らの過去と現在を一切不問に付し、いつも故国の土を自由に踏むことができ、また、自分の血肉と自由に再会することができるよう、あらゆる人道的な措置と配慮を惜しんでいません。

先月から本格的に始まった朝鮮総連系在日同胞たちの母国訪問は、終始一貫、感動と驚嘆の連続でした。彼らは故国の第一歩をしるしたときから目覚ましい祖国の発展相を目撃して自分の目を疑い、数十年ぶりに会った家族、親せきたちと歓喜の涙を流しながら、祖国での第一夜を語り明かしました。そして、たがいに顔すら忘れてしまうほどになった老父母と娘が、兄と弟が、たがいにひしとだきあって再会の喜びを分かち合いました。

このような情景は、離散家族たちのこれまでの苦痛がいかほど辛いものであり、再会の喜びがいかに大きいもの

であるかを見せてくれた、真に感動的な情景であったといわざるをえません。

夢にも忘れられなかった故郷の山川を訪ね、夢にも忘れることができなかった家族と親せきたちに会い、祖先の墓参までした彼らが、日本に帰りながら残した言葉は、一様に「もう死んでも思い残すことはない」というものでした。

大韓民国を誹謗する虚偽と欺瞞の宣伝の中で暮らしてきた彼らは過去を後悔しながら、おくればせながら祖国を取り戻すことができたのが何よりもうれしいと語り、一日も早く南北赤十字会談が妥結して、南北の離散家族たちも同じようなよろこびに浸れようになることを願っていました。

このように、彼らは祖国の山川を自由に旅行し、なつかしい家族と親せき、旧友たちを訪ねたのち、全員無事に日本に帰りました。

彼らが故郷を訪ねるとき、祖国のふところはつねに彼らに向かって開かれており、自由に訪ねてきて自由に旅行し、そして、自由に帰ることができるでしょう。

これはとりもなおさず、わが大韓民国には離散家族問題の解決を阻害する何ら条件や環境も存在しないという事実を明白に立証したものです。

これはまた、「法律的条件と社会環境がまず改善されなければ、一千万離散家族さがし事業はやれない」というあなた側の主張の虚構性を立証するものであります。

私はまた、去る九月二日、あなた側の海域で発生した日本漁船松生丸に対する銃撃・拉致事件について、この機会に一言述べざるをえません。

われわれはこの事件について、はたしてそのような銃撃および拉致事件がいかにして発生し、どちら側に過失があったかをただすつもりはありません。ただ、われわれは、日本漁船に対する銃撃・拉致事件の処理過程で取ったあなた側の態度を注目してきたのであり、それと関連していくつかの重大な事実を指摘せざるをえないのです。

第一に、あなた側は事件直後、日本漁船松生丸に対して、それが「日本の漁船ではなく、大韓民国の船であると

誤認して銃撃を加えた」と公式発表しました。
われわれは、あなた側のこのような公式発表を重大視しないわけにはいきません。
大韓民国の船なら、それが漁船であると遭難船であると問わず、無条件銃撃を加えるというのですか？　それがあなた側のいう同胞愛であり、人道主義であるというつもりなのですか？
われわれは、あなた側のそのような反民族的、非人道的な思考方式に唖然とせざるをえません。
第二に、あなた側は漁船員送還問題においても、非同胞愛的で事大主義的な態度を取りました。
大韓赤十字社は一九七四年二月十五日、西海の公海上で操業中、あなた側に拉致されたわが漁船守元三十三号の船員を送還してくれるよう、数回にわたって要求し、それがむずかしいなら、せめて家族たちとの面会か手紙の交換でも認めてほしいと要求しました。
しかし、あなた側は事件発生から一年半も経った今日に至るまで、それについて一言の返事もありません。あなた側は、日本の漁船員たちは事件発生後十日も経たないうちに送還し、死亡者には補償金まで支払いながら、同じ民族である大韓民国の漁船員は「スパイ」にでっち上げて、一年半以上も抑留監禁しています。
それればかりではありません。
あなた側は旅客機二機を拉致、その乗客と乗務員をいまだに抑留しており、これまで、三十隻余りの漁船と四百人余りの漁船員を拉致しておいて、その生死すら知らせてくれません。
われわれは、あなた側に拉致、抑留されているこれら漁船員と乗客、乗務員の生死を知らせてくれるとともに、早急に送還してくれることを、重ね重ね要求した事実があります。
いかなるイデオロギーや政治体制も、それが同じ血筋を切り離すことはできないし、人道主義事業を妨害することはできません。南北の現体制や環境がいくら異なってはいるにせよ、われわれは同胞愛と赤十字人道主義の精神でそれを克服しないわけにはいきません。
北韓赤十字会代表みなさん！

今、われわれはこれ以上南北赤十字会談を遅延させることはできないし、同胞愛を忘れ、一千万離散家族と同胞の念願を無視することはできません。

私はそういう意味で、つぎのような早急な実践を、あなた側に要求します。

第一に、南北間の緊張状態を緩和し、相互信頼を回復するための一つの措置として、あなた側が拉致、抑留しているわが方の乗務員たちの近況を知らせてくれるべきであり、早急に送還してくれなければなりません。

第二に、一九七三年七月に平壌で開かれた第七回本会談以降中断状態におかれている南北赤十字本会談を、無条件かつ早急に正常化しなければならず、第八回本会談は双方が合意したとおり、早急にソウルで開催し、引きつづき第九回本会談は平壌で開催しなければなりません。

第三に、南北赤十字双方が討議、解決することにした本会談議題第一項「南北に離散した家族と親せきたちの住所と生死を確認、通報する問題」を、前提条件なしに、具体的かつ実質的に討議、解決していかねばなりません。

万一、あなた側の事情により、本会談議題第一項全般に関する討議が困難であるとか、わが方が提案した普遍的な赤十字尋ね人事業をまだ受け入れることができないというなら、つぎのような緊急な人道的事業に、まず着手しなければなりません。

一、南北赤十字双方はわが民族固有の祝祭日である秋夕と正月を期して、まず「墓参訪問団」を相互交流するようにし、その第一次事業を一九七六年の正月を期して実施する。

二、南北赤十字双方は、一千万離散家族のうちでも、まず「老父母とその家族」を対象とする尋ね人事業を実施し、彼らの便宜を図るため、板門店に「面会所」と「郵便物交換所」を共同で設置、運営する。

大韓赤十字社代表団は、最近の朝鮮総連系在日同胞母国訪問事業が成功的に実現された実例に照らして、以上のような人道的事業が何ら障害なしに実現できるものと確信しながら、貴赤十字会の誠意ある呼応を促してやみません。

■表　紙　50年前に別れた金班尹氏（67・名古屋市居住）と金粉尹さん（75・ソウル冠岳区奉天洞378）の姉弟は金浦空港で劇的に再会し、白髪の老顔に感激の涙に咽んだ。

■裏表紙　㊤鉄馬は北に走りたい。1945年遮断された京義線の鉄道中断点。
㊦38度線境界の標石。韓民族悲劇の象徴でもある。


# 肉親の叫び

朝総連系在日同胞旧正省墓団訪韓記録

1976年4月10日発行

発行所　東和新聞社
大阪市東区博労町5丁目27番地
電話　(06)251―0237～9

**定価 500円**

印刷　サンケイ印刷株式会社

철도중단점
철마는
달리고싶다
철도청

三
八
線